

資料と考察 宮沢賢治『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況

木村東吉

一 はじめに

本稿では、宮沢賢治の『春と修羅』第二集所収作品の創作日付の日の気象データを整理し、その日の気象状況と作品との関連性を検討する。

これには、二つのねらいがある。一つは、作品につけられている創作日付の日の気象状況が作品の内容に反映されている場合が多いことを確認し、創作日付の意味を明らかにすることである。もう一つは、前者の結論を踏まえて言えることだが、作品成立に関する背景資料を提供し、作品の一つ一つの成立過程も含めた理解に便宜をはかることである。

「創作日付の意味を明らかにする」とは、次のようなことである。宮沢賢治の詩作品では、おおむね一九二二年一月から一九二七年九月まで、創作日付がつけられている。このうち一九二二年一月から一九二三年一月までの作品から選んだものが、『春と修羅』として生前に出版された。以後の作品は、一部雑誌等に発表されたものもあるが、その改稿形も含めて多くは原稿のまま残された。『校本宮沢賢治全集』では、創作日付と作品番号がつけられた作品のうち、一九二四年一月から一九二六年一月

までの日付を持つ作品を『春と修羅』第二集とし、以後のものは、詩稿用紙に記されたものを『春と修羅』第三集として、ノート用の用紙に記されたものを『詩ノート』としてまとめている。作品によっては同じ時期のものでも、創作日付と作品番号の無いもの、繰り返し返される改稿のすえにこれを失うものもあるが、これらについては同じ口語詩の逐次形であつても、『春と修羅 詩稿補遺』等として別に扱っている。

このような整理の中で、一般に、賢治詩の創作日付は作品が完成した日の日付ではなく、作品の素材あるいはモチーフが得られた日であると言われているが、なお詳細に見れば問題が残されている。

『春と修羅』第二集・第三集および『詩ノート』の作品には、作品番号も付けられている。この作品番号の順序と創作日付の順序は必ずしも一致していない。作者の単なるミスと思われるものもあるが、すべてがそうとは思えない複雑な錯綜がある。『春と修羅』第二集でいえば、作品番号も日付も同じであるため、『校本全集』で「野馬がかつてにこさえたみち」との逐次形とされている『母に云ふ』と『遠足許可』のように、複数の作品と見られるものがある。『産業組合青年会』と『命令』のよう

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

に、同じ作品番号であっても創作日付の違う作品もある。このほかには、作品番号に比べて日付が後ろにずれるものが多いが、「ふたりおんなじさういふ奇様な扮装で」や一八四番『春』のように逐次形で二つの創作日付をもつもの、「北上川は焚気をながし」や「その洋傘だけでどうかかなあ」のように、下書稿と定稿が日付と番号を異にするばかりか、定稿のほうが下書稿より作品番号が若くなっているものもある。そしてさらに、今まで述べてきたような錯綜はあるにしても、巨視的に見れば、創作日付順に二番から五二〇番まで大体日付順に番号がつけられてきたものが、五二〇番以後突然三二六番にかえって、改めて四〇三番まで繰り返されるが、前半の番号と後半の番号に重なりは少ない。これらのことから、創作日付と作品番号の関係が従来謎とされてきた。

筆者は別稿において、これらの錯綜は、作者のミスと見られる例を除いて、多くは一連のメモから成立した作品に同一の番号がつけられ、そのモチーフに改稿過程で新しい素材が取り込まれた場合、加えられた新しい素材を得た日の日付が与えられることで生じたものと推定した¹。このように見ると、『春と修羅』第二集では同じ作品番号九〇番をもつ「祠の前のちしゃのいろいろした草はらに」と『風と反感』との番号重複の理由と、後半の番号繰り返し返しの理由がわからないのを除き、すべて納得がいくからである。

その場合に取り上げた作品については気象資料との照合によって、創作日付は作品の素材を得た日であることを確信したのであるが、本稿では、『春と修羅』第二集のすべての作品について創作日付の日の気象データを照合することで、この点を確認したい。一部の作品のみでは、信憑性に多少の問題が残るからである。

草野心平が賢治作品に雲の表現が多いことを指摘しているのをヒント²に気象データに注目したのであるが、盛岡気象台の前身に当たる盛岡測候所が設置された一九二三年九月以降のデータと作品を比較して見て両者に一致するものが多く、逆に矛盾する場合も、意図的虚構が推定できる場合を除いて、それが風の方向や時雨の有無などに限定されることに気づいた。ただ、このような調査をもとに、創作日付の日が作品の素材を得た日であることを論証するには、立論上困難な点が多々ある。

作品に表現された内容が常に気象情報を豊富に正確に反映したものであるとは限らない。詩人のいう心象スケッチとは、「鉄道線路と国道が」の下書稿（一）『陸中の五月』で「これは所謂芬芳五月の／昔ながらの唯心日本の風景です／（中略）／たびびとのこゝろのなかのそのけしきで／（中略）／共業所感そのものとして推移します」と述べているのが、その一面を示唆しているであろう。外界を見て、そこに内面の投影を見て「共業所感」と捉えるところに作品が成立することをこれは暗示する。そうであれば、気象状況が作品に反映するのは自然だが、作品の表現と気象データの語ることの重なり具合には、作品ごとの濃淡が当然ある。『比叡（幻聴）』や『鬼言（幻聴）』などの場合は、作品中に気象状況を読み取れる表現が無いということもある（これらには、逆に両作品とも雨が降り続く日の作品という興味深い共通項もあるが）。関連が微かなものも多い。そのわずかな表現と限られたデータとを結び付けてみても、これで個々の作品の素材が、確実にその創作日付の日に得られたものであるとすることはできない。気象状況は一日のうちでも様々に変化するし、厳密に言えば地域ごとに違う。その中のごく短時間の限られた現象だけが、作品に取り入れられるからである。そのうえ、個々の事例がい

かにびつたり一致しても、それが少数例であれば、類似した気象状況は他の日にもあつたはずで、理論的には他の日に取材し、別の理由で創作日付がたまたまその日になったことを否定できない。その意味で気象状況と作品に表現された事象の一致は、あくまでも作品の素材がその日に取材されたことの蓋然性を示唆するにすぎない。さらには虚構の可能性も常に考慮されなければならない。繰り返される改稿の過程での変化についての問題もある。

しかし、二枚の絵が全体として重なるなら、部分的にはぼやけていても下絵が同じであると判定される。おなじように、詩集全部の作品にその創作日付の日の気象状況が明確に反映されていなくても、多くの作品で関連が確認され、関連がない場合でも大きな矛盾がないのであれば、総合的に見て創作日付の日は少なくとも作品の素材の一部が得られた日という意味の可能性が高いと考えてよいであろう。煩瑣ではあるが、本稿であえて『春と修羅』第二集のすべての作品についての資料を掲げたのは、この点を確認するためである。

さらに本稿では、『春と修羅』第二集所収作品の創作日付の日、あるいは深夜の作品の場合はその翌日の気象データをあわせて整理し、これと作品の初期の表現を重視して、両者の関連について考察した。作品の定稿と下書稿とが日付を異にする場合は、その両方の日のデータを掲げ、創作過程を考察する資料とした。作品の場面になつてゐる場所もできるだけ特定し、作品の創作過程を明らかにすることにとめた。

気象状況を面として把握するため、盛岡測候所（現在は盛岡地方気象台。以後現在の通称に従つて盛岡気象台と略し、他の気象台もこの例に従う）の資料を主としつつ、作品の場面が盛岡・花巻付近である場合は

臨時緯度観測所（現在の国立天文台地球回転研究系水沢観測センター。以後通称にしたがつて水沢天文台と略す）のデータを、作品の場面が青森・函館付近である場合は青森気象台、函館気象台のデータを、三陸地方である場合は宮古気象台のデータを組み合わせて掲載した。

この結果、以下に示す資料によって明らかのように、創作日付は少なくとも作品の素材の一部を得た日であるとの確信を深めることができた。創作過程において複数の創作日付が与えられた作品の場合は、気象状況との関係で見える限り、結果的にはそのうちの一番遅い日付を持つことになるのだが、出来上がった作品世界には、複数の日の状況から生まれた表現が重層的に組み込まれることも明らかにすることができた。その代表的な例が「ふたりおんなじさういう奇体な扮装で」と「北上川は焚気をながし」とである。ここにこの詩人の創作方法の一端が窺える。

また、この作業を経て、『春と修羅』第二集所収作品の創作日付は、その素材を得た日を意味し、はるか後日の改稿にもなつて創作日付が改められた場合でも、その新しい創作日付は、改稿に利用された素材を得た日を意味することが確かめられた。これは後日の改稿にも日付をもつたメモが利用されていることを暗示している。このことが明らかになるならば、作品は現象の写実ではないが、ここに掲げた資料は、個々の作品の表現が成立する背景の資料として作品の理解にも一つの示唆を与える重要な資料となるはずである。

この調査で、次のようなことも明らかになつた。月齢の表現について見ると、例えば『春と修羅』第一集の『風景とオルゴール』と『風の偏倚』とは同日の日付を持つ作品だが、前者には「六日の月」とあり、後者には「五日の月」となつてゐる。また、第二集の『発電所』のように、

実際は旧暦一〇日の月であるはずのものを二〇日の月と書いた例もある。これは詩人が虚構としてそうしたというより、月を視覚で捉えた月齢で判断しているからであり、旧暦に疎い感覚を持つていたことを示している。同時にまた『函館港春夜光景』の場合のように、下書稿(一)では、事実即して霧の奥で見えないように表現をしている月を、下書稿(二)では実際には月齢一五・二の月であったはずなのに、「残りはいくらい七日の月」とした例もある。ここには、虚構が推定される。

月が明るい夜の作品が意外に多いことも、今回の調査で気づいたことである。『春と修羅』第二集の隠れたモチーフとして月があるのは、夜を歩いた詩人として当然かもしれないが、第一集とは異なる特色として興味ある事実であった。煙霧のある日の作品が多いことも、作品から漠然と印象されていたことを裏付けることになった。青の詩人の背景が見えてきた思いである。

今回の調査が、新たな問題を提出する面もあった。時雨の降り方や、風の吹く方向については、作品に表現されたものとデータとが一致しない場合がある。これをどう読むかが微妙な問題になる。しばしば作品の舞台になる花巻は、同じ北上平野の中にあっても盛岡から南へ約三〇キロの距離があり、水沢は更に約三〇キロ南になる。この二つの資料の間にもずれが当然ある。地上の風の強弱やその方向に至っては地形や場所も影響する。残されたデータが詩人の周辺の風の状態を常に正確に語ってくれるとは限らない。この点を考慮するとき、月齢の場合のように、データと作品の表現との相違を直ちに詩人の作意によるとすることができるかどうかという問題である。こうした問題は、作品個々の成立過程の状況調査と作品の解釈を通して考えるほかない。今後の検討課題とし

たい。

二 資料について

データは、盛岡気象台、水沢天文台、青森気象台、函館気象台、および宮古気象台から頂いた。

観測方法の違いなどから保存されているデータの違いがあるため、表の項目や観測時間は一致しないが、適宜選択した。

データの表記方法も、必ずしも統一されていないので、今回の整理では現在のマニュアルを参考にして筆者が修正統一したものがあつた。

データは、適宜選択整理した。特に記事(remarks)に関しては、作品との関連を考慮し、筆者が興味を持ったものについて記した。「記事と考察」の欄を設けて、データにある記事と、筆者のコメントを記したが、ここには掲げられなかったデータも利用しながら述べた部分がある。

記号で記されたものを言葉に直し、霧と雨の記号が併記されている場合は霧雨としたり、月や日の暈の濃淡、霜の強弱などは省略するなど、一部要約したものもある。

表の記号は、次の注を参照されたい。

注 a 天候の記号の意味は次の通りである。

○快晴 ①晴れ ◎曇り ●雨 ✕雪 ●および三霧

b 日照時数はデホルダン式による。

c 降水量は、一時間ごとに測定されたものは、一時間値であり、四時間ごとに測定されているものは、四時間値である。

d 雲形の記号の意味は次の通りである。

C 巻雲 Cs 巻層雲 Ck 巻積雲 Kc 高積雲 Sc 高層雲

Sk層積雲 N乱雲

K積雲

Kn積乱雲

S層雲

なお、雲の記号は、現行のものとなるため盛岡地方気象台のマニュアルにしたがって注記した。雲形は、量の多い方から記載してある。

この注の作成にあたっては盛岡地方気象台の工藤萬氏の教示を得た。

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
N 7.8	Sc	10	-	-1.3	2
N 11.1	Sc	10	-	-1.9	6
NNW 8.4	Kc	8	-	-1.2	10
N 3.3	Cs	10	-	0.7	14
S 4.7	N	10	0.0	-0.3	18
WSW 1.6	Sc S	10	0.2	-1.2	22

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
N 2.8	Sk Sc	10	-		☉	1
WNW 2.3	Sc Sk	10	-		☉	2
NE 1.5	Sc Sk	10	-		☉	3
NE 2.1	Sc Sk	10	-		☉	4
NE 3.4	Sc Sk	10	-	-	☉	5
S 2.9	Sc Sk	10	-	-	☉	6
NE 1.4	Sc Sk	7	-	-	⊙	7
SE 1.5	Sc Sk	7	-	0.15	⊙	8
NNW 2.4	Sc Sk	6	-	0.85	⊙	9
NW 1.9	Sk Sc	0	-	0.80	○	10
S 2.3	Sc	1	-	1.00	○	11
S 2.9	Kc Sc	9	-	1.00	☉	12
SSW 1.6	Sc	9	-	0.85	☉	13
SSW 3.0	Sk Sc	10	-	0.35	☉	14
SSW 5.8	Kc	4	-	0.05	⊙	15
S 8.1	Sk Sc	5	-	0.80	⊙	16
S 7.9	Sc S	10	-	-	☉	17
S 9.3	N	10	0.0	-	✕	18
S 6.8	N	10	0.1	-	✕	19
S 4.9	N	10	0.2	-	✕	20
W 2.7	Sk	1	0.0		○	21
WNW 7.1	Kc	10	-		☉	22
NNW 6.8	Ck Sk S	8	-		☉	23
W 4.8	Sk	1	-		○	24

一九二四年二月二〇日 『空明と傷痕』 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 霜21―24。月光冠23・30―23・50。結氷24。水沢 煙霧22―。夜積雪。

作品の場面は、花巻市の北上川に架かる朝日橋付近と想定される。

この日の月は旧暦一月一六日の月。月齢は一五・一。

水沢で夜、煙霧が観測されている。「川面にも森にも山脈にも月にも／西域風の古い澎氣がいつぱいで」と描かれた雰囲気は実景に基づいたものであろう。

盛岡と水沢では時間が少しずれているが、わずかに雪も降っている。「燦々として析出されて氷晶」と下書稿(一)の手入形で表現された情景が、月夜に雪が降る様を言ったものと理解される。マイナス一〇度以下で発生するといわれる氷霧ではないようである。盛岡の最低気温も撰氏マイナス五・二度である。

b 水沢天文台データ

時刻	気温	降水量	雲量	雲形	風向風力
2	2.1	-	8	Sk	N 5.4
6	1.2	-	9	Sk	NE 1.4
10	6.6	-	2	Sk	W 2.8
14	7.0	-	10	Sk S	W 1.3
18	4.4	-	8	Sk	W 4.9
22	2.5	-	10	Sk	W 2.3

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

金環さへできてゐる」とあるのは、夕方雲が一部きかされてい様子を示しているであろうが、水沢のデータとも符合する。

『五輪峠』では、「薄墨の雲につらなり／酵母の雪に朧ろにされて／海と湛える藍と銀との平野である／雪がもうここにもどしどし降ってくる」とあるが、盛岡にも、午後降雪があった。峠で時折雪が降っても不自然ではない。

『記事と考察』
 「湧水を吞まうとして」の作品の場所は、明確でない。ただ、下書稿で詩人が湧水を飲もうとして「屋根ふきかへの村人」に晒される場面に「神楽殿」の語がみえる。これからすれば、東和町谷内の丹内山神社付近を想定することもできる。土沢、谷内、瀬田を通り、白土川を遡って五輪峠への道もあったからである。丹内神社の周辺は、「春の青いクレッサ」も育ちそうな地形になっている。

a 盛岡気象台データ

時刻	天候	日照時数	降水量	雲量	雲形	風向風力
1	◎		-	10	Sk	W 2.0
2	◎		-	9	Sk N	WSW 6.8
3	⊙		0.0	7	Sk	N 7.8
4	◎		-	10	Sk	WNW 2.9
5	⊙		-	4	Sk	W 5.8
6	⊙		-	6	Sk	SSW 1.0
7	⊙		-	5	Sk	WNW 1.3
8	⊙		-	3	Sk	WSW 7.7
9	⊙	0.65	-	6	Sk	WNW 5.6
10	⊙	0.50	-	7	Sk	WNW 6.6
11	⊙	0.25	-	7	Sk	WSW 4.5
12	⊙	0.70	-	5	Sk	SSW 3.3
13	◎	1.00	-	10	Sc Sk	S 2.8
14	◎	0.60	-	10	Sk	S 4.2
15	●	-	0.0	10	N Sk	W 3.6
16	●	0.20	0.0	10	N Sk	WNW 2.6
17	×	0.40	0.0	8	N Sk	W 13.1
18	◎	-	0.0	9	Sk	SW 5.0
19	◎	-	-	10	Sk	S 5.6
20	×	-	0.0	10	N	S 1.2
21	×	-	0.0	10	N	S 5.5
22	×	-	0.0	10	N	WSW 3.2
23	⊙	-	0.0	6	Sk	W 7.9
24	◎	-	-	8	Sk	SW 9.5

一九二四年三月二四日

「湧水を吞まうとして」『五輪峠』丘陵地を過ぎる』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
NW 5.3	Sk	3	-	1.7	2
SE 2.5	Sk Kc	7	-	1.0	6
N 12.2	Sk Kc	9	-	4.4	10
N 9.5	Kc C Sk	10	-	5.5	14
W 1.9	Cs Kc	4	-	2.7	18
SSW 0.8	Cs	2	-	-1.2	22

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
W 5.8	N Sk	10	0.0		✕	1
ENE 4.5	Sk	9	0.0		☉	2
ENE 5.7	Sk	9	-		☉	3
NNE 4.1	Sk	10	-		☉	4
NNW 4.8	Sk	9	-	-	☉	5
NE 4.8	Sk	8	-	-	☉	6
WSW 4.4	Sk	3	-	-	①	7
WNW 5.1	Sk	1	-	0.80	○	8
W 9.6	Sk	1	-	1.00	○	9
WSW 10.6	Ck Sk	3	-	1.00	①	10
WSW 9.3	Cs Sk	2	-	1.00	○	11
WNW 11.9	Cs Sk	3	-	1.00	①	12
W 9.7	Cs Sk	2	-	1.00	○	13
WNW 9.3	C Sk	3	-	1.00	①	14
WSW 7.7	C Sk	2	-	1.00	○	15
WNW 7.0	C Sk	1	-	1.00	○	16
N 4.6	C Sk	2	-	1.00	○	17
N 4.7	C	2	-	0.90	○	18
NNE 2.6	Sk	1	-	-	○	19
NNW 1.3	Sk	4	-	-	①	20
NNE 2.7	Sk	7	-		①	21
N 3.2	Sk	8	-		☉	22
N 2.8	Sc Sk	10	-		☉	23
NE 3.4	Sk	10	-		☉	24

3

一九二四年三月二十五日 『人首町』 『晴天恣意』 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

〔記事と考察〕盛岡 波状雲 10・10 | 13・10。結氷 am・pm。水沢 煙霧 霜 22。

「人首町」の作品の場所は、今の米里の町から岩谷堂方面への出口付近。水沢のデータからだけでは分かりにくいのが、この日の水沢の日照時間は一〇・二〇とあり、盛岡のデータを参考にしても好天に恵まれていたことが分かる。

「人首町」の朝日に満ちた風景は、实景に基づくものと理解される。下書稿（一）にも「鉛の雲が湧きまた翔け」とある。昼頃まで風が強かったこの日の様子を反映したものであろう。

『晴天恣意』に「かういふ無風の青ぞらの下」とあるのを見れば、「原体山の右肩あたりに、／＼巨きな白い円錐ができて」とあるのも、水沢で観測されている午後の夕日を受けた塔状層積雲あるいは塔状高積雲のさまを描いたものと理解される。風がおさまったのは夕方だからである。

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
SSW 1.7	Cs	2	-	-3.4	2
NNW 0.5	Kc Cs	10	-	-4.0	6
SSW 2.3	Sk Sc	10	-	1.9	10
SSE 8.9	Sc Sk	10	-	7.0	14
SSW 6.3	Sk S	5	1.0	4.1	18
NW 11.5	Sk	5	-	3.8	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

民から「お見合い電車」と親しまれていた。⁽⁴⁾
 泉から花巻に向かう電車の中。この電車は、車幅が狭いため両側に腰掛けると膝が接するので市
 『早春独白』のみぞれの表現も午後の降水記録と対応している。『早春独白』の場所は、大沢温
 たもつてゐるが」とあるのは、この日強い霜が降りたことを反映している。

とあり、「高常水車の西側から／(中略)／地藏堂の巨きな松まで」とあるので鮎幣神社の南側の
 道路とわかる。「電線は伸びてオルゴールもきこえず」とは、気温が上って電線が伸び、風も弱まっ
 て電線が鳴らないことか。「ひばりはうろこ雲に飛び」とあるのは、盛岡で観測されている波状雲
 の記事と巻積雲を合せ波巻積雲と見ればデータと符合する。下書稿に「湿田とよの面は／まだ水晶を

15・40―16・36。
 『記事と考察』盛岡 波状雲 3・30―4・50、8・45―9・30。雨 14・45―17・20。水沢 霜 雨

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NNE 1.2	Sk	0	-		○	1
SE 2.5	Sk	1	-		○	2
SE 2.9	Sk	0	-		○	3
SE 3.2	Ck Sk	6	-		①	4
SE 4.3	Sc Ck Sk	9	-	-	◎	5
SSE 1.8	Sc Sk	8	-	-	◎	6
S 0.7	Sc	10	-	0.20	◎	7
- 0.1	Sc	10	-	0.30	◎	8
SW 1.5	Cs Ck Sc	10	-	0.10	◎	9
S 3.3	Sk	10	-	0.80	◎	10
SSW 7.6	Sk	7	-	0.90	①	11
SSW 7.4	Sk	3	-	0.70	①	12
S 7.7	S Sk	4	-	1.00	①	13
SSW 7.5	Sk S	10	-	0.65	◎	14
SSW 7.9	N	10	0.0	0.45	●	15
S 8.0	N	10	0.2	-	●	16
S 9.7	N Sk	9	0.2	-	●	17
S 4.9	Sk N	10	0.0	-	◎	18
S 1.5	Sk	6	-	-	①	19
S 2.8	Sk	7	-	-	①	20
WNW 1.2	Sk	3	-		①	21
WNW 5.9	Sk	7	-		①	22
WNW 8.6	Sk Sc	8	-		◎	23
W 2.8	Sk Sc	7	-		①	24

一九二四年三月三〇日 『塩水撰・浸種』、『痘瘡』、『早春独白』 創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
NNE 9.5	Sk Sc	9	-	6.2	2
N 12.3	Sc Sk	10	-	5.0	6
N 3.7	Sk Sc	10	-	6.5	10
WNW 9.1	Kc Sk	10	-	7.1	14
NW 3.2	Sk Kc	6	-	4.7	18
E 1.5	Cs	0	-	-0.2	22

「記事と考察」盛岡 波状雲 7・05―7・15。雪 12・20―12・45。
 盛岡では雪もちらついた寒い日であった。
 作品の場所は、下書稿(一)に「eccolo qua」という言葉があることから推定して、「ドン・ジョ
 ヴァンニ」を室内で聞いているとすれば、「またあかしの棘ある枝を鳴らしたり」ともあること
 から、花巻農学校の宿直室が想定される。
 この日は西よりの風が吹いているので、下書稿の「氷と藍との東橄欖山地から／つめたい風が
 吹いてきて／(中略)／雲の肖像画はゆるやかに北へながれる」と描かれた情景が、データと一致
 する時はない。これは「雲の肖像画はゆるやかに北へながれる」のは室内から見て間違っていること
 ないし、データとも一致することが多い。しかし地上の風は、水沢と盛岡でも違っているように、
 データといつも一致するわけではない。午後は層積雲が出てくるから「積乱雲の肖像」も実景に
 基づくものだった可能性が高い。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
W 7.9	Sk	10	-		☉	1
WNW 7.8	Sk	10	-		☉	2
W 3.4	Sk	10	-		☉	3
W 7.5	Sk	10	-		☉	4
W 5.7	Sk S	10	-	-	☉	5
WSW 4.8	Sc Sk	10	-	-	☉	6
W 3.2	Sc Sk	10	-	-	☉	7
WSW 4.3	Sk Sc	10	-	-	☉	8
WNW 7.2	Sk	10	-	-	☉	9
W 6.6	Sk	10	-	-	☉	10
W 6.5	Sk S	10	-	-	☉	11
WNW 7.9	N Sk	10	0.0	-	●	12
S 4.4	Sk	10	0.0	0.15	☉	13
WSW 5.8	Sk	7	-	0.50	①	14
W 9.5	Sk	7	-	1.00	①	15
WSW 11.2	Sk	8	-	1.00	☉	16
W 8.8	Sk	7	-	1.00	①	17
WSW 5.8	Sc Sk	10	-	0.90	☉	18
SW 2.8	Sc Sk	9	-	-	☉	19
SSE 4.1	Sc Sk	8	-	-	☉	20
SSE 4.7	Sk	6	-		①	21
S 4.3	Sk	2	-		○	22
S 5.8	Sk S	2	-		○	23
S 5.6	Sk S	10	-		☉	24

5

一九二四年四月四日 『休息』 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
SW 1.8	-	0	-	0.6	2
- 0.3	Cs	10	-	-0.4	6
N 0.8	Sc Sk	10	-	8.1	10
S 10.1	Sc Sk	10	-	14.4	14
S 3.4	Sc Sk	10	-	13.0	18
W 1.1	Sc	10	-	9.7	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

『記事と考察』盛岡 日の暈6・10―14・35。夕焼け18・20―18・45。日照もあるが、雲の多い一日であった。夕焼けは短かった。『測候所』の場面は、盛岡の山王にある気象台から東を望んだ風景。早池峯山にかかった層積雲の様からの連想を描いたものか。

『鳥』『海蝕台地』も測候所に近い場所と考えると、外山付近か。「山火」もこれに続くものと考えられると、この付近から南への帰路で見た焼畑の風景ということになる。

雲量10の曇天ではあるが、日照も十分あるから薄い巻層雲の多い日であった。

『鳥』では風が強い風景が見られ、「海蝕台地」ではすっかり風が落ちてくる風景が描かれているが、これは午後から日没後の様子をよく反映している。下書稿(一)手入形に「台地はかすんで優鉢羅華燈油の海のやう」と描かれた春の夕べは、夕焼けも消えた後の空気を写したものであろうか。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
S 3.9	-	0	-		○	1
- 0.2	-	0	-		○	2
SSE 2.5	S	1	-		○	3
SE 3.2	S	1	-		○	4
S 2.1	Sc	1	-	-	○	5
- 0.1	Sc	10	-	-	◎	6
- 0.3	Sc	10	-	-	◎	7
SW 1.6	C Cs	10	-	0.85	◎	8
S 1.4	C Cs	10	-	1.00	◎	9
S 2.1	Cs Sc C	10	-	1.00	◎	10
S 4.7	Cs Sc	10	-	1.00	◎	11
S 6.7	Cs Sc Sk	10	-	0.85	◎	12
S 7.8	Cs Sk	10	-	1.00	◎	13
S 7.6	Cs Sc Sk	10	-	1.00	◎	14
S 7.5	Sc Sk	10	-	1.00	◎	15
SSW 4.8	Sc	10	-	0.70	◎	16
S 3.8	Sc	10	-	-	◎	17
S 2.6	Sc	10	-	-	◎	18
NW 1.8	Sc	10	-	-	◎	19
NW 0.9	Sc Sk	10	-	-	◎	20
ENE 1.5	Sc Sk	10	-		◎	21
WNW 1.3	Sk Sc	10	-		◎	22
- 0.0	Sk Sc	10	-		◎	23
- 0.4	Sk Sc	10	-		◎	24

一九二四年四月六日 『測候所』『鳥』『海蝕台地』『山火』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
S 6.8	Sk	10	-	8.7	2
S 12.9	Cs Sk	9	-	9.2	6
S 7.3	Sk	9	-	15.9	10
WNW 8.1	Sk	10	-	17.2	14
WSW 6.8	Cs Sk	1	-	15.0	18
W 4.8	-	0	-	12.5	22

a 盛岡气象台データ

7

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SW 2.9	Sk	10	-		☉	1
S 3.3	Sk	10	-		☉	2
SSW 2.3	Sk N	10	-		☉	3
S 6.3	Sk	6	0.0		⊙	4
S 9.8	Sk	7	-	-	⊙	5
SSW 13.2	Sc Sk	8	-	-	☉	6
S 10.3	Sc Cs Sk	8	-	-	☉	7
S 5.5	Sk	5	-	0.40	⊙	8
SSW 4.6	Sk N	9	0.0	0.60	☉	9
SW 4.8	Sk N	10	-	0.60	☉	10
W 7.2	Sk N	10	-	0.10	☉	11
WSW 11.1	Sk N	10	-	0.10	☉	12
WNW 8.3	Sc · Sk	10	-	0.80	☉	13
SW 12.8	Sc Sk	9	-	1.00	☉	14
WSW 9.3	Sc Sk	8	-	1.00	☉	15
SSW 9.9	Sc Sk	4	-	1.00	⊙	16
W 5.8	Sc Sk	8	-	1.00	☉	17
W 4.4	Sc Sk	8	-	1.00	☉	18
SW 3.8	Sc Sk	5	-	0.30	⊙	19
WNW 6.7	Sc S	4	-	-	⊙	20
W 9.4	Sc S	5	-		⊙	21
W 6.3	Sc Sk S	5	-		⊙	22
WNW 8.1	Sk S	3	-		⊙	23
W 7.8	Sk S	4	-		⊙	24

一九二四年四月二〇日 『嬰兒』 『休息』 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 波状雲18・30―18・50。水沢 煙霧10―22。

この日は風の強い日であった。雲の動きも激しかったはずである。午前中は雲が低く、午後は少なくなっている。

『嬰兒』の下書稿(二)に「なにいろをしてゐるともわからない／ひろおいそらのひととこで／まばゆい黝くろと白との雲が／つぎからつぎと爆発する／(中略)／それはひとつづつへリオスコープの照面を過ぎて」とあるのは、煙霧にかすむ大気の中で、層積雲や雨雲のよぎる空の様子をよく反映している。

『休息』の「風はうしろの大きな杉や／わたくしの黄いろな仕事着のえりを／つぎつぎ狼の牙にして過ぎるけれども」という表現は、この日の強い風に素材を得ているのであろう。

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
N 2.3	-	0	-	-2.0	2
N 0.8	-	0	-	-1.3	6
S 8.2	Sk	0	-	12.6	10
S 8.3	C	0	-	17.4	14
S 11.3	C	2	-	13.6	18
S 3.7	Kc	0	-	9.1	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

高積雲のちぎれ雲が浮かんでいるようすであろう。

ある。

「いま来た角に」の「雲がまるで臙で鑄たやうになってゐる」とあるのは、層積雲あるいは、

旧曆三月一六日のもの。

この日は急に気温が上がったのだが、風は強く、夜の山道をおくのは、楽でなかつたはずで

盛岡市郊外の外山への旧小本街道の道筋⁽⁵⁾。

「どろの木の下から」に「かがやかに春の月がかかり」と描かれた月の月齢は一四・八の満月。

〔記事と考察〕盛岡 霧5・40―8・30。水沢 霜 煙霧 10―14。
この日は珍しく、終日雲のない一日であったが、午後は風が出た。

「いま来た角に」の原稿では、作品番号の誤記につじつまを合わせるため、日付を別筆で七月に改めてあるが、気象状況からしてこの日に素材を得たと考えるほうが自然である。詩の場面は

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSE 2.8	-	0	-		○	1
SE 0.8	-	0	-		○	2
SE 1.8	-	0	-		○	3
SSE 1.9	-	0	-		○	4
SE 1.7	-	0	-	-	○	5
SSE 1.4	-	0	-	-	○	6
- 0.3	-	0	-	0.60	○	7
SW 0.6	-	0	-	1.00	○	8
SSW 3.6	-	0	-	1.00	○	9
S 8.3	-	0	-	1.00	○	10
SSW 9.8	-	0	-	1.00	○	11
S 8.1	Cs C	1	-	1.00	○	12
S 8.7	C	1	-	1.00	○	13
S 10.8	C Cs	1	-	1.00	○	14
S 8.9	C	1	-	1.00	○	15
S 8.2	C	1	-	1.00	○	16
SSW 10.3	C	1	-	1.00	○	17
S 10.5	C	1	-	1.00	○	18
S 10.0	C Cs	2	-	-	○	19
S 10.5	C	1	-	-	○	20
S 9.9	-	0	-		○	21
SSW 7.3	Sk	0	-		○	22
S 3.5	Kc Sk	8	-		◎	23
S 2.2	Sk	10	-		◎	24

一九二四年四月一九日 「どろの木の下から」 「いま来た角に」 創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向	風力	雲形	雲量	降水量	気温	時刻
W	3.2	Cs	1	-	3.8	2
-	0.2	Cs Sk	6	-	2.8	6
S	6.2	Cs Ck	7	-	15.9	10
SSW	2.8	Ck Cs	8	-	22.2	14
S	12.3	Ck Cs	10	-	15.5	18
S	2.7	Cs Sc	10	-	12.1	22

a 盛岡気象台データ

風向	風力	雲形	雲量	降水量	日照時数	天候	時刻
S	1.2	Sk	10	-		☉	1
NW	1.0	Sk	10	-		☉	2
NW	2.0	Kc Sk	5	-		⊙	3
SW	0.7	Kc	4	-		⊙	4
SSE	2.8	Kc Ck	9	-	-	☉	5
-	0.0	Ck Sk	9	-	-	☉	6
S	1.4	Sk C	5	-	-	⊙	7
S	7.9	Cs S	6	-	0.80	⊙	8
SSE	9.7	C S	4	-	1.00	⊙	9
S	9.1	C Cs	4	-	1.00	⊙	10
S	9.3	Cs C	7	-	1.00	⊙	11
S	9.2	Cs	9	-	1.00	☉	12
S	9.6	Cs Sc	9	-	-	☉	13
S	6.5	Cs C	7	-	0.30	⊙	14
SSE	6.3	Sc C	9	-	1.00	☉	15
W	7.5	Sc C	10	-	1.00	☉	16
SSW	4.4	Sc S	10	-	0.85	☉	17
S	3.8	Sc S	10	-	0.70	☉	18
S	10.5	Sc S	10	-	0.20	☉	19
S	10.0	Sc	10	-	-	☉	20
S	8.0	Sc	10	-	-	☉	21
S	7.7	Sc S	10	-	-	☉	22
SSW	3.4	Sc Sk	10	-	-	☉	23
S	1.9	Sc Sk	10	-	-	☉	24

9

一九二四年四月二〇日 『有明』 「東の雲ははやくも蜜のいろに燃え」 『北上山地の春』 創作日付の日

『春と修羅』 第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 朝焼け 4・30―4・50。霧 4・40―8・40。波状雲 8・20―11・30。水沢 煙霧 6。

この日、空は晴れて雲も高く、穏やかな風のない夜明けだったと思われる。

外山への道で盛岡の町の灯が見える場所は意外に限られている。明神山の麓あたりから、雫石川を見下ろす方向で、霧に包まれた盛岡の街灯の連なりを極楽鳥に見立てたのが「有明」である。

「東の雲ははやくも蜜のいろに燃え」の「東の雲はもう石竹のいろに燃え」や「巻雲のなかやあるひはわづかにかすむ青ぞらに」とある表現は、朝焼けの実景に基づくものであろう。

『北上山地の春』の「かれ草もかげらふもぐらぐらに燃え／雲滄がつぎつき青く綾を織るなかを」というのも、巻層雲や層雲の広がる朝の空を描いたものであり、「風は青ぞらで鳴り」とある風は、朝になってまた吹き始めたものである。

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
E 4.2	Sk	5	-	8.3	2
N 11.3	Sk	10	-	8.2	6
NNW 5.5	Sk Kc	1	-	12.2	10
NE 1.8	Cs Sk	5	-	16.5	14
E 2.3	Cs Kc	8	-	13.8	18
S 6.9	Sk Cs	10	-	8.5	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 雨 3・50 | 4・10。波状雲 5・50 | 7・15。日の暈 13・10 | 15・20。
 夜明け前に雨が上ったばかりの爽やかな出勤時間であつたろう。下書稿(二) 手入形で「町ぜんたいにかけわたす／大きな虹をうしろにしょって」と描かれた虹の有無は確認できないが、盛岡でも早朝に小雨がぱらつき、水沢も曇っていた様子であるから花巻でも小雨が降った後であれば、虹が出たことが充分考えられる。雨あがりの「鷺のかたちになされた雲」も流れていたのではあるまいか。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NE 3.7	Sk N	10	0.0		☉	1
WNW 7.4	Sk	10	-		☉	2
W 9.6	Sk	10	-		☉	3
NW 3.4	N	10	0.0		●	4
W 6.9	Sk	8	0.0	-	☉	5
WNW 4.5	Ck Sk	4	-	-	⊙	6
NW 9.3	Ck Sk	3	-	0.75	⊙	7
WNW 9.6	Ck Sk	5	-	1.00	⊙	8
WNW 6.1	Ck Sk	3	-	1.00	⊙	9
NNW 2.8	C	3	-	1.00	⊙	10
W 4.5	C Cs Sk	3	-	1.00	⊙	11
W 3.6	Cs C S	4	-	1.00	⊙	12
NW 7.0	Cs	6	-	1.00	⊙	13
NW 3.8	Cs	10	-	1.00	☉	14
WNW 8.6	Cs Sk	10	-	1.00	☉	15
WNW 8.2	Sc	10	-	1.00	☉	16
WNW 6.4	Sc	10	-	0.85	☉	17
NW 5.3	Sc	10	-	0.15	☉	18
NNW 4.3	Sc	10	-	-	☉	19
NNE 3.1	Sc	8	-	-	☉	20
N 2.3	Sc	8	-		☉	21
- 0.3	Sc	8	-		☉	22
SE 3.9	Sc	4	-		⊙	23
S 3.4	Sc	3	-		⊙	24

一九二四年四月二七日 七八『春』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
ENE 1.3	Cs	3	-	2.6	2
- 0.3	Cs	6	-	1.9	6
S 2.1	Ck	0	-	14.9	10
SSW 5.8	Cs	2	-	20.8	14
S 9.2	Cs Ck	9	-	17.1	18
S 5.1	Ck Cs	4	-	11.0	22

〔記事と考察〕盛岡 夕焼け18・15―18・35。水沢 煙霧 6、18。
 風はあるが、暖かい日である。
 水沢で観測されている煙霧は、この作品で「青い夜」を描いているところに反映している。「蒼く古風な薄明穹の末頃である」や「星のまはりの青い雰囲気」などに、それは見られる。
 下書稿（一）では、「向ふはひばが月夜のやうにけむりだす」ともあるが、この日の月齢は○・二。月はない。稲光が観測された記録もない。
 「あたらしいギリシャ模様の南の風が／彎みを越えて碎ければ」とある南風は、盛岡でも水沢でもかなり強く吹いていた。
 下書稿（二）で「濁って赤い信号燈シグナルの浮標ウヅバ」とあったものを、手入形で「青」に改めているところにも、詩人の意図が見える。

11

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSE 4.7	Cs	3	-		①	1
SSE 0.7	Cs	5	-		①	2
SE 1.1	Cs Sc	6	-		①	3
- 0.4	Sc Cs	10	-		◎	4
NE 1.4	Cs	8	-	-	◎	5
NE 1.1	Cs Sc	7	-	-	①	6
- 0.0	Cs C	7	-	0.50	①	7
NW 0.6	Cs C	3	-	1.00	①	8
S 1.7	Cs Sc	2	-	1.00	○	9
SSW 3.3	Sc Cs	1	-	1.00	○	10
S 5.5	C Sc	3	-	1.00	①	11
S 7.3	Cs C Sc	7	-	1.00	①	12
S 7.0	Cs C	4	-	1.00	①	13
S 7.5	Cs Sc	3	-	1.00	①	14
S 8.7	Sc C	3	-	1.00	①	15
S 9.0	C Sc	4	-	1.00	①	16
S 9.5	C Sc	7	-	1.00	①	17
S 9.7	C Sc	8	-	0.80	◎	18
S 7.1	C Cs	7	-	-	①	19
S 8.2	Cs Sc	5	-	-	①	20
SSE 6.6	Sc Sk	3	-		①	21
SSE 6.3	Sc Sk	6	-		①	22
SSE 2.8	Sk	2	-		○	23
SE 2.7	Sk	5	-		①	24

一九二四年五月四日 八六『山火』創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

b 水沢天文台データ

風向	風力	雲形	雲量	降水量	気温	時刻
N	9.0	Sk	2	-	6.6	2
N	1.1	-	0	-	5.0	6
NNE	3.7	-	0	-	12.4	10
NW	4.2	Ck Cs	10	-	16.1	14
WNW	2.4	Ck Cs	10	-	13.5	18
S	4.8	-	0	-	6.0	22

『春と修羅』第一集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 朝焼け 3・50―4・30。霧 5・30―7・45。日の暈 12・40―15・20。水沢 煙霧 6―14。

この日の朝は晴れていた。水沢で煙霧が観測されているから山々が霞んでいたことは当然考えられる。「鳥はコバルト山に翔け…」といった表現は、この実景に基づくものであろう。

作品の場所は、西公園内の天満宮と推定されている。筆者の調査でも一四例の花巻近郊の筆塚で背後に大きな松がある例は、ここしかない。ただ、筆塚は和田甚五兵衛のもので、松は落葉松であるが、『春と修羅』第一集の『高級の霧』には「日射しのなかの青と金／落葉松は／たしかとどまつに似て居ります」という表現もある。

a 盛岡気象台データ

風向	風力	雲形	雲量	降水量	日照時数	天候	時刻
N	9.3	Cs	5	-		⊙	1
N	4.8	Cs	5	-		⊙	2
N	3.4	Cs	4	-		⊙	3
NNW	6.3	Sc	2	-		○	4
-	0.3	S Sc	2	-	-	○	5
-	0.3	S Sc	2	-	-	○	6
S	0.7	S	2	-	0.70	○	7
WSW	1.1	-	0	-	1.00	○	8
N	9.6	Cs	3	-	1.00	⊙	9
N	10.4	Cs	4	-	1.00	⊙	10
N	10.0	Cs	5	-	1.00	⊙	11
NNE	8.3	Cs	10	-	1.00	⊙	12
NW	6.7	Cs	10	-	1.00	⊙	13
WNW	4.8	Cs	10	-	1.00	⊙	14
W	5.1	Cs	10	-	1.00	⊙	15
NW	4.1	Cs C	10	-	1.00	⊙	16
WSW	6.6	Cs C	10	-	1.00	⊙	17
W	6.6	Cs C	10	-	1.00	⊙	18
WNW	2.5	Cs	7	-	0.40	⊙	19
NNE	0.5	Cs	3	-	-	⊙	20
SSE	4.8	Cs	4	-		⊙	21
S	4.8	Cs	4	-		⊙	22
SSE	4.5	Cs	4	-		⊙	23
SE	3.6	Cs	4	-		⊙	24

一九二四年五月六日 「祠の前のちしやのいろした草はらに」創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
S 3.1	Sk	10	-	13.0	2
S 2.8	Sc Sk	10	-	12.4	6
S 13.3	Sk Sc	10	-	17.1	10
S 14.1	N	10	0.0	17.6	14
S 10.4	N	10	4.9	14.9	18
S 6.3	S	10	5.2	15.2	22

〔記事と考察〕盛岡 日の暈9・55―10・20。水沢 煙霧6。
この日、水沢では煙霧が観測され、盛岡では日の暈が観測されている。曇天で「日ざしがほのかに降ってくる」る午前中の風景は、恐らくあった。午後雨が降っているから、村娘が雨具の用意として「けらを着」て畑にくるのも自然である。
ただ、この日は南風の強い日であった。初稿段階で「またうらぶれの風も吹く」とあるのは事実に基づく。だが、下書稿(二)の段階で「つめたい西の風も吹き」としたところから虚構を含む表現になった。村娘を「ウクライナの舞手」に見立て、季節の風を意識した(この時期はまだ西風が多い)ものであろうが、これが「大陸からの風」として定着されると意味が異なってくる。⁽⁷⁾
この作品は下書稿(四)から「一九二四・一〇・二六」の日付になっているが、この時は秋の情景を取り込んで意識的に虚構化したものである。ここに作者の創作日付のつけ方の一端が窺われる(41表参照)。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSE 2.9	Cs	10	-		☉	1
SSE 3.0	Sc	10	-		☉	2
SSE 5.4	Sc Sk	10	-		☉	3
SSE 2.8	Sc Sk	10	-		☉	4
SSE 2.8	Sk	10	-	-	☉	5
SSE 3.1	Sk	10	-	-	☉	6
SSE 3.1	Sk	10	-	-	☉	7
SSE 6.2	Sk	10	-	-	☉	8
SSE 9.0	Sk	10	-	-	☉	9
S 10.1	Kc Cs Sk	10	-	0.30	☉	10
S 11.4	Sk Sc	10	-	0.75	☉	11
S 11.0	Sk Sc	10	-	0.10	☉	12
S 10.2	Sk	10	-	0.30	☉	13
S 10.6	Sk	10	-	-	☉	14
S 12.4	N Sk	10	0.0	-	●	15
S 10.8	N Sk	10	0.0	-	●	16
S 9.4	N	10	0.0	-	●	17
S 4.4	N	10	2.2	-	●	18
SSE 6.8	N	10	1.4	-	●	19
SSE 8.7	N	10	1.5	-	●	20
SSE 8.3	N	10	1.6		●	21
SSE 9.3	N	10	1.7		●	22
SSE 10.9	N	10	0.3		●	23
SSE 11.8	N	10	0.3		●	24

13

一九二四年五月八日 「日脚がぼうとひろがれば」 創作日付

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
W 1.5	Sk	3	-	7.6	2
SW 3.0	Cs Sk	10	-	8.8	6
S 3.4	Kc Cs Sk	10	-	17.9	10
W 8.2	Sk	7	-	19.5	14
SW 9.3	Sk	9	-	16.2	18
N 3.3	Sk	10	-	12.4	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

「記事と考察」盛岡 雷鳴14・10-14・15。初雷。
 下書稿(二)の手入形になって「鉄道線路と国道が、こゝらあたりは平行で、」とあるのを参考にすれば、作品の場面は、花巻北郊の二枚橋付近が考えられる。
 下書稿(一)に「年経た並木の松は青ぞらに立ち(中略)山脈が草火のけむりとともに／青くたよりなくなれるならば／雲はちゞれてぎらぎらひかり」と描かれた情景は、比較的風のなかつた時刻の情景であろうか。
 下書稿(一)手入形に「雲はしづかにひかつてちゞれ／満ちては春も蒼(誤字を校訂) 惶として／明日の青い嵐と雷とを約束いたします」とあるのは、翌日盛岡で15・3メートル、水沢で15・5メートルの風を記録しているのと符合する。
 大気の不安定だったこの日の情景を、自己と外界との「共業所感」と捉らえ、やがて「たびびとのこゝろのなかのそのけしき」と捉え直していく作品である。詩人自身が心象スケッチの方法を語ったことばとして注目される。

a 盛岡气象台データ

一九二四年五月一六日 「鉄道線路と国道が」創作日付の日

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SW 1.3	Sk	10	-		◎	1
S 1.8	Sk	10	-		◎	2
S 3.4	Sk	10	-		◎	3
SE 3.3	Sk	10	-		◎	4
WSW 2.9	Sk Ck	9	-	-	◎	5
WNW 2.5	Sk	8	-	-	◎	6
W 0.7	Sk Ck	8	-	0.10	◎	7
S 1.9	Sk Ck Sc	8	-	0.15	◎	8
S 6.1	Sk Sc Ck	9	-	0.75	◎	9
WNW 3.2	Sk S	6	-	1.00	⊙	10
S 1.7	Sk S	7	-	0.45	⊙	11
S 6.0	Sk S	8	-	1.00	◎	12
W 9.9	N Sk	10	0.0	0.90	●	13
WNW 2.7	N Sk	9	0.2	0.70	●	14
W 5.8	Sk S	7	0.0	0.80	⊙	15
SW 9.7	Sk S	5	-	0.95	⊙	16
SW 9.8	Sk	6	-	1.00	⊙	17
SW 10.8	Sk	4	-	0.55	⊙	18
SSE 6.2	Sk	8	-	0.20	◎	19
NNE 2.5	Sk	10	-	-	◎	20
E 2.3	N Sk	10	0.0		●	21
WNW 6.9	N Sk	10	0.2		●	22
W 4.3	Sk	10	0.0		◎	23
WNW 4.8	Sk	10	-		◎	24

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
N 7.2	Ck Sk	10	-	7.6	2
E 2.5	Sk	0	-	9.5	6
NW 1.5	Kc Sk	8	-	14.4	10
N 5.1	Sc Sk	10	-	13.6	14
W 4.7	Sk Kc	10	-	14.4	18
NE 0.8	Sk	10	0.5	10.4	22

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
W 1.5	Cs Sk	10	-		☉	1
SW 0.6	Cs Sc Sk	10	-		☉	2
SE 3.8	Cs Sk Kc	6	-		⊙	3
SE 4.8	Cs Sk	7	-		⊙	4
SE 3.4	Cs Sk	2	-	-	○	5
SSE 4.9	Sc Sk	1	-	-	○	6
SW 2.4	Sc Sk	1	-	0.90	○	7
S 4.3	Sk K	1	-	1.00	○	8
WSW 3.2	Sk Ck	6	-	1.00	⊙	9
WNW 12.9	Sk K Ck	9	-	1.00	☉	10
W 9.8	K Sk Sc	10	-	0.50	☉	11
W 8.3	Sc K	10	-	0.45	☉	12
WNW 5.8	Sk Sc K	10	-	-	☉	13
WNW 5.5	Sk Sc K	10	-	-	☉	14
WNW 7.3	Sk Sc K	10	-	-	☉	15
NNW 1.9	Sk K	10	-	-	☉	16
WNW 3.4	N Sk	10	0.0	-	●	17
W 1.4	Sk	10	0.0	-	☉	18
WSW 2.7	N Sk	10	0.0	-	●	19
SW 2.3	Sk	10	0.0	-	☉	20
S 0.7	N Sk	10	0.0		●	21
SE 2.8	N Sk	10	0.1		●	22
ESE 3.8	Sk	10	-		☉	23
SSE 2.8	Sk	10	-		☉	24

15

一九二四年五月二八日 「日はトパーズのかけらをそそぎ」 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

〔記事と考察〕盛岡 月光冠 or 月の量 0・30 | 2・20。

この日の夜、賢治は修学旅行団を引率して北海道へ出発した。アイヌの娘が登場するため、小沢俊郎は旅先のどこかの地点を作品の場面に想定しているが、賢治たちが訪ねた北海道の白老に「三つ並ん樹陰の赤い石塚」はない。また、花巻のアイヌ塚で知られていたのは熊堂の古墳群であり、「赤い石塚」が見られるのは、才の神部落の平賀静男氏邸内のものである。両者間には相当距離がある。

下書稿（一）の「雲は酸敗してつめたくごえ／ひばりの群はそらいちめんマムに浮沈する／一本の緑天蚕絨の杉の古木が／南の風に奇矯な枝をそよがせてゐる」といった情景の、「南の風」と下書稿（二）の書き入れの「白い昼の蛾」とには時間のずれがある。薄い朝焼けの光を「日はトパーズのかけらをそそぎ」と捉えた後、つぎつぎとイメージを塗り重ねているようにも見える。

b 函館气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
NNW 4.2		10	-	7.0	2
N 1.9		4	-	6.0	6
SSE 6.8		10	-	11.1	10
SSE 6.8		10	-	9.2	14
SE 3.8		10	-	8.9	18
E 3.4		10	-	9.3	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕函館 煙霧 am。日の暈 am・pm。小雨 14・55―17・25。
 函館では、時間ごとの降雨量は記録していないが 14・55―17・25 の降雨記録と総雨量〇・二ミリの記録がある。また、午前中の煙霧、午前午後の日暈の記録がある。雲形の記録は見えない。
 『津軽海峡』の下書稿(一)で「東には黒い乱積雲の椀ができて」下書稿(二)「東には黒い層積雲の棚ができて」と描かれた様は、青森气象台のデータと符合して面白い。ただ、「また龍巻の渦巻く黒い尾をのぞむ」とも描かれているが、青森で竜巻の記録はないという。これも「雨雲の渦巻く黒い尾をのぞむ」に改められている。
 雲の多い、月齢は一五・二の日であったことを考えると、『函館港春夜光景』下書稿(一)に「黒曜玻璃の夜の空に」としながら下書稿(二)の書入形で「残りまくらい七日の月が／海峡の西にかかれて」としたのは、明かに虚構である。

a 青森气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
						1
- 0.0	N	10	-		☉	2
						3
						4
				-		5
- 0.0	N ≡	10	-	-	☉	6
				0.20		7
				0.80		8
				0.51		9
N 3.8	SkKn Kc Ck	8	-	0.88	☉	10
				0.52		11
				0.21		12
				-		13
N 3.5	N	10	0.4	-	●	14
				-		15
				-		16
				-		17
N 2.3	N	10	2.6	-	●	18
				-		19
				-		20
						21
- 0.0	N Sk Kc	3	0.1		①	22
						23
						24

一九二四年五月二九日 『津軽海峡』 『函館港春夜光景』 創作日付の日

b 函館気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
WSW 0.9		0	-	7.8	2
S 1.8		10	-	9.0	6
S 3.1		10	-	12.5	10
S 4.4		2	-	15.5	14
SE 5.1		5	-	12.0	18
SW 3.3		10	-	10.7	22

〔記事と考察〕函館 霧 1・00―7・20。
『馬』の情景は、どこまでを詩人が実際に観察できたものか確かでない。この日の夕方、彼は札幌から苫小牧へ向かっているから、働く馬と死んだ馬を両方この日に観察することは難しかったと思われるからである。⁽⁶⁾
ただ、函館気象台の記録では、この日は午後、日没まで日照があった様子であるから、「いちにちいっぱいよもぎのなかにはたらいて／馬鈴薯のやうにくさりかけた馬は／あかるくそそぐ夕陽の汁を／食塩の結晶したばさばさの頭に感じ」る情景はあったと思われる。『牛』の場面は苫小牧付近であろう。
青森気象台で夜、巻雲と層雲を記録し、函館気象台では、翌朝も霧の記録があるので、「黄銅いろの月」「青じろい夜の地靄」があることと矛盾はない。
この日の月は、旧暦四月一九日の月で、月齢一八・二。通常いわれる「下弦の月」より若いはずだが、月の欠け方は一致している。

a 青森気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
						1
NE 0.9	N	10	-		☉	2
						3
						4
				-		5
- 0.0	Sk N	4	-	0.76	⊙	6
				1.00		7
				1.00		8
				1.00		9
NNE 1.8	C Sk	0	-	1.00	○	10
				1.00		11
				1.00		12
				1.00		13
N 3.3	Cs Ck C	5	-	1.00	⊙	14
				1.00		15
				1.00		16
				1.00		17
N 3.9	Cs C Kc	3	-	1.00	⊙	18
				0.45		19
				-		20
						21
- 0.3	S	2	-		○	22
						23
						24

17

一九二四年五月二日 『馬』『牛』創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

b 青森気象台データ

風向風力	雲形	雲量	降水量	気温	時刻
SW 0.8	S	0	-		2
SW 1.0	S Cs	1	-		6
NNE 3.8	Cs	8	-		10
NNE 5.6	Cs C	7	-		14
NNW 0.8	Cs Sk	10	-		18
- 0.0	-	0	-		22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

「記事と考察」盛岡 月の量 3・30。霧 3・40―8・00。日の量 6・40―17・30。
 「つめたい海の水銀が」は室蘭(午後5時発)から青森(早朝着)への船中の作品であろうから、早朝の風景を背景とした幻想的作品であるが、青森気象台のデータが示すように、無風の海が層雲あるいは薄い霧に包まれていたとすれば、作品の雰囲気によく反映されている。「補遺詩篇II」
 「船首マストの上に来て」の後半には、この日の朝の体験と思われる内容が織り込まれている。
 花巻駅帰着は午後一時であった。『夏』の場面を、東和町の北成島の毘沙門堂とすれば、詩人が修学旅行から帰った後ということになり、午後の情景である。
 下書稿(一)に「風のぬるみや紫紺の雲に／柳の絮(誤字を校訂)も羽虫も遠くひかかってとべば」とあるのは、午後の強い南の風を受けてのことであろう。下書稿(二)の書き入れに「はるかに畳む高地のはてに／まっ白な積雲の群れが」とあるのは西の夕焼けの「紫紺の雲」と東の高地の層積雲の対比であろうか。

a 盛岡気象台データ

風向風力	雲形	雲量	降水量	日照時数	天候	時刻
SE 4.9	Cs	8	-		☉	1
SE 3.9	Cs	9	-		☉	2
SE 3.9	Cs	8	-		☉	3
SE 2.2	Cs S	8	-		☉	4
SE 1.4	Cs S	9	-	-	☉	5
SE 0.5	Cs S Sc	6	-	-	①	6
- 0.3	Cs S	10	-	0.60	☉	7
WNW 1.2	Cs S	7	-	1.00	①	8
SW 2.0	Cs S	6	-	1.00	①	9
SSW 2.4	Cs S	6	-	1.00	①	10
S 3.7	Cs S	4	-	1.00	①	11
S 5.0	C Cs K	6	-	1.00	①	12
S 7.3	C Ck Cs	7	-	1.00	①	13
S 8.2	Cs C K	7	-	1.00	①	14
S 9.2	Cs C K	8	-	1.00	☉	15
S 9.4	Cs C Sc	9	-	1.00	☉	16
S 9.7	Cs C Sc	9	-	1.00	☉	17
S 9.1	Cs C Sc	7	-	0.60	①	18
S 8.8	Cs Sc Sk	7	-	-	①	19
S 7.5	Cs Sc Sk	7	-	-	①	20
S 9.2	Sc Sk	10	-		☉	21
S 3.3	Sk Sc	10	-		☉	22
SW 1.4	Sk	10	-		☉	23
S 1.3	Sk	10	-		☉	24

一九二四年五月二三日 「つめたい海の水銀が」 『夏』 創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
W 1.0	N	10	3.9	12.2	2
N 6.6	N	10	7.2	12.2	6
NNW 16.8	N	10	14.4	12.4	10
NW 21.0	Sk	4	4.7	18.3	14
NE 4.4	Sk	10	-	14.7	18
SW 4.7	Sk S	9	0.6	13.8	22

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
W 0.8	Sk	10	-		☉	1
NE 3.4	N	10	0.7		●	2
NE 2.3	N	10	2.2		●	3
N 2.5	N	10	2.8		●	4
N 5.9	N	10	1.3	-	●	5
NE 7.8	N	10	0.5	-	●	6
N 6.7	N	10	0.2	-	●	7
N 6.8	N	10	0.2	-	●	8
N 13.6	N	10	0.0	-	●	9
N 19.2	N	10	0.3	-	●	10
NW 16.9	N	10	2.5	-	●	11
N 13.2	N	10	5.3	-	●	12
N 13.3	Sk	10	0.6	-	☉	13
NW 14.7	Sk	10	0.0	-	☉	14
NNW 10.7	Sk	10	-	-	☉	15
N 9.2	Sk	10	0.0	-	☉	16
ENE 2.1	Sk	10	-	-	☉	17
W 4.3	Sk	10	0.0	-	☉	18
W 4.3	N Sk	10	0.0	-	●	19
SSE 4.3	N Sk	10	0.0	-	●	20
S 5.3	Sk	10	0.0		☉	21
SSE 10.7	N	10	0.2		●	22
S 9.3	N	10	0.1		●	23
S 8.6	N	9	0.1		●	24

19

一九二四年五月二十五日 『比叡』 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 氷あられ10・10―10・50。

終日雨が降り、一時は水沢で二一・〇メートル、盛岡で二二・三メートルの強い風が吹いた日であった。午前一〇時すぎ、盛岡で氷あられも降っている。

(幻聴)とある通り、雨に降りこめられた日の幻想であろうか。ただ、作品の表現に、この日の気象状況の反映を見ることはできない。

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.0	-	0	-	11.8	2
SW 1.3	-	0	-	13.8	6
W 0.9	K	0	-	21.9	10
S 5.8	K	0	-	27.7	14
S 10.5	Sk	0	-	22.3	18
S 2.1	S	10	-	18.9	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

〔記事と考察〕盛岡 霧3・00―9・00。水沢 煙霧6。
 盛岡のデータにおいて、天候の欄と雲量欄の18時と19時の記録には不整合があるが、そのま
 まとしておく。
 盛岡の霧も濃いものではない。午前中は風もない。
 気象データを見ると、山に棚雲のかかる快晴の日がイメージされる。「葱緑の天」とは、大
 胆な表現だが、水沢で観測されている煙霧が花巻にもあつたとすれば、「青じろいそらの縁辺」と
 という表現と共に実景に基づくものと見てよいであろう。
 風のない六月の朝を飛ばかつこうが、下書稿（一）で一瞬「博物館の硝子戸棚のなか」のもの
 のように幻視されても不思議はない。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SE 3.1	S	3	-		⊙	1
SE 2.5	S	4	-		⊙	2
ESE 1.8	S	3	-		⊙	3
ESE 1.3	S	2	-		○	4
- 0.2	S	2	-	-	○	5
- 0.1	S	2	-	0.30	○	6
- 0.3	S	3	-	1.00	⊙	7
- 0.4	S	1	-	1.00	○	8
S 1.7	S	2	-	1.00	○	9
S 3.9	K S	1	-	1.00	○	10
S 3.9	K S	2	-	1.00	○	11
S 6.4	K S	2	-	1.00	○	12
S 7.5	K S	2	-	1.00	○	13
SSW 6.9	K S	2	-	1.00	○	14
SSW 7.6	K S	2	-	1.00	○	15
S 7.4	K S	2	-	1.00	○	16
S 8.8	K S	2	-	1.00	○	17
S 10.8	S K	3	-	1.00	○	18
S 8.9	S K	2	-	0.40	⊙	19
S 6.5	S	1	-	-	○	20
S 4.8	S	1	-		○	21
S 1.2	S	1	-		○	22
SSW 1.5	Sk S	7	-		⊙	23
SE 3.3	Sk S	0	-		○	24

一九二四年六月二日 『鳥の遷移』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.3	S Sk	10	-	16.2	2
E 0.6	Sk	10	-	16.9	6
S 2.8	Sk	10	-	23.1	10
S 10.5	Cs Sk	10	-	24.7	14
S 9.5	Sk Cs	10	-	21.6	18
SSE 10.0	Sk	10	-	20.4	22

〔記事と考察〕盛岡 日の暈 11・57―12・40、15・20―17・18。水沢 煙霧 10、14。
 この日は午後風が出ている。月は旧暦五月二〇日の月。月齢は一九・五。作品の場所は、高山
 植物の生え方から推定した場合、柳沢ルートから上る岩手山の四合目付近がイメージされる。
 煙霧は水沢で観測されたものだが、盛岡でも日に暈があった。早池峯 姫神山も／あんなに青
 くひっそりだ」と下書稿(一)とあるから、北上平野の全体に煙霧が広がっている日だったので
 あるうか。そうであれば下書稿(二)で「あぢさゐいろの風だといふ／雲もシャツも染まるとい
 ふ」といった表現も、さして特異とするまでもない。
 層雲も考慮すれば、月が赤いのもおそらく自然そのままである。
 ただ、この日の月の出る時刻は二三時二分。かなり遅いので、時間のずれた場面で捉えられた
 イメージの重ね塗りがおこなわれているようである。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
ESE 3.2	S	0	-		○	1
SE 1.7	S	0	-		○	2
ENE 1.5	S	1	-		○	3
SE 4.1	S	1	-		○	4
SE 1.7	S	2	-	-	○	5
- 0.0	Kc S	8	-	0.30	◎	6
W 0.9	Sc S K	7	-	0.70	①	7
W 1.8	Sc S	10	-	1.00	◎	8
SW 3.6	Sc S	8	-	1.00	◎	9
S 5.3	Sc K	4	-	1.00	①	10
WSW 6.3	Sc K	10	-	0.90	◎	11
SW 7.0	Cs Sc K	8	-	1.00	◎	12
SSW 10.1	Sc Cs K	9	-	1.00	◎	13
SSW 10.2	Cs K Sc	10	-	1.00	◎	14
SSW 10.3	Cs K Sc	10	-	1.00	◎	15
SSW 10.2	Cs Sc K	10	-	1.00	◎	16
SSW 8.8	Cs Sc K	10	-	0.60	◎	17
SSW 8.3	Sc K	10	-	0.30	◎	18
SSW 10.2	Sc K	10	-	-	◎	19
SSW 5.9	S K	10	-	-	◎	20
S 6.7	Sk	10	-		◎	21
S 6.5	Sk	10	-		◎	22
S 7.6	N	10	0.0		●	23
S 5.8	Sk	10	-		◎	24

一九二四年六月二三日 『林学生』創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.0	S	10	0.1	17.5	2
- 0.0	S	10	-	17.8	6
S 1.6	Sk Kc	10	-	25.5	10
N 2.1	Sk K	10	-	29.8	14
W 4.6	Sk C	9	-	29.3	18
E 1.4	Sk	8	-	25.2	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 霧 or 霧雨 2・40 | 10・30。
 盛岡では正午頃まで細かい霧雨が降っていた。『亜細亜学者の散策』の「紺青の湿った山と雲」は实景の描写と見てよい、夕方の風もいかにも安定していない。同一時刻の風が、水沢と盛岡で方向が違い、盛岡の風も観測時ごとに変化している。「かながらのへいそくの十箇が敬虔に置かれ／いろいろの風にさまざまになびく」と描かれた情景は、实景に即しているであろう。
 夜の作品である「温く含んだ南の風が」に描かれた「天はまるでいちめん／青じろい疱瘡にでもかかったやう」とは、水沢で層積雲と巻雲が観測されている情景であろうか。翌六日の午前二時の水沢の雲量はゼロ。南の空に天の川もみえたであろう。「西蔵魔神の風呂敷が／そこの星に吸ひついてゐる」とは、層積雲の黒い影をいつたものか。「この森を通りぬければ」を、深夜の作品と見れば、気象状況の変化をよく反映した三連作である。月齢は二・九。月の入りは二二時。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
S 6.1	N S	10	0.0		●	1
S 6.3	N S	10	0.0		●	2
SSE 5.2	N S	10	0.0		●	3
SW 3.8	S	10	0.1		◎	4
S 2.3	S	10	-	-	◎	5
S 3.2	S Sk	10	0.0	-	◎	6
SW 3.5	N S	10	0.0	-	●	7
S 3.1	S Sk	10	0.0	-	◎	8
SSW 2.8	Sk S	10	-	-	◎	9
W 1.0	Sk S	10	0.1	-	◎	10
SSE 1.0	Sk	10	-	0.10	◎	11
SSW 1.3	Sk	10	0.0	0.20	◎	12
WNW 3.3	Sk	10	-	0.50	◎	13
W 6.3	Sk	10	-	-	◎	14
W 5.7	Sk	9	-	-	◎	15
S 5.3	Sk	10	-	0.30	◎	16
SSW 4.8	Sk	10	-	-	◎	17
SW 3.4	Sk	9	-	0.10	◎	18
W 2.3	Sk	8	-	0.70	◎	19
WNW 3.1	Sk	10	-	-	◎	20
S 2.0	N	10	0.0		●	21
E 0.8	Sk	8	0.0		◎	22
SE 3.3	Sk S	9	-		◎	23
NNW 1.8	Sk	8	-		◎	24

一九二四年七月五日

『亜細亜学者の散策』

「温く含んだ南の風が」

「この森を通りぬければ」

創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.3	三	10	-	22.9	2
- 0.1	三	10	-	22.8	6
N 1.1	C	6	-	28.7	10
NW 1.8	C Kn	5	-	36.0	14
S 12.2	C Kn	1	-	30.0	18
S 4.3	C	2	-	24.4	22

「記事と考察」盛岡 雷鳴・雷電 18・32―19・55。水沢 煙霧 10―22。
この作品とは直接関係はないのだが、ついでに言っておけば、創作日付が不明な一五七番「ほ
ほじろは鼓のかたちちるがへるし」の「岩頸列はまだ暗い霧にひたされて」といった表現が、
実景に基づくとすれば霧の発生した八日、一日、一二日の三日のうちのどれかを考えることも
できる。
「北上川は熒気をながし」下書稿(二)は『一五八 夏幻想』として書かれている。これに
「紺青の地平線」とあり、煙霧の記録とよく符合する。「イーハトヴ川は澎氣をながし／山はまひ
るのうれひをながす」と表現した山川のかがよいは、この日、盛岡で撰氏三六・八度、水沢では
撰氏三七度を記録した炎天の様子をよく写している。積雲が発達し「遠くでひとときれ雷が鳴り」
とあって、「紺青の地平線には／爆鳴銀がしづかに激む」とあるのを考えれば、水沢で観測されて
いる積乱雲(雷雲)が注目される。記録とは雷鳴の時刻がずれているが。

a 盛岡気象台データ

23

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSE 2.4	Sc C	6	-		⊙	1
SE 1.6	Sc C	7	-		⊙	2
- 0.3	Sc C	5	-		⊙	3
SE 0.6	C	6	-		⊙	4
NE 0.6	C Cs	4	-	-	⊙	5
NE 1.7	C Ck	3	-	0.30	⊙	6
NE 0.8	C Cs	4	-	1.00	⊙	7
NE 0.6	Cs C Ck	3	-	1.00	⊙	8
NW 0.5	C Ck	6	-	1.00	⊙	9
SSW 0.7	C K	7	-	1.00	⊙	10
N 1.3	C K	7	-	1.00	⊙	11
N 2.8	C K	5	-	1.00	⊙	12
ENE 1.8	C Ck K	5	-	1.00	⊙	13
WSW 2.2	C Ck K	5	-	1.00	⊙	14
- 0.3	C K	4	-	1.00	⊙	15
WNW 2.5	C K	4	-	1.00	⊙	16
SW 2.4	C K	3	-	1.00	⊙	17
SSW 4.6	K C	7	-	1.00	⊙	18
SW 6.7	Kn Cs	8	-	0.60	⊙	19
S 2.0	Kn Sk Sc	10	0.0	-	⊙	20
SE 4.2	Sk	10	-		⊙	21
SE 4.1	Sk Sc	10	-		⊙	22
S 4.2	Cs Sk	6	-		⊙	23
S 3.6	Cs	1	-		○	24

一九二四年七月二日 「北上川は熒気をながし」下書稿(二) 『夏幻想』創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.0	S	7	-	21.0	2
- 0.0	≡	10	-	21.8	6
S 1.0	Cs K	1	-	29.3	10
SSW 6.0	Ck Kn	3	-	33.4	14
S 6.1	Cs	3	-	27.1	18
SSW 1.2	Cs	2	-	21.6	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 霧3・07―5・54。雷鳴・雷電11・41、12・13―14・38、17・42―17・58、20・18―20・21。波状雲12・48―14・22。水沢 霧1・30―8・00。
 「北上川は焚気をながし伊」下書稿(二)は、『一六五 夏』として、書かれている。この日の午後は積乱雲がよく発達し風もあつた。これに「緑青の巨きな松の嶺から／四足の鳥が吐き出されれば／そこは恐ろしく黝んだ積雲の盛りあがり／一つの咽喉が黄いろに焦げついたり／それがまたくつきり次に投影されたり／下では融けかゝるオレフィンの雲や／すさまじい天の混乱の序曲です」と描いた空の情景は実際に見られたはずである。この日も気温は盛岡と水沢で櫻氏三三・四度。暑さに耐えかねた詩人が、河原を散歩して捉えた情景であろう。
 原稿裏に「一五八と同種の幻聴です」とあるのは、「まあ あたし／月見草の花粉でいっぱいだわ」という声をきいたことを意味しているよう。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
- 0.4	Cs	0	-		○	1
S 2.5	Cs	0	-		○	2
ESE 1.3	Cs	3	-		⊙	3
ENE 0.6	Cs S C	6	-		⊙	4
- 0.4	Sc S	7	-	-	⊙	5
ENE 0.6	Sc S	6	-	0.10	⊙	6
NNE 2.0	Cs S	4	-	1.00	⊙	7
NNW 1.0	Cs C S	4	-	1.00	⊙	8
NNE 0.8	Cs K	3	-	1.00	⊙	9
S 2.8	K	4	-	1.00	⊙	10
S 4.1	Cs Kn	3	-	1.00	⊙	11
S 5.9	Sc Kn	5	-	1.00	⊙	12
S 5.4	Kn Sc	7	-	1.00	⊙	13
SE 8.3	Kn Sc	8	-	0.20	⊙	14
ESE 4.9	Sc Kn	8	-	-	⊙	15
SE 4.0	Sc	9	-	0.40	⊙	16
SSE 5.7	Sc Ck	8	-	1.00	⊙	17
S 7.1	Sc Kn	5	-	1.00	⊙	18
S 5.8	Sc Cs	3	-	-	⊙	19
S 6.0	Sc	2	-	-	○	20
S 5.7	Sc	2	-		○	21
S 4.9	C S	3	-		⊙	22
SSE 4.2	Cs K	3	-		⊙	23
SSE 2.8	Kc	5	-		⊙	24

一九二四年七月二三日 「北上川は焚気をながし伊」の下書稿(二) 『夏』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.0	S	10	-	22.3	2
S 1.6	S Sk	10	-	22.2	6
S 5.3	Sk	3	-	28.3	10
SSW 10.3	Sk	0	-	29.4	14
S 8.8	Sk Kc	6	-	25.9	18
S 9.5	S	10	-	24.5	22

この日は、昼前から空が晴れ渡っていた。原稿には「一六五ニツク」とあるのだが、空の様子はまったく違っている。「稲草が魔法使ひの眼鏡で見たといふふうで／天があかるい孔雀石板で張られてあるこのひなか」と表現された情景は、最高気温も盛岡で摂氏二九・九度、水沢で摂氏二九・七度まで下がった澄明感の中で捉えられるものであろう。

かわせみや甲虫など近くの小動物に注目しているのも、この段階からである。下書稿(一)(二)のそれぞれ違った背景から得たものが、選択的に組み合わせられ、発展されて行くのだが、その場合、作品番号は早いものが取られ、創作日付は遅いものが採用されて行く。これは三〇五番の「その洋傘だけでどうかなあ」の場合もおなじである。

〔記事と考察〕

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
S 4.0	Sk	4	-		①	1
S 3.3	Sk	4	-		①	2
SSE 2.8	Sk	10	-		◎	3
SSE 2.6	Sk	10	-		◎	4
SSE 2.3	Sk	10	-	-	◎	5
SE 0.6	Sk	10	-	-	◎	6
SSE 1.6	Sk	10	-	0.10	◎	7
SSW 3.6	Sk	10	-	-	◎	8
SSW 5.0	Sk	8	-	0.35	◎	9
SSW 6.6	K	4	-	0.80	①	10
SSW 6.8	K	2	-	0.90	○	11
SSW 8.3	K	1	-	1.00	○	12
SSW 8.5	K	0	-	1.00	○	13
SSW 9.1	K	0	-	1.00	○	14
SSW 8.0	K	0	-	1.00	○	15
SSW 7.5	Sc K	0	-	1.00	○	16
SSW 8.0	Sc	0	-	1.00	○	17
SSW 9.9	Sc K	1	-	1.00	○	18
SSW 8.2	Sc K	5	-	0.65	①	19
S 6.9	Sk	9	-	-	◎	20
S 6.7	N S	10	0.0		●	21
SSW 5.0	Sk S	10	0.0		◎	22
S 5.3	N S	10	0.0		●	23
SSW 4.2	N	10	0.0		●	24

一九二四年七月一五日 「北上川は焚気を流しよ」 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
S 8.9	Sk Kc	10	-	22.9	2
S 3.1	S	10	-	23.1	6
SW 1.1	Sk	10	-	26.4	10
WNW 0.7	Kc C Sk	10	-	30.1	14
SSW 3.6	Kc C Sk	10	-	28.7	18
SSW 1.2	S Kc	10	0.0	24.1	22

『春と修羅』第一集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 夕焼け17・35―18・40。
 作品は抹消されていたものを、『校本全集』の校訂者が翻刻したものの。
 この日、盛岡では午前中に、水沢では夕方小雨が降っている。空気が不安定な日であった。雲も多いが、日照もあるから、高い雲が多かったと見られる。
 盛岡で夕焼けが観測されているが、詩人の目は南に向いている。
 「薙露青の聖らかな空明」とは、水沢で観測されている券雲のひろがる夕暮れ時の空をいったものであろうか。「薙露青」に類似した色には「葱緑の天」「水色の空」がある。
 層積雲は「秋の鮎のさびの模様が／そらに白く数条わたる」と描かれた雲であろう。「灰いろはがねのそらの環」といった描写も、雲の多い日の空であることを示している。
 月は旧暦六月一六日の月。月齢は一四・九。月の出の時刻は一九時三十分。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSW 2.9	S Sk	10	-		☉	1
SSW 1.8	S	10	-		☉	2
SSW 1.8	N	10	0.0		●	3
S 3.3	S	10	0.0		☉	4
S 2.5	S Sk	10	-	-	☉	5
SSW 3.0	Sk S	10	-	-	☉	6
SSW 3.3	S Sk	10	-	0.40	☉	7
SSW 5.5	Sk	10	-	0.20	☉	8
SSW 6.4	Sk S	10	-	-	☉	9
SSW 6.3	N Ck	10	0.0	0.60	●	10
S 6.9	Ck Sc S	10	0.0	0.30	☉	11
S 5.6	Sc K	10	-	0.30	☉	12
SSW 4.9	Sc Ck K	10	-	0.60	☉	13
SSW 4.2	Sc K Ck	10	-	0.60	☉	14
S 1.8	Kc Ks C	9	-	0.70	☉	15
SSE 0.6	Kc K	9	-	0.60	☉	16
N 1.7	Kc Sc K	8	-	0.80	☉	17
NNE 1.9	Kc Sc K	7	-	0.30	☉	18
NE 2.2	Kc Sc K	9	-	-	☉	19
- 0.3	Kc Sc	10	-	-	☉	20
S 4.0	Sc Sk	10	-		☉	21
S 3.4	Sk	10	-		☉	22
ESE 1.5	Sk S	10	-		☉	23
ESE 2.0	N	10	1.4		●	24

一九二四年七月一七日 『薙露青』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
SSW 2.7	Kc Cs	2	-	16.8	2
E 0.6	Kc	10	-	16.4	6
S 2.9	Kc Sk	10	-	23.9	10
S 7.9	Kc Sk K	9	-	26.6	14
S 4.9	Kc Sk	7	-	22.6	18
S 1.5	Sk	10	-	20.9	22

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSE 1.2	Kc Sk	10	-		☉	1
SSE 1.8	Kc Sk Ck	6	-		①	2
SE 3.0	Cs	2	-		○	3
S 4.8	Cs	5	-		①	4
SE 5.8	Kc Sc	6	-	-	①	5
SSE 3.5	Kc Ck K	10	-	-	☉	6
- 0.2	Kc K	9	-	0.30	☉	7
- 0.2	Kc K	8	-	0.30	☉	8
SSE 2.8	Kc K	4	-	1.00	①	9
SSW 3.3	Sk K	10	-	0.70	☉	10
SSW 2.5	Sk	10	-	-	☉	11
ESE 3.3	Sk	10	-	0.35	☉	12
SE 3.0	Sk	10	-	-	☉	13
- 0.4	Sk	10	-	-	☉	14
WSW 0.5	Sk	10	-	-	☉	15
SE 0.8	Sk	10	-	-	☉	16
SSW 3.4	Sk	10	-	-	☉	17
SSE 3.2	Sk	10	-	-	☉	18
S 2.4	Sk	6	-	-	①	19
SSE 3.1	Sk	2	-	-	○	20
SE 1.7	Sk	10	-		☉	21
SSE 1.4	Sk	10	-		☉	22
SSE 2.3	Sk	10	-		☉	23
SSE 1.3	Kc	6	-		①	24

27

一九二四年八月一七日 「北いつばいの星ぞらに」 『早池峰山嶺』 創作日付の日

『春と修羅』 第二集創作日付の日の気象状況(木村)

[記事と考察]

これらの早池峰登山の作品を、一七日の夜明け前から夜明けにかけての行程で生まれたとみれば、「北いつばいの星ぞらに」は午前二時すぎ頃の情景に素材を得ているのであろう。月も旧暦七月一六日、月齢一四・九の月である。「草の穂やおほほこの葉が／みんなくつきり影を落す／この清澄な月の味爽近く」の情景は、あつたはずである。岳の部落から早池峰山登山口への谷底の道をたどる「萱野十里」で見える空は狭い。中天近くに雲がなければ、下書稿(二)の「じつにそらはひとつの寶石類の大集成」と「北いちめんの星と嶺線」の印象になる。

『早池峰山嶺』の下書稿(二)に雲の表現が多いのも、データと符合する。「乱積雲の^{グラドマ}大行進も北へそくぐ」とあるのも、六時ごろの南南東の風と一致する。「はるかにひかる積雲のいちれつ」ともあるが、これも盛岡の記録にある。

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
S 2.1	S	10	-	22.4	2
S 1.5	≡	10	-	22.4	6
SSE 2.3	Sk	10	-	25.1	10
S 1.8	Sk	10	-	26.7	14
N 3.5	N	10	8.8	24.1	18
N 6.8	N	10	10.2	22.9	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 霧雨or霧 2・16―8・10。雨 15・59―22・40。
 午後のひとときのほかは、風のない日であることが注目される。霧雲と雨雲が立ちこめた春雨を思わせる日だったのだろうか。気温も高くない。
 この作品は下書稿(一)の書き込み「四月の水」という言葉も見えて、春のモチーフを夏に創作しているのであるから、本来虚構性がある。
 ただ、「山脈はけむりになってほのかにながれ」といった情景は、かえってこの日の実景に素材を得ているとも考えられる。「青い蛇はきれいなねをひろげて／そのひかりをとんで行く」とあるのも、実際に煙がのぼる情景と見れば、風のない日であればこそ見られるものである。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SE 1.1	Sk	10	-		☉	1
- 0.0	S Sk	10	-		☉	2
- 0.0	N S	10	0.0		●	3
- 0.1	N S	10	0.1		●	4
- 0.0	N S	10	0.1	-	●	5
- 0.0	N S	10	0.2	-	●	6
- 0.0	N S	10	0.2	-	●	7
- 0.2	S	10	0.0	-	☉	8
SW 0.7	S Sk	10	-	-	☉	9
S 1.7	Sk S	9	-	0.30	☉	10
SW 3.4	Sk K	10	-	0.70	☉	11
S 3.8	Sk K	10	-	0.60	☉	12
SSW 5.1	Sk	10	-	0.80	☉	13
SSW 5.3	Sk	10	-	0.80	☉	14
SW 1.8	Sk	10	-	-	☉	15
- 0.2	N	10	0.0	-	●	16
- 0.1	N	10	1.1	-	●	17
N 1.0	N	10	2.2	-	●	18
WNW 1.1	N	10	6.4	-	●	19
N 3.3	N	10	4.3	-	●	20
NNW 1.3	S N	10	0.2		☉	21
NNE 2.5	S N	10	-		☉	22
NE 0.6	Sk S	10	0.0		☉	23
NNE 1.6	Sk S	10	-		☉	24

1924年八月二三日 『一八四 春』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.2	Sc	10	-	18.0	2
S 1.2	Sc Sk	10	-	17.9	6
- 0.1	Sc Sk	10	-	19.5	10
W 1.5	Sc Sk	10	-	20.1	14
- 0.0	Kc Cs	10	-	19.2	18
- 0.4	Kc	1	-	14.4	22

a 盛岡気象台データ

29

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSE 2.1	S	10	-		☉	1
- 0.3	S	10	-		☉	2
NE 3.3	S	10	-		☉	3
NNE 3.3	S Sc	9	-		☉	4
NNE 2.3	Sc S Sk	10	-	-	☉	5
NE 1.2	S Sc Ck	10	-	-	☉	6
NE 1.2	S Sc K	10	-	-	☉	7
- 0.2	S K Sc	10	-	-	☉	8
- 0.4	S K Sc	10	-	-	☉	9
- 0.0	Sc S K	10	-	-	☉	10
SSW 3.2	Sc S K	10	-	-	☉	11
SW 2.7	Sc S K	10	-	-	☉	12
W 2.3	Sc K	10	-	-	☉	13
WNW 2.2	Sc K	10	-	-	☉	14
SW 2.8	Sc K	10	-	-	☉	15
SSW 1.8	Sc K	10	-	-	☉	16
SW 1.8	Kc Cs S	10	-	-	☉	17
S 2.0	Kc S	9	-	-	☉	18
SE 2.2	Kc S	8	-	-	☉	19
SE 1.2	Kc S	8	-	-	☉	20
SE 0.7	Kc S	8	-		☉	21
- 0.3	Kc	1	-		○	22
S 1.3	Sc S	1	-		○	23
S 1.8	Sc S	2	-		○	24

一九二四年九月六日 『風と杉』 創作日付の日

『春と修羅』 第二集創作日付の日の気象状況(木村)

[記事と考察] 盛岡 霧3・55 | 7・43。朝焼け4・45 | 5・23。

この日は、雨も降らないが日も照らず、どんよりした日だったはずである。

「まばゆい白い空がかぶさり」とか「ぼつんと白い銀の日輪」「もいちどまばゆい白日輪」といった表現は、風もなくすりガラス状の高層雲に覆われたこの日の実景に近いであろう。

日向で昼寝をしている詩人の現実と幻想の入り交じった感覚が描かれているのであろうが、風の穏やかだったこの日の雰囲気にはふさわしい作品といえよう。

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
S 1.3	N	10	0.6	20.4	2
S 8.5	S Sk	10	0.1	21.2	6
SW 2.3	N	10	1.5	22.7	10
S 3.0	Sk S	10	9.7	24.1	14
N 3.2	S N	10	4.5	21.5	18
N 0.5	S Sk	10	0.7	20.3	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 雨 or 霧雨 0・10 | 22・32。
 雨と霧に閉ざされた日。夜中以降晴れてくるのだが、雨雲と霧に包まれた日の夜中に、「ぬれた夜中の焼きぼつ杭によっかか」っている詩人の心意には痛ましいものがある。「おい、きやうだい、／へんじしてくれ／そのまっくろな雲のなかから」とよびかけた雲は、やはり現実の雲に相違ないのだが、詩人に夜中を徘徊させたものはもちろん別にあるにちがいない。
 この日の月齢は九・八。月の入りは一時二七分だが、雲に覆われて、詩人の心を明るくすることはできなかつたのだろう。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSW 5.5	N	10	1.2		●	1
SSW 2.3	N	10	2.9		●	2
SSW 6.3	S	10	2.4		◎	3
SW 6.9	S	10	-		◎	4
SW 5.3	N	10	0.7	-	●	5
SSW 5.4	N	10	10.2	-	●	6
SW 6.6	S	10	3.1	-	◎	7
SW 5.1	N S	10	0.1	-	●	8
SSW 5.3	N	10	1.9	-	●	9
SW 9.9	N	10	12.2	-	●	10
SW 5.3	N	10	3.2	-	●	11
SSW 6.2	S	10	0.1	-	◎	12
SSW 9.3	N	10	0.0	-	●	13
SW 5.8	S	10	0.1	-	◎	14
SW 4.8	N	10	0.3	-	●	15
SSW 2.4	N	10	6.2	-	●	16
SSW 6.3	N	10	4.3	-	●	17
SSE 3.4	N	10	4.7	-	●	18
SSE 0.7	S	10	0.0	-	◎	19
W 2.2	S	10	-	-	◎	20
WNW 0.5	N	10	0.3		●	21
S 1.3	N	10	0.0		●	22
SSE 3.1	Sk Kc S	8	0.0		◎	23
SSE 1.5	S Kc	10	-		◎	24

一九二四年九月九日 『雲』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
S 1.3	Sk	7	-	18.5	2
E 0.7	Sk	1	-	19.3	6
NW 9.1	Sk	2	-	23.0	10
WNW 14.0	Sk	0	-	23.6	14
NW 4.9	Sk	0	-	18.0	18
SE 0.9	Sk	0	-	13.2	22

「記事と考察」
 いずれも幻想的な作品で、断片稿であるから、現実的背景がどこまで投影しているか判断に困難な点がある。ただ、『塚と風』の「青いさらには瓔珞もきらめく」といった表現は、この日の空を背景にしていると考えても矛盾はない。「かぜがくれば」の「雲は尾をひいてはせちがひ／山はひとつのカメラオンで／藍青やかなしみや／いろいろの色素粒が／そこにせはしく出没する」といった表現は、風が強く、晴天に積雲のちぎれ雲がただよう空と、山の木々が風に揉まれている様子の幻想化表現と見れば、ぴたりとつじつまは合っている。

a 盛岡气象台データ

31

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSE 1.0	Kc	5	-		⊙	1
SSE 1.8	Sk	6	-		⊙	2
SSW 2.4	S Sk	7	-		⊙	3
S 3.0	Sk	2	0.2		○	4
SSE 1.8	K S	3	-	-	⊙	5
NW 2.4	K	1	-	-	○	6
NW 3.4	K	2	-	0.50	○	7
WSW 1.1	K	4	-	1.00	⊙	8
NNW 2.0	K	7	-	1.00	⊙	9
W 3.1	K	5	-	1.00	⊙	10
WNW 11.0	K	3	-	1.00	⊙	11
NW 13.5	K	1	-	1.00	○	12
NW 11.4	K	2	-	1.00	○	13
NW 12.9	K	1	-	1.00	○	14
WNW 8.3	K	1	-	1.00	○	15
NW 8.2	K	2	-	0.80	○	16
NW 3.9	K	1	-	1.00	○	17
NW 3.3	K	1	-	0.65	○	18
- 0.4	Sk	1	-	-	○	19
SE 4.1	Sk	1	-	-	○	20
SSE 2.8	Sk	0	-		○	21
S 1.5	Sk	2	-		○	22
S 3.0	Sk	2	-		○	23
SSE 3.5	Sk	1	-		○	24

一九二四年九月二〇日 『塚と風』 「かぜがくれば」 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
SE 0.8	Cs S	10	-	10.8	2
SE 1.2	Cs C Kc	10	-	10.1	6
NE 0.9	Kc Sk	10	-	17.0	10
S 3.5	Sc	10	-	20.6	14
SSW 2.4	Sc	10	-	18.6	18
SSW 2.1	Sk	10	-	17.3	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

光冠?。
 「記事と考察」盛岡 月光暈 | 2・43。霧 4・15 | 7・25。波状雲 11・52 | 13・15。水沢 月
 この日は雲も多かったが、日照もあった。雲はさほど厚くなかったであろう。
 作品中天象にかかわる表現は、「またあま雲の螺鈿からくる青びかり」だけだが、これは雲の上
 の月の光が、雲をまだら模様になっているのをいったものと解釈される。
 電燈といなづまの光の交叉に気を取られていた詩人が、気づいて見たら、自分がもう一つの光
 をうけていたと気づいたことを述べている。これは雲を通してとどく月の光を意味していよう。
 その微かな光を、詩人は精神にある力を与えるものとして受けとめたわけである。
 この日の月は旧暦八月一八日、月齢一六・八の月。十分明るい。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SE 0.9	Cs	10	-		☉	1
ENE 1.5	Cs	9	-		☉	2
NE 2.2	Cs	8	-		☉	3
NE 1.0	Cs	10	-		☉	4
NE 3.0	Cs S	5	-	-	①	5
- 0.2	Cs S	8	-	-	☉	6
NNE 1.8	Cs S	10	-	0.40	☉	7
N 1.8	Cs Ck	10	-	1.00	☉	8
NW 1.6	Cs Ck	10	-	1.00	☉	9
NW 1.2	Ck Cs Kc	9	-	1.00	☉	10
SW 1.8	Kc Ck	10	-	1.00	☉	11
SW 2.4	Kc Ck Cs	10	-	1.00	☉	12
S 6.2	Kc Cs	10	-	1.00	☉	13
SSW 6.3	K Kc	10	-	0.60	☉	14
SSW 4.8	K	10	-	-	☉	15
SSW 4.0	K	10	-	0.15	☉	16
SSW 2.4	S K	10	-	-	☉	17
SSE 3.0	Sc K	10	-	-	☉	18
SSE 3.0	S	10	-	-	☉	19
S 1.5	S	10	-	-	☉	20
S 3.1	S K	10	-		☉	21
S 1.3	Cs Kc	10	-		☉	22
- 0.3	Cs Kc	9	-		☉	23
W 1.3	Cs Kc	9	-		☉	24

一九二四年九月一六日 『秋と負債』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
NW 2.1	Sk	10	-	16.9	2
E 3.3	Sk	10	-	18.5	6
NNE 3.3	S Sk	10	-	20.0	10
N 1.3	N	10	0.8	19.7	14
NNW 3.3	N	10	1.2	19.1	18
N 1.8	N	10	1.6	18.5	22

〔記事と考察〕盛岡 月光量0・37―2・58。水沢 雨11・00―
 南東の風、つまりやませが吹いたために、低い霧状の層雲が広がっていた日であるから、空も霞んだように見えたはずである。下書稿(一)に「水いろのそら、白い雲」とか「日は青いモザイクになって砕ける」とあるのは、層雲を通して見た空や太陽の様子を捉えたものであろう。水沢では昼前から雨が降っている。
 その手入形で「林の上で／あのまっ青な凹面鏡がゆすれると／そこらはまるで暗い虹だの／顫る。林の中の蜘蛛の糸や羽虫が「暗い虹だの／顫るなみ」と見えるのも、糸や羽が湿っているからであろう。
 盛岡と水沢とで風の向きがまったく違っている例の一つである。水沢でも午後の雲の流れは東風になっている。

a 盛岡気象台データ

33

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SW 3.0	Sc Kc	9	-		☉	1
SW 1.0	Sc Kc	9	-		☉	2
N 1.3	Sc S	9	-		☉	3
N 2.5	Sc S	9	-		☉	4
S 1.1	Sc S	10	-	-	☉	5
S 4.3	Sc S	10	-	-	☉	6
S 3.2	S Sc	10	-	-	☉	7
WSW 1.4	S Sc K	10	-	0.10	☉	8
WNW 0.5	S Ck K	10	-	0.25	☉	9
W 2.0	S Kc K	9	-	0.70	☉	10
SE 7.7	S Kc	9	-	0.50	☉	11
SE 6.4	S Kc	10	-	0.35	☉	12
SSE 7.4	S	10	-	0.55	☉	13
SE 9.8	S Kc	10	-	0.05	☉	14
SE 5.3	S	10	-	0.20	☉	15
SSE 6.5	S	10	-	-	☉	16
SE 5.8	S Ck	10	-	-	☉	17
S 1.9	S Ck	10	-	-	☉	18
SE 0.5	S Ck	8	-	-	☉	19
ENE 3.8	S	10	-	-	☉	20
NNE 3.9	S Kc	10	-		☉	21
NNE 3.4	S Kc	10	-		☉	22
NE 5.3	S Sk	10	-		☉	23
ENE 5.9	S Sk	10	-		☉	24

一九二四年九月二七日 「落葉松の方陣は」 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
W 1.6	Sk	10	-	9.9	2
N 0.9	Sk	9	-	9.0	6
N 1.5	Sk Kc	7	-	18.5	10
NW 6.4	Sk Kc	3	-	20.5	14
WNW 1.7	C Kc	10	-	14.9	18
NW 0.6	Cs	1	-	8.8	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 夕焼け17・07―17・45。雷鳴19・43―22・43。
よく晴れた秋の一日だが、夕方の盛岡の雷鳴は、天気的不安定さを示しているのだろうか。日没の時刻、盛岡は快晴で水沢は雲量10であるから、花巻から見れば北に巻雲が、南に高積雲(うろこ雲?)が広がっていたのであろうか。下書稿(一)の「まばゆく燃える萱の穂や／ちゞれて傷む西の雲」といった表現も、実景を踏まえたものであろう。
「緑びらうどの山の皺」「はたけのへりでは麻も油緑の夕陽に燃える」といった表現も、よく晴れた秋の夕陽に包まれた情景としてふさわしい。
下書稿(一)では「穂のない粟をとりいれる人」として書かれた作品が、定稿では、凶作であることを背景に沈めた作品になっているが、自然の情景はそのまま生かされている。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NNE 2.6	-	0	-		○	1
SE 2.3	-	0	-		○	2
SSE 4.0	Sk	3	-		⊙	3
NNE 1.2	Sk	4	-		⊙	4
N 1.1	Sk S	3	-	-	⊙	5
NNE 1.7	Sk S	1	-	-	○	6
ENE 0.7	S K	1	-	0.30	○	7
S 0.7	K S	1	-	1.00	○	8
S 1.5	Kc K	4	-	1.00	⊙	9
WNW 0.8	K Kc	5	-	1.00	⊙	10
NNW 2.9	K	7	-	1.00	⊙	11
NW 1.1	K	6	-	1.00	⊙	12
WNW 5.8	K	3	-	1.00	⊙	13
NNE 5.5	K	7	-	1.00	⊙	14
NW 7.5	K Sc	4	-	1.00	⊙	15
WNW 5.8	K Cs	3	-	1.00	⊙	16
W 4.1	Kc C	2	-	1.00	○	17
NNE 2.3	C	1	-	0.60	○	18
NNE 3.0	-	0	-	-	○	19
ESE 2.8	Sk	1	-	-	○	20
ESE 2.1	-	0	-	-	○	21
ESE 2.5	Sk	1	-	-	○	22
SSE 0.6	Sk	1	-	-	○	23
NE 1.7	-	0	-	-	○	24

一九二四年九月二七日

「しばらくぼくと西日に向ひ」創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
WSW 0.7	C	1	-	10.4	2
NNW 3.0	Kc	0	-	9.0	6
NE 2.4	Kc Sk	1	-	19.0	10
- 0.1	Sk	1	-	21.9	14
S 6.9	Sk	2	-	17.4	18
S 2.0	Sk	10	-	14.2	22

〔記事と考察〕
盛岡では、この日の深夜から翌朝にかけて南東の風つまりやませが吹いて、高層雲・層雲（霧雲）が広がってくる状況にあった。南の水沢の気象の変化は、もう少し早いようである。天気は夜に入って不安定な状況にあった。

ただ、「乱れた鉛の雲の間に／びどく荒んだ月の死骸があらはれる／それはあるひは風に膨れた大きな白い星なのか」と曖昧に表現された月は、旧暦九月四日、月齢三・三。月を描いたものであれば、月の入り一九時四三分より前のはず。

作品の場所も、豊沢川の岸を想定するか北上川の河岸を想定するかで解釈の違いが出てくる。下書稿（一）の「風の息吹きがまた来れば」という書き出しは、わずかな気配から気象の急変を察知した表現といえそうである。下書稿（二）で「夜の息吹きが／川面いっぱい翹ってきて」「雨ははじめ落ちてくる」とし、強調した部分には、時間的に少し後のイメージが含まれているかもしれない。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
- 0.4	S	3	-		①	1
NNE 1.2	S	1	-		○	2
SSE 0.9	S	1	-		○	3
- 0.3	S	0	-		○	4
- 0.4	S	1	-	-	○	5
NE 1.3	S	1	-	-	○	6
NE 1.3	S	1	-	0.10	○	7
NE 0.9	Sc S	1	-	1.00	○	8
NNW 1.7	Sc S K	1	-	1.00	○	9
N 2.8	K	1	-	1.00	○	10
NW 3.7	K	2	-	1.00	○	11
NW 1.8	K	3	-	1.00	①	12
N 2.2	K	3	-	0.85	①	13
SSE 0.8	K	4	-	1.00	①	14
NNW 2.1	K	4	-	1.00	①	15
NNE 1.1	K	5	-	1.00	①	16
NNW 1.2	K	2	-	0.85	○	17
E 0.8	Kc	6	-	0.15	①	18
NE 1.9	Kc	1	-	-	○	19
NE 3.4	S	1	-	-	○	20
- 0.1	S	2	-		○	21
- 0.3	Sc	8	-		◎	22
S 1.8	Sc S	9	-		◎	23
S 1.5	Sc S	10	-		◎	24

一九二四年一〇月二日 「南のはてが」 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
SSW 2.3	N	10	0.0	17.1	2
SSE 2.4	Sc Sk	10	0.0	16.5	6
S 9.5	Sk Kc	10	-	21.3	10
S 5.6	Sc Sk	10	-	22.2	14
N 2.8	N	10	2.8	18.8	18
S 1.0	N	10	3.0	17.5	22

『春と修羅』第一集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕
南の風が層雲を運び、午後には小雨も降り出した日であった。
下書稿(二)で「雲の鎖のむら立ちや／また木醋を宙に充てたり」と描いた情景は、低い霧のような雲が立ち込めている様を捉えたものであろう。「一つの森が風のなかにけむりを吐けば／そんなつめたい白い火むらは／北いっばいに飛んるる」とあるのは、北の盛岡で層雲が記録されているのとよく見合っている。
関西に比べて一時間、日の暮れ方が早い東北の秋の夕暮れ近くであろうか。
「ひとは幽霊写真のやうに／白いうつぼの稲田に立って／ただほんやりと風を見送る」といった表現も、やませに襲われて暗澹とした気持ちである農民の心と眼前の情景とを重ねた表現であろう。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
S 2.8	S	10	-		☉	1
S 2.5	S	10	-		☉	2
S 3.0	S	10	-		☉	3
S 2.0	S	10	-		☉	4
S 1.9	S	10	-	-	☉	5
S 2.7	S	10	-	-	☉	6
S 3.3	S	10	-	-	☉	7
S 2.3	N S	10	0.0	-	●	8
SSW 5.2	S	10	0.0	-	☉	9
SSW 8.3	S	10	-	0.40	☉	10
SSW 8.6	S Kc	10	-	-	☉	11
SSW 8.5	S	10	-	0.20	☉	12
SSW 8.2	S Sc	10	-	-	☉	13
S 7.3	S Sc	10	-	-	☉	14
S 6.6	N S	10	0.0	-	●	15
S 0.8	N	10	0.3	-	●	16
SSE 1.8	N	10	0.6	-	●	17
NNW 1.0	N	10	0.0	-	●	18
SSW 3.8	N	10	0.3	-	●	19
SSE 3.9	N	10	0.1	-	●	20
W 1.9	S	10	0.0		☉	21
S 2.8	N	10	0.4		●	22
W 2.1	N	10	0.3		●	23
SW 2.7	N	10	0.1		●	24

一九二四年一〇月四日 『昏い秋』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
S 1.0	Sk	10	0.8	16.6	2
N 2.3	Sk	10	-	15.4	6
N 2.9	Sc Sk	10	-	16.5	10
N 0.8	Sc Kc	10	-	16.6	14
E 1.6	Sk Kc	10	-	13.6	18
ENE 1.9	Sk C	9	-	9.3	22

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NNE 1.2	S	10	0.2		☉	1
SE 1.6	S	10	-		☉	2
NNE 5.3	S	10	-		☉	3
WNW 5.8	S	10	0.1		☉	4
N 3.5	S	10	-	-	☉	5
ENE 1.8	S Sc	10	-	-	☉	6
SW 1.2	S Sc	10	-	-	☉	7
W 1.6	S Sc	10	-	-	☉	8
WNW 5.0	Sc S	10	-	-	☉	9
WNW 2.9	Sc Kc	10	-	-	☉	10
WNW 7.6	Sc Kc K	8	-	-	☉	11
W 6.3	Sc Ck	8	-	-	☉	12
S 6.0	Sc Ck	9	-	0.10	☉	13
WSW 7.2	Sc Ck	9	-	0.25	☉	14
S 3.3	Sc Ck	6	-	-	①	15
SW 4.1	Ck Sc	6	-	0.80	①	16
WSW 3.3	Sc Ck	10	-	0.95	☉	17
W 3.1	Sc Kc	9	-	0.40	☉	18
E 1.7	Sc Kc	8	-	-	☉	19
SE 4.3	Sc K	6	-	-	①	20
SE 3.2	Kc	1	-		○	21
SSE 1.5	Kc	0	-		○	22
SE 1.3	S	2	-		○	23
SSE 1.5	S Sc	2	-		○	24

一九二四年一〇月五日 『産業組合青年会』 「夜の湿気と風がさびしくいりまじり」 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

【記事と考察】

作品の場所は花巻市街から約十キロメートル北、日詰の五郎沼の付近。

盛岡では夜になって晴れているし、水沢でも雨は降っていないが、午後、雲が多いから日詰付近で少し時雨が残ったのかもしれない。『産業組合青年会』の「草稿的紙葉」に「つめたい雨は／宙でびしびし鳴っている」と描かれた情景も、あえて虚構とするより、その方が自然であろう。

「夜の湿気と風がさびしくいりまじり」の下書稿（二）『業の花びら』に「そらには暗い業の花びらがいつぱいで」と描かれたものは、月齢六・三ですすでに山陰に隠れた月（月の入は二二時一七分）のかすかな光を受けた波状高積雲か。

この時刻になると、雨も止み、「わづかのさびしい星群が／西で雲から洗ひだされ」ている。

ただ、「空のずるぶん高いところを／風がごうごう吹いてある」と描かれた風は、詩人の感覚だけが捉えたものでなければ虚構である。

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
NE 1.8	Sk	8	-	10.4	2
S 2.9	Sk	0	-	7.2	6
E 1.2	C Sk	6	-	17.6	10
S 2.5	C Cs	10	-	21.0	14
SSE 3.3	C Cs	10	-	14.0	18
E 1.1	Cs	10	-	10.7	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

量 22。
 「記事と考察」盛岡 霧4・52―5・48。日の暈15・32―16・35。月光暈17・44―。水沢 月光
 この日の夜から翌日の早朝にかけての空は、太陽がすり硝子を通して見るようになる巻層雲に
 覆われていた。盛岡と水沢で月の暈も観測されている。
 生前発表形や下書稿に「十三日のけぶつた月のまはりには、／＼十字になった白い暈さへあらはれ
 て、」と描かれた情景は、「十字になった」暈の意味がよくわからないが、大体実景に基づくもの
 と考えてよいであろう。この日は旧暦九月一三日、月齢一二・三の月夜であった。
 月夜とはいっても、澄明な空ではなかったから、下書稿(二)の手入形に「野原ぜんたいうす
 墨いろのいまごろに」と書き込まれたりするのであろう。
 同じ月夜でも「北いっばいの星ぞらに」の月と、その澄明感が微妙に書き分けられていて、し
 かも、気象状況を正確に反映している。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SE 1.6	Sk	0	-		○	1
SE 1.4	Sk	0	-		○	2
SE 2.8	-	0	-		○	3
NE 1.8	-	0	-		○	4
E 3.4	S	0	-	-	○	5
SE 1.8	S	0	-	-	○	6
- 0.3	Cs	1	-	0.10	⊙	7
SSW 1.8	Cs	3	-	1.00	⊙	8
S 1.4	Cs C	3	-	1.00	⊙	9
SSW 3.0	Cs C	5	-	1.00	⊙	10
SSW 5.3	Cs C	6	-	1.00	⊙	11
SSE 5.2	Cs C K	3	-	1.00	⊙	12
S 5.7	C Cs K	4	-	1.00	⊙	13
S 5.6	C Cs K	8	-	1.00	⊙	14
SSW 4.3	C Cs	3	-	1.00	⊙	15
SSE 2.7	Cs C	10	-	1.00	⊙	16
SE 3.5	Cs C	6	-	0.80	⊙	17
SE 2.9	Cs	10	-	-	⊙	18
SE 2.2	Cs	10	-	-	⊙	19
SSE 3.6	Cs	10	-	-	⊙	20
SE 4.0	Cs	10	-		⊙	21
SE 2.8	Cs	10	-		⊙	22
SE 1.8	Cs	10	-		⊙	23
WSW 0.7	Cs	10	-		⊙	24

一九二四年一月一日 『善鬼呪禁』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
N 0.7	Sk	10	-	11.1	2
N 1.1	Sk Sc	9	-	9.8	6
NW 2.4	Sk	0	-	16.0	10
NW 11.1	Sk C	2	-	21.6	14
NW 1.5	C Sk	0	-	15.2	18
N 2.3	-	0	-	11.2	22

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NNE 1.4	Cs Sk	10	-		☉	1
- 0.2	Cs Sk	10	-		☉	2
N 1.1	Sk Cs	10	-		☉	3
NNE 1.7	Sk Cs	10	-		☉	4
NE 1.3	Sk Sc	10	-	-	☉	5
N 2.3	Sk Sc	10	-	-	☉	6
N 1.8	Sk Sc	10	-	-	☉	7
N 1.0	Sk Sc	9	-	-	☉	8
- 0.4	K S	1	-	-	○	9
- 0.4	K	1	-	0.70	○	10
S 2.5	K	2	-	1.00	○	11
NNE 1.2	K	3	-	1.00	⊕	12
NNE 4.7	K	6	-	1.00	⊕	13
NNE 3.0	K	1	-	0.90	○	14
NE 6.1	K	1	-	0.75	○	15
N 7.7	Sc	0	-	1.00	○	16
N 2.3	Sc	1	-	1.00	○	17
N 4.2	Sc	1	-	0.30	○	18
NNE 4.7	Sc	2	-	-	○	19
NNE 7.2	Sc	0	-	-	○	20
NNE 5.9	Sc	0	-		○	21
NE 2.6	Sc	0	-		○	22
NNE 0.6	Sc Kc	2	-		○	23
NNE 3.9	Sc Kc	2	-		○	24

39

一九二四年一〇月二日 『ローマンス』(断片) 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

[記事の考察] 盛岡 月の暈 0・05。

断片稿であり、下書稿に「Fantasia」ともあるように、幻想的作品なので、現実の風景を、どこまで背景に生かすつもりがあったか疑問もないではない。

作品中で天象に係わる表現は、「月のあかりの朧から」と「最後にひとつの積乱雲が／ひどくちぢれて砕けてしまふ」という二つがある。

月は旧暦九月一四日、月齢一三・三の月。夜は快晴だったから、月明りから水銀をイメージすることは、難しくない。また、最後に残っていた積乱雲も消えたというのであれば、積乱雲と高積雲との見分けは、さして問題ではないように思われる。

こうした事実を見ると、作品中のドラマは「Fantasia」として構想されていて、舞台背景には意外に現実が投影されているのかもしれない。

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
N 1.9	N	10	0.3	6.7	2
N 4.7	N	10	2.3	5.7	6
N 8.3	S	10	0.4	5.3	10
N 5.8	Sc	10	0.3	8.2	14
N 2.4	S	10	0.0	7.3	18
- 0.4	Sk	8	0.1	5.6	22

『春と修羅』第一集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕
 凍雨と題名にあるが、この日凍雨が降った記録はない。気温がほとんど上がらなかった(盛岡で最低気温二・四度、最高気温七・〇度。水沢で最低気温四・五度、最高気温八・四度)この日の雨の冷たさを比喩的に凍雨とよんだのであろう。
 下書稿(二)に「つめたい雨も木の葉もふり／みんなはけらを着て急ぐ」とか「雨やおぼろな雲にあらはれながら」と描かれた情景は、小雨が降り層雲や層積雲につつまれた夕方の農村を写したものと考えてよいであろう。
 作品の場所は、花巻の西の郊外、上根子のあたりである。上根子堰の水が描かれているので、詩人の視点が比較的高い位置にあると考えれば、花巻と大沢温泉を結ぶ電車から見た情景であろう。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NNE 2.0	N	10	0.5		●	1
NNE 2.5	N	10	0.4		●	2
NNE 2.3	N	10	0.9		●	3
NNE 4.2	N	10	0.4		●	4
NNE 4.8	N	10	1.6	-	●	5
NE 7.1	N	10	2.2	-	●	6
NE 7.6	N	10	2.0	-	●	7
NE 8.3	N	10	2.7	-	●	8
NNE 8.8	N	10	1.2	-	●	9
N 8.0	N	10	0.9	-	●	10
NNE 5.2	S N	10	0.0	-	◎	11
N 7.8	Sk S	10	-	-	◎	12
NE 5.4	S Sk	10	-	-	◎	13
NE 5.4	S Sk	10	-	-	◎	14
NE 7.7	S Sc	9	-	-	◎	15
N 9.9	Sk S	10	0.0	0.20	◎	16
NNE 5.4	Sk S	10	-	0.30	◎	17
NNE 4.3	N	10	0.0	-	●	18
NE 1.5	S	3	0.0	-	①	19
NNE 2.6	S Sk	9	-	-	◎	20
NW 1.2	Sk S	3	-		①	21
NNE 0.8	Sk S	10	-		◎	22
- 0.2	Sk S	9	-		◎	23
NNE 2.0	Sk S	3	-		①	24

一九二四年一〇月二四日 『凍雨』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
NE 1.1	-	0	-	-1.1	2
NE 1.1	-	0	-	-2.4	6
NNE 0.8	Sk	0	-	5.5	10
SE 1.1	Sk K	2	-	14.0	14
S 2.5	Sk	0	-	6.8	18
- 0.3	-	0	-	1.9	22

〔記事と考察〕盛岡 結氷 am. 霜。
この日は、「日脚がぼうとひろがれば」の改稿形「ふたりおなじさういふ奇体な扮装で」の創作日付の日でもある。

一日中快晴で、ほとんど風もなく穏やかな秋日和の日であった。水沢で層雲が観測され、盛岡で層雲（この場合は棚雲か）と積雲が観測されていることを考慮して作品を見ると、「ふたりおなじさういふ奇体な扮装で」の陽炎はもちろん、「野馬がかってにこさへたみちと」の下書稿（一）とされている『母に云ふ』の「岩手山の雲をかぶったまばゆい雪」「南の雲の縮れた白い火」といった表現も、データと符合する。「野馬がかってにこさえたみちと」の下書稿（二）『遠足許可』と「うとうとするとひやりとくる」とはいずれも想像されたピクニックという性格をもつ作品である。この点からすれば、この日、詩人は花巻において、想像上のピクニックをモチーフに創作していたのかもしれない。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
WNW 0.6	Sk	1	-		○	1
NW 1.2	Sk	1	-		○	2
NNW 1.0	Sk	2	-		○	3
NE 0.9	-	0	-		○	4
NE 0.8	-	0	-	-	○	5
N 2.4	-	0	-	-	○	6
NW 1.5	-	0	-	-	○	7
- 0.2	-	0	-	0.70	○	8
- 0.3	S	0	-	1.00	○	9
NW 0.8	S	0	-	1.00	○	10
SW 1.9	S	1	-	1.00	○	11
SSW 2.0	K S	2	-	1.00	○	12
SW 1.8	K S	8	-	1.00	◎	13
SW 3.1	K S	8	-	0.90	◎	14
SW 2.3	K S	4	-	0.75	①	15
S 2.6	S	1	-	0.65	○	16
SSW 2.3	S	4	-	0.60	①	17
SE 2.9	S	1	-	-	○	18
SE 3.8	S	0	-	-	○	19
SE 2.7	-	0	-	-	○	20
SE 2.8	-	0	-		○	21
SE 3.7	-	0	-		○	22
SE 2.1	S	1	-		○	23
SE 2.5	S	1	-		○	24

41

一九二四年一〇月二六日 「野馬がかってにこさえたみちと」 「うとうとするとひやりとくる」 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
N 7.9	Sk N	10	0.3	10.1	2
N 6.6	Sk N	10	-	8.4	6
W 10.0	Sk S	10	-	9.7	10
NNW 5.3	N	10	0.2	5.3	14
N 6.6	N	10	5.3	0.7	18
- 0.0	N	10	7.7	0.1	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

雪。〔記事と考察〕盛岡 氷あられ15・08。初雪15・00―最深積雪10・6cm。水沢 降雪16・45―積雪。次第に気温が下がり、雨から雪に変わったわけだが、昼前には雨が降りながら日もさしているといった天気だった。

下書稿(一)『龍』の「穹窿そらいっばいの龍どもが／おもひだしては唾を吐き／その唾凍り／(中略)／西は渦巻く雲の白髪の下に／山脈が紅く爛れて燃え／(中略)／……天頂にいま青ぞらの片があらはれ／東が白い光の棒で飾られる……／こんどは西の視野いちめん／まっしろな氷と霧の火があがる」という表現は、山に雪がかかる情景など、実景に基づくものであろう。

この作品も、激しく改稿されているものの一つで、作中の人物のイメージは大きく変化するのだが、背景の風景は基本的に受け継がれている。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NNE 1.8	S	10	0.0		☉	1
NNE 2.0	S	8	-		☉	2
NNW 0.8	S	10	-		☉	3
NNW 3.1	S	9	-		☉	4
- 0.2	S	9	-	-	☉	5
NW 1.5	N	10	0.0	-	●	6
WNW 3.3	N	10	0.0	-	●	7
SSE 0.8	Sk	9	-	-	☉	8
W 10.3	Sk	9	-	-	☉	9
WNW 11.3	N	10	0.0	0.40	●	10
W 7.0	N	10	0.0	0.45	●	11
N 4.8	N	10	0.2	-	●	12
WSW 1.0	N	10	0.2	-	●	13
NW 1.6	N	10	0.3	-	●	14
W 2.5	N	10	0.2	-	●	15
NNW 5.3	S Sk	10	0.1	-	☉	16
NNW 4.3	N	10	0.4	-	×	17
SE 2.6	N	10	0.3	-	×	18
SE 2.7	N	10	0.2	-	×	19
S 1.5	N	10	0.8	-	×	20
SSE 1.6	N	10	1.7		×	21
SSE 2.3	N	10	0.7		×	22
S 1.7	S	10	0.0		☉	23
W 0.8	N	8	0.0		×	24

一九二四年一〇月二十九日 『三三四 郊外』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.4	Sk	2	0.2	5.0	2
E 2.9	Kc Sk	2	-	6.4	6
NW 4.2	Sk	8	-	12.6	10
NNW 13.2	Sk S	8	-	10.7	14
N 7.7	Sk	3	-	7.8	18
N 3.3	-	0	-	4.8	22

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
E 0.8	S	5	-		①	1
WSW 1.0	S	7	-		①	2
N 2.6	Sk	5	-		①	3
SE 2.8	Sk	7	-		①	4
SE 2.4	Sk	8	-	-	◎	5
NNW 2.2	Sk Sc	8	-	-	◎	6
NW 1.3	Kc Sk	7	-	-	①	7
NNE 8.1	Sk Kc	4	-	0.30	①	8
N 8.2	Sk Kc	9	-	0.75	◎	9
N 9.2	Sk Kc	10	-	0.80	◎	10
NNE 9.5	Sk Kc	8	0.0	0.45	◎	11
NNE 5.3	Kc Ck Sk	9	-	0.85	◎	12
NE 13.6	N Sk	10	0.7	0.90	●	13
NNE 11.2	Kc S	3	0.1	0.10	①	14
NNE 12.3	Kc	3	-	0.85	①	15
NNE 8.5	Kc Sk	2	-	1.00	○	16
N 8.2	S	1	-	0.55	○	17
ENE 5.0	Kc	2	-	-	○	18
NE 6.7	Kc	3	-	-	○	19
NNE 5.3	S	2	-	-	○	20
NW 3.3	-	0	-		○	21
NE 4.9	-	0	-		○	22
NE 7.2	Sk	3	-		①	23
NW 4.0	Sk	3	-		①	24

一九二四年二月二日 『命令』 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 霧0・25 | 1・44、4・17 | 6・45。氷あられ12・45 | 12・59。
 作品の場所は、花巻の北の郊外。ほぼ『産業組合青年会』と同じ位置と考えられる。この時、
 花巻付近で陸軍による軍事演習が行われていた。⁽¹⁰⁾
 この日は昼前後に小雨が降り、夜は晴れたが、雲は比較的低い層雲や層積雲が出ている。
 生前発表形や下書稿に描かれた「あの黒い特立樹の尖端から／右方指二本の緑の星」や、深夜
 にも消えない浮華の灯ともいふべき「市街の／コロイダレな照明」は、周囲が暗かっただけに
 ほんやりと見えたはずである。当時の花巻の歓楽街は盛岡のそれを凌ぐものがあつたともいう。
 この日の月齢は四・八。月の入は二二時一〇分。月は沈んだ後であろう。

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
SE 1.0	S	10	-	6.9	2
SSW 9.7	Sk	10	0.0	10.1	6
WNW 11.7	Sk	2	-	12.6	10
NW 13.8	Sk S	9	-	10.9	14
N 6.8	Sk	9	0.3	8.4	18
NNW 6.7	Sk	10	-	8.2	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 虹 6・42―6・51、8・45―9・50。
 定稿の作品番号は三〇五。下書稿(一)「客を停める辞令」の作品番号は三三三。
 この番号の逆転の意味が疑問になるところだが、これについては、三〇四「落葉松の方陣は」
 の創作日付(一九二四・九・一七・)のころ、やはり層雲が発生していたことが確かめられる。
 これを虹を中心モチーフにする作品とみれば、この頃最初のメモがつけられた可能性もある。
 「北上川は焚気を流し」でも、作品番号は若い番号を引継ぎ、創作日付は新しい素材を得た日
 の日付に改められていた。
 付記すれば、この年盛岡では、九月の二二日、二三日に虹を観測している。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSW 1.6	N	10	0.0		●	1
S 6.0	Sk S	10	0.1		◎	2
S 4.9	N	10	0.2		●	3
S 2.3	N	10	0.2		●	4
SSE 10.6	Sk	9	0.4	-	◎	5
SSW 5.0	N Sk	10	0.7	-	●	6
NW 8.1	Sk	4	0.1	-	⊕	7
WNW 16.5	Sk	2	-	-	○	8
WNW 19.3	Sk S	2	-	0.80	○	9
W 21.3	Sk S	1	0.0	1.00	○	10
W 19.9	Sk S	2	-	1.00	○	11
WNW 18.6	Sk S	2	0.0	1.00	○	12
WNW 17.3	Sk S	2	-	1.00	○	13
WNW 10.8	Sk	3	-	1.00	⊕	14
WNW 9.4	Sk	4	0.0	1.00	⊕	15
SSW 4.8	Sk	7	-	1.00	⊕	16
WSW 5.7	Sk	9	-	0.60	◎	17
W 6.3	Sk	10	-	-	◎	18
NW 4.6	Sk	9	-	-	◎	19
N 5.9	Sk	8	-	-	◎	20
NW 2.8	Sk	6	-		⊕	21
S 2.8	Sk	3	-		⊕	22
SW 1.9	Sk	1	-		○	23
SSW 5.3	Sk	1	-		○	24

一九二四年二月五日

〔その洋傘だけでどうかなあ〕下書稿(一)『客を停める辞令』の創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
NNE 4.9	N	10	1.0	5.9	2
NW 3.3	Sc Sk	10	1.7	5.3	6
N 1.3	S Sk	10	0.7	6.6	10
N 11.1	N S	10	0.0	6.8	14
NW 15.6	Sk	10	1.3	8.4	18
NW 13.2	N	10	0.5	8.8	22

〔記事と考察〕盛岡 ひょう0・36―0・38。雷電0・34―0・42。霧5・46―7・19。
霧、層雲（霧雲）の発生と、風が強いことで五日と共通する。層雲の発生と昼前後の日照は、
虹がでやすい状況であったことを示している。
下書稿（一）に「あすこの虹の門をくぐって／（中略）／あとはもうあんなまつ赤な山と谷／……
こんまりと松のこもった岩の鐘……」とある。「岩の鐘」は、東北山脈の山を指すものに違いない
から、西側に虹を見るためには、午後遅い時刻であるはずはないが、この点でも層雲の発生時刻
が一致している。
下書稿（二）では「電信ばしらも林の稜も／つなみみたいに一度に鳴って」下書稿（二）では
「……学校中のガラスの窓が／みんないちどにがたがた鳴って／林はまるでつなみのやう……」
と描かれた風も、やはり実景に基づくものと見られる。
〔北上川は発気をながしイ〕の創作過程とよく似ているところが注目される。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NE 4.1	N	10	1.2		●	1
ENE 3.2	N Sk	10	1.8		●	2
W 2.7	Sk N	10	0.0		◎	3
NE 3.9	S	10	-		◎	4
W 2.4	S	10	-	-	◎	5
NE 3.3	S	10	-	-	◎	6
NE 3.3	S	10	-	-	◎	7
NNE 2.3	S N	10	-	-	◎	8
NNW 2.8	N S	10	0.0	-	●	9
WNW 8.6	Sk Sc	10	0.0	-	◎	10
NW 10.3	Sk Sc	10	-	0.25	◎	11
W 12.5	Sk S	10	-	-	◎	12
W 12.7	Sk	10	-	1.00	◎	13
W 11.0	Sk S	10	-	0.05	◎	14
NW 6.5	N Sk	10	0.0	-	●	15
NW 5.8	N Sk	10	0.0	-	●	16
WNW 5.2	N Sk	10	0.0	-	●	17
S 1.2	Sk S	10	0.0	-	◎	18
NW 9.5	Sk	10	-	-	◎	19
NW 5.5	Sk	4	-	-	①	20
NE 3.3	N Sk	9	0.0		●	21
N 1.9	Sk	8	0.0		◎	22
SSW 2.9	Sk	8	0.0		◎	23
WNW 4.9	Sk	8	0.0		◎	24

一九二四年二月一日 「その洋傘^{かさ}だけでどうかなあ」 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
NW 10.1	S	1	-	3.6	2
SSW 1.0	Sk	10	-	1.7	6
N 7.6	S Sk	8	-	6.1	10
N 7.2	Sk S	3	-	5.9	14
N 5.3	Sk	3	-	3.5	18
N 1.1	Sk	1	-	0.9	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

この日の前日、盛岡では雪が降り、夜最大風速21・1メートルの強い風が記録されている。水沢でも16・3メートルの記録がある。風がおさまって晴れてきたのは、この日の午後五時頃であった。

ようやく風が静まった頃、詩人が風童と語り、「向ふのあの／ほんやりとした葡萄いろの空」の彼方に住むものに、伝言を依頼するというのは、内容がファンタジックでありながら、背景の情景は現実取材している。

作品の舞台は花巻駅付近と考えられる。⁽¹¹⁾

〔記事と考察〕

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
W 11.8	S	3	-		⊙	1
WNW 11.8	S	3	-		⊙	2
NW 9.3	Sk S	2	-		○	3
WNW 3.8	Sk S	4	-		⊙	4
SW 2.5	Sk S	3	-	-	⊙	5
WSW 5.3	Sk S	10	-	-	⊙	6
WSW 3.6	Sk	6	-	-	⊙	7
S 3.3	Sk	6	-	-	⊙	8
SSE 2.9	Sk	8	-	0.50	⊙	9
WSW 7.3	Sk	5	-	1.00	⊙	10
SSW 6.3	Sk	8	-	0.90	⊙	11
WSW 6.5	Sk	9	-	1.00	⊙	12
W 5.2	Sk	7	-	0.32	⊙	13
W 5.3	Sk	6	-	0.60	⊙	14
WSW 3.3	S Sk	10	-	1.00	⊙	15
WSW 5.2	Sc S Sk	10	-	0.15	⊙	16
W 4.0	Sk	1	-	-	○	17
SSE 3.3	Sk	2	-	-	○	18
SE 3.5	Sk	1	-	-	○	19
SE 3.3	Sk	1	-	-	○	20
SE 2.8	Sk	0	-		○	21
SE 1.3	Sk	0	-		○	22
ESE 1.2	Sk	0	-		○	23
ESE 0.5	Sk	0	-		○	24

一九二四年二月三日

『孤独と風童』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.1	Sk	0	-	-10.2	2
NW 0.9	Sk	10	-	-11.0	6
NW 2.0	N	10	0.1	-6.0	10
W 1.5	Sk	0	0.4	-1.6	14
SE 1.7	Sk	6	-	-4.8	18
NNE 2.7	Sk	4	-	-2.4	22

〔記事と考察〕水沢 霜 雪 8・57―10・55。
盛岡では、前年一二月以降、連日結氷が観測されている。
作品の場面は、下書稿(一)に「……アカシヤの木の黒い列……」とあり、その手入れ形に「グ
ラウンドの雪いちめん」とある点に注目すれば、旅立ちの前の花巻農学校付近が推定される。
東北線下りの最終列車は花巻駅九時五九分発である。「みんなに義理を欠いてまで旅に出るといっ
ても」とあるように旅立ちの第一歩の印象である。
この年は新年に入ってから、連日積雪結氷が記録されているから、「夜の雪花石膏板」はあつ
たはずであるし、雪は多少の風にも舞ったと思われる。
この日の月は旧暦一二月一日、月齢一〇・〇の月である。「月の惑み」とはその欠け方をいつ
たものであろうし、層雲や層積雲を通しての月明りを持った空を「底びかりする水晶天」と捉え
るのも、現実を踏まえてのことである。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SE 2.9	Sk	6	-		①	1
SSE 1.9	Sk	4	-		①	2
SE 0.8	Sk S	4	-		①	3
SE 3.0	S	2	0.0		○	4
S 0.7	S	3	0.0	-	①	5
SSE 1.1	S	10	-	-	◎	6
- 0.3	N S	10	0.0	-	✕	7
NW 0.6	N S	10	0.2	-	✕	8
NW 0.5	N S	10	0.4	-	✕	9
- 0.4	N S	10	0.5	-	✕	10
NW 0.9	Kc S	6	0.0	-	①	11
NW 0.5	Kc S	3	-	0.80	①	12
W 1.1	Kc Sk S	3	-	1.00	①	13
SW 1.6	Sk S	6	-	1.00	①	14
S 1.6	Sk S	9	-	1.00	◎	15
S 2.2	Sk	10	0.0	0.55	◎	16
S 1.8	Sk	9	-	0.10	◎	17
SSE 2.3	Sk	10	-	-	◎	18
SSE 1.7	S	10	-	-	◎	19
W 1.1	S Sk	10	-	-	◎	20
WSW 1.9	S Sk	10	-		◎	21
E 1.3	S Sk	10	-		◎	22
SE 1.9	Sk	9	-		◎	23
WSW 1.2	Sk	10	-		◎	24

一九二五年一月五日 『異途への出発』 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 宮古気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
W 2.2	Sk	1	-	-5.1	2
W 0.7	Sk	1	-	-5.3	6
NW 3.7	Sk	1	-	0.0	10
W 2.5	Sk	0	-	3.2	14
W 1.3	Sk	0	-	-2.3	18
W 3.9	-	0	-	-6.6	22

『春と修羅』第一集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕宮古気象台の気温データは、摂氏〇度を一〇〇として記録されているので、筆者が換算した。以下同じ。

作品の場所は、種市町付近の海岸と想定される。盛岡から外山を通るコースは、安家の海岸まで車のメーターで一七キロ。沼宮内から久慈の海岸に出るには八一キロある。いかに健脚の賢治といっても、ともに一晩で歩ける距離でない。最終列車で花巻を発ち、尻内に二時三十分に着き、以後三陸海岸への道を歩けば、約三〇キロで角浜付近の海岸に出る。列車の乗り継ぎなど、他に可能な方法もないようである。これなら文語詩ノートのメモとも矛盾はない。

この日三陸地方は、一日中快晴であった。「薔薇輝石や雪のエッセンスを集めて／その清麗なファイア風の惑星」もみえた朝であったろう。

五日には宮古で降雪、積雪が記録されている。「雪をかぶったはびびやくしんと／百の岬」も、おそらく実際にあったものに基づく表現であろう。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NNW 0.5	Sk	10	-		☉	1
E 2.2	Sk	9	-		☉	2
WSW 1.5	Sk	2	-		○	3
N 0.5	Sk	9	-		☉	4
NNE 1.1	Sk	2	-	-	○	5
W 0.8	Sk	5	-	-	①	6
SW 3.9	Sk	2	-	-	○	7
SE 1.9	Sk	4	-	-	①	8
NE 1.0	Sk S	7	-	-	①	9
NNE 2.9	Sk S	8	-	0.20	☉	10
NNW 3.0	Sk	3	-	0.25	①	11
WNW 4.0	Sk	1	-	0.90	○	12
W 4.5	Sk	0	-	1.00	○	13
WSW 4.5	Sk	1	-	1.00	○	14
WSW 3.0	Sk	3	-	1.00	①	15
W 2.8	Sk	6	-	0.65	①	16
NNW 0.9	Sk	10	-	-	☉	17
NNE 0.6	Sk S	10	-	-	☉	18
NE 0.8	S	7	-	-	①	19
NE 2.0	S	8	-	-	☉	20
NNE 1.2	S	2	-	-	○	21
NE 1.3	S	0	-	-	○	22
ESE 3.0	Sc	3	-	-	①	23
ESE 3.1	Sk S	10	-	-	☉	24

一九二五年一月六日 『曉穹への嫉妬』創作日付の日

a 盛岡気象台データ

風向風力	雲形	雲量	降水量	日照時数	天候	時刻
NNE 0.9	Sk Ck	3	-		①	1
SSE 0.5	Sk S	10	-		◎	2
N 1.5	Sk S	10	0.0		◎	3
- 0.4	S	10	-		◎	4
SSE 0.5	N	10	0.0	-	×	5
- 0.3	S	10	0.0	-	◎	6
SE 1.2	N	10	0.0	-	×	7
NNW 0.6	N S	10	0.0	-	◎	8
- 0.4	N S	10	0.0	-	×	9
SSE 1.3	N S	10	0.0	-	×	10
SSE 2.9	N	10	0.0	-	×	11
SSE 3.7	N	10	0.1	-	×	12
SW 1.8	N	7	0.0	0.30	×	13
S 1.6	N	10	0.1	0.50	×	14
WSW 1.9	N	10	0.0	0.50	×	15
SE 1.9	Sk	9	0.0	0.20	◎	16
SW 1.6	Sk	2	-	-	○	17
S 1.3	Sk	7	-	-	①	18
SSE 1.9	Sk	10	-	-	◎	19
- 0.4	Sk S	1	-	-	○	20
SW 0.5	Sk	8	-		◎	21
SW 1.0	Kc Sk	7	-		①	22
SSW 1.1	Sk	10	-		◎	23
- 0.4	Sk S	10	-		◎	24

b 宮古気象台データ

風向風力	雲形	雲量	降水量	気温	時刻
W 1.6	Sk	1	-	-6.4	2
W 3.3	Sk	10	-	-5.9	6
W 1.8	S Sk	10	-	0.5	10
WSW 5.5	Sk	4	-	6.5	14
SW 2.1	Sk	5	-	0.2	18
W 3.0	-	0	-	-4.3	22

〔記事と考察〕盛岡 氷あられ?・40―2・45。

小雪が降り続いた内陸部とは違って、太平洋側では、特に夕方晴れていた。

文語詩篇ノートに「九戸郡行／安家の宿」とあることを考慮すれば、堀尾氏も指摘する通り、九戸郡下安家の唯一の釣宿だったという小野旅館に宿を取ったのであろうか。

大田名部港か羅賀港あたりから便船を得てこの日の夜宮古に着いたのであろう。創作日付を欠く『春と修羅』詩稿補遺の『発動機船 三』をこの日、宮古港に寄港する時の作品と考えれば、旅程に矛盾はない。

宮古港に近い浄土ガ浜は珪素に富む石英粗面岩で出来ていると観光案内の説明書にある。断定するつもりは毛頭ないが、詩人の足跡を尋ねてあるいた筆者には消された作品の消え残った文字から連想するのは、夕日に浮き上がる浄土ガ浜の景色である。いずれにしても、「水平線と夕陽を浴びた雲」は、この日も見えたはずである。

b 宮古气象台データ

時刻	気温	降水量	雲量	雲形	風向風力
2	-7.4	-	1	Sk	W 3.4
6	-6.6	-	4	Sk	W 3.8
10	1.5	-	1	Sk	S 1.2
14	6.9	-	1	Sk	W 4.7
18	-1.3	-	0	Sk	W 2.1
22	-4.2	-	1	Sk	W 4.0

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕宮古の雲向及速度は、下層雲2、6、10、14の各観測時ともW7。三陸側は晴れていた。『発動機船』に描かれた「アンデルゼンの月夜の海」を見ている点に注目すれば、堀尾氏の指摘する夜〇時宮古港発の三陸汽船に乗り、大槌港付近で上陸した可能性が強い。月齢は一三・〇で、月の入は五時五二分。

盛岡や水沢の記録と合わせてみると、内陸部は曇って雪も降っている。宮古の雲速記録も低層雲に限られているから、山ぞいの空は曇って雪を含んでいたであろうか。海上の広い空は晴れていても、山は雲が被っていたことが考えられる。こう考えた場合には、下書稿(一)の「雪雲はめぐり」やその手入形の「川上は雪」といった表現も「幾重に走せる黒雲のなかなので／また立ち戻るすべもない」といった表現にも現実感がある。西風の季節である。気温も上がらず、寒い一日であった。下書稿(二)手入形で「いまこの荒れた河原の砂の、うす陽のなかにまどろめば、／わたくしの肩またせなのうら寒く」とあるのも自然である。

a 盛岡气象台データ

時刻	天候	日照時数	降水量	雲量	雲形	風向風力
1	◎		-	10	Sk S	- 0.3
2	◎		-	10	Sk S	- 0.4
3	◎		-	10	Sk S	SSW 1.0
4	◎		-	10	Sk S	SSW 0.8
5	×	-	0.0	9	N S	- 0.3
6	◎	-	0.0	9	S Sk	SW 0.6
7	◎	-	-	10	S	SW 0.6
8	◎	-	-	10	S Sk	SW 1.2
9	◎	-	0.0	10	N Sk	SW 1.2
10	◎	0.15	0.0	9	S Sk	WSW 0.7
11	⊕	0.70	-	7	Sk Kc S	SSE 1.4
12	◎	0.50	-	10	Sk S	WSW 0.6
13	⊕	0.35	-	5	Sk	S 1.7
14	⊕	0.60	-	4	Sk	WSW 4.8
15	⊕	0.65	-	3	Sk	W 5.7
16	○	0.95	-	2	Sk	WSW 4.2
17	⊕	0.10	-	3	Sk	SW 2.9
18	◎	-	-	8	Sk	SW 2.1
19	○	-	-	2	Sk Sc	NNE 1.5
20	⊕	-	-	4	Sk Sc	E 1.2
21	◎		-	10	Kc Sc	S 1.3
22	◎		-	10	Sc Kc	W 2.2
23	◎		-	10	Sc Kc	NNE 0.5
24	◎		-	10	Sc Kc	SSE 1.6

一九二五年一月八日 『発動機船 断片』 『旅程幻想』 創作日付の日

b 宮古气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
W 2.2	Sk	1	-	-4.9	2
W 3.2	Sk	0	-	-7.3	6
W 1.2	-	0	-	1.2	10
NE 3.4	C Cs	2	-	3.2	14
W 3.1	Cs Sc	8	-	-2.0	18
W 3.9	Cs	10	-	-4.1	22

〔記事と考察〕盛岡 霧 6・18―9・42。日の量 15・22―16・08。月の量 17・54。この日は昼過ぎまで快晴だった。仙人峠は現在も山中に縦坑跡が残る鉄の鉞山。晴れた日に頂にてば、左右の山の間から釜石湾が小さく望まれる。

前夜釜石の叔父の家に泊まった詩人は、この日、前日降った雪の仙人峠を越え、遠野側の仙人峠から軽便鉄道で花巻に帰ったと推定される。

雪道を踏んで頂に立てば、あんまり光つて山がまはりをうねるので／ここらはまるで焦点のやう／蒼穹ばかりいよいよ暗く陥ち込んでゐる、／寒冷なトランペットがせはしく西から襲ってくる／白樺はみなねぢれた枝を海のラルゴのはうへ伸ばし／(中略)／雪や露岩のけはしい二色の起伏の向ふの方で／海はなまめかしくけむつてゐる／セピヤ岬のこっちは／一つ釜石湾の華奢なエメラルドも飾られる」とは、実景さながらである。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NNE 1.2	Kc Sk	8	-		☉	1
NNE 1.9	Kc Sk	6	-		①	2
NE 0.7	Sk	1	-		○	3
ESE 1.2	Sk	2	-		○	4
NW 1.7	Sk	2	-	-	○	5
NNE 2.0	Sk S	4	-	-	①	6
N 1.6	Sk S	1	-	-	○	7
N 0.5	Sk S	0	-	-	○	8
NW 0.6	Sk S	0	-	1.00	○	9
S 2.4	Sk S	0	-	1.00	○	10
SSE 1.0	S	0	-	1.00	○	11
S 1.6	S	1	-	1.00	○	12
S 0.9	C Cs S	2	-	1.00	○	13
SSW 0.6	C Sc	3	-	1.00	①	14
S 0.8	C Cs	4	-	1.00	①	15
- 0.2	Cs Sc	8	-	0.80	☉	16
SE 1.0	Cs Sk	8	-	-	☉	17
ESE 2.1	Cs Sk	9	-	-	☉	18
SE 2.4	Cs Sc	8	-	-	☉	19
ESE 0.6	Cs	9	-	-	☉	20
NE 0.9	Cs	10	-	-	☉	21
NNE 1.7	Cs	10	-	-	☉	22
N 0.5	Cs	10	-	-	☉	23
- 0.1	Cs	10	-	-	☉	24

一九二五年一月九日 『峠』創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.2	Sk	2	-	-12.7	2
NW 8.1	S Sk	0	-	-2.9	6
NNW 10.3	Sk Kc	3	-	0.0	10
NNW 8.1	Sk	5	-	-0.5	14
NNW 5.1	Sk	2	-	-2.0	18
NNW 5.2	Sk	1	-	-2.5	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

〔記事と考察〕盛岡 氷あられ 6・25—6・50。
 この日は、一〇時ごろから午後一時ごろまで層雲（霧雲）と雨雲が出ています。ちょうどその頃、少し風も出ている。日が照っているながら雪が降るといふ、寒い日であった。
 下書稿（一）に、「職員諸兄 学校がもうサマルカンドに移ってますぞ／（中略）／そこらはいちめん氷凍された砂けむりです／（中略）／さっきわれわれが教室から帰りましたときは／そこらは賑やかな空気の祭といふふうに／ねむや鵝（数字不明）降ってるました／それがいま（以下不明）／（一行不明）／ぎらぎらひかかって澱んだのです」と描いた情景は、この日の気象状況と、符合するところが多い。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NE 1.2	Sk	7	-		⊙	1
NE 1.4	Sk	7	-		⊙	2
N 2.2	Sk S	9	-		⊙	3
SSW 1.2	Sk S	10	-		⊙	4
N 1.3	Sk S	10	-	-	⊙	5
- 0.4	Sk S	10	-	-	⊙	6
ESE 1.5	Sk Kc	9	0.0	-	⊙	7
WNW 1.5	Sk Kc	8	-	-	⊙	8
NNW 1.2	Sk S	10	-	0.45	⊙	9
WSW 6.6	N S	10	-	0.60	×	10
W 4.9	N S	10	0.0	0.45	×	11
WSW 7.4	Sk S	9	0.0	0.70	⊙	12
W 6.8	N S	10	0.0	1.00	×	13
W 6.6	Sc Sk S	8	0.0	0.70	⊙	14
NW 4.9	Sk S	7	0.0	0.85	⊙	15
WNW 3.7	Sk S	8	-	0.85	⊙	16
W 3.0	Sk S	9	-	-	⊙	17
W 3.0	Sk	5	-	-	⊙	18
W 1.9	Sk	2	-	-	○	19
NNW 1.5	Sk	1	-	-	○	20
SSE 0.6	Sk	1	-		○	21
SE 1.8	Sk	1	-		○	22
SE 4.5	-	0	-		○	23
ESE 2.7	-	0	-		○	24

一九二五年一月二八日 『氷質の冗談』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
N 5.5	S	7	-	-4.5	2
N 4.6	S	10	-	-4.0	6
N 4.4	N	10	0.1	-2.6	10
N 4.1	N	10	0.0	-2.1	14
N 5.1	N	10	0.1	-1.8	18
SSW 1.0	N	10	0.0	-2.3	22

〔記事と考察〕盛岡 結氷 am・pm。雪 11・35 | 11・53、12・04 | 12・35。

『森林軌道』の作品の場面は、岩手山北麓の森林伐採のため大更から上坊造林地へ敷設されていたトロッコの軌道付近。「寅吉山の北のなだらで」も岩手山麓の焼け走り溶岩流を虎形と呼ぶから、これからの連想で、岩手山を「寅吉山」と呼んだとすれば、ここに当たる。この日、盛岡では朝から層雲が観測され、正午前後に降雪の記録があり、午後は曇っているが日照もある。

『森林軌道』の下書稿(一)の「相もかはらず上は凍った乱雲と／まばゆくかすむ日輪盤」といった表現は、霧雲を透かしてみる午前中の太陽であろう。下書稿(三)に「南の暗い雪雲を／盛岡の市は沈んで見えず」とあるのも、「寅吉山の北のなだらで」の表現も、データと矛盾しない。

「今日もまたしやうがないな」の場面は花巻農学校であるが、午後層雲が発生した様子は、盛岡のデータと一致する。詩人は層雲を霧と捉えたのであろう。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NW 4.1	S Sk	7	-		①	1
NNE 2.6	S	3	-		①	2
NNE 2.6	S	4	-		①	3
NW 4.8	S	5	-		①	4
NW 11.0	S	5	-	-	①	5
N 6.8	S	6	-	-	①	6
N 5.0	S	7	-	-	①	7
NNE 2.6	Sk S	9	-	-	◎	8
NNW 2.2	Sk S	9	-	0.45	◎	9
NW 6.2	Sk S	8	-	1.00	◎	10
NNW 4.0	Sk S	9	-	1.00	◎	11
NW 5.4	Sk S	9	0.0	0.80	◎	12
WNW 7.8	Sk S	8	0.0	0.30	◎	13
WNW 7.4	S Sk	9	-	0.70	◎	14
WNW 4.6	S Sk	10	-	0.05	◎	15
NW 5.7	S Sk	9	-	0.25	◎	16
W 5.3	S Sk	10	-	-	◎	17
W 4.5	S Sk	8	-	-	◎	18
SW 2.8	Sk	9	-	-	◎	19
W 2.7	Sk	10	-	-	◎	20
NW 3.9	Sk	9	-	-	◎	21
N 1.9	Sk S	9	-	-	◎	22
N 1.6	Sk S	8	-	-	◎	23
S 2.2	Sk S	10	-	-	◎	24

53

一九二五年一月二十五日 『森林軌道』「寅吉山の北のなだらで」 「今日もまたしやうがないな」 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.4	Sk	8	-	-5.3	2
NW 0.8	Sk	1	-	-9.2	6
- 0.1	Sc Sk	10	-	-4.0	10
N 0.8	Kc Sk	10	-	2.1	14
- 0.3	Cs Sk	4	-	-0.5	18
E 0.7	Sc	10	-	-1.5	22

『春と修羅』第一集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 霧6・34―8・48。日の量10・57―12・11。氷あられ17・03―17・05。月の量23・28―。水沢 月光冠18―。

作品中に「八時の電車がきれいなあかりをいつばいのせて」とあるので、午後八時の気象状況を見ると、層雲と層積雲が出ていて曇り。南東の風は穏やかである。この日の月は、旧暦一月一三日の月。層雲や半透明の雲を通して見えたのであろう。月齢は一一・五。月の出は一三時五〇分。中天にあつたはずである。

作品を生前発表形式で見ると、「……山地はしづかに収斂し／凍えてくらしい月のあかりや雲……／(中略)／蒼ざめた冬の層積雲が／ひがしへひがしへ畳んで行く／(中略)／世紀末風のぼんやり青い水霧だの」といった表現のうち、問題があるのは風の方向だが、雲の動きと地上の穏やかな風は、方向が何時でも一致するわけではない。この日水沢での雲の観測では、西の風とある。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
S 0.9	Sk Sc	8	-		☉	1
NE 0.8	Sk	6	-		①	2
NW 1.1	Sk	5	-		①	3
W 0.6	Sk	7	-		①	4
NE 0.9	Sk	7	-	-	①	5
- 0.4	Sk S	10	-	-	☉	6
N 1.2	Sk S	9	-	-	☉	7
- 0.4	Sc Sk	9	-	-	☉	8
S 1.0	Sc Sk	10	-	0.65	☉	9
SSW 1.5	Sc Sk	10	-	1.00	☉	10
S 5.4	Cs Sc	9	-	1.00	☉	11
S 4.2	Cs Sk	8	-	1.00	☉	12
S 4.2	Sc Sk	9	-	1.00	☉	13
SSW 3.3	Sc Sk	10	-	0.70	☉	14
SSE 2.5	Kc Sk	8	-	0.75	☉	15
SSW 2.3	Sk S	10	-	0.70	☉	16
SW 1.1	Sc Sk	10	-	-	☉	17
SE 0.6	Kc Sk	8	0.0	-	☉	18
SSE 2.0	Kc Sk	10	-	-	☉	19
SE 1.9	Sk S	10	-	-	☉	20
SE 1.3	Kc Sk	9	-		☉	21
- 0.2	Kc Sk	9	-		☉	22
NNE 2.3	Kc	4	-		①	23
N 1.8	Cs Kc	10	-		☉	24

一九二五年二月五日 『冬』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.2	Sk	7	-	-8.1	2
S 2.0	Sk Kc	7	-	-7.4	6
S 5.3	N	10	0.0	-0.2	10
S 4.6	N	10	0.2	1.2	14
NW 8.1	S Sk	4	0.5	0.7	18
NW 8.2	Sk	1	0.0	-1.9	22

〔記事と考察〕水沢 霜 降雪 9・47：18・20―積雪。
 水沢の最低気温はマイナス〇・一度。雪が断続的に降る寒い日であった。
 この作品の場合、「そんなおかしな反感だかなんだか／真鍮いろの皿みたいなものを／風のなか
 からちぎって投げてよこしても」とあるので、風があつた時刻であるらしい事はわかるが、「まち
 のうへのつめたいそらに／くろいけむりがながれるながれる」とあるのが曇った日を想像させる
 程度で、作品の表現とデータに矛盾もないが、気象状況を反映した表現も少ない。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSW 0.8	Sk	10	0.0		☉	1
WSW 1.6	Sk	10	0.0		☉	2
SW 1.9	Sk	10	-		☉	3
W 1.1	Sk	10	-		☉	4
S 1.6	Sk	9	0.0	-	☉	5
SW 1.3	N	10	0.0	-	✕	6
S 2.6	N	10	0.3	-	✕	7
SSW 1.6	N	10	0.5	-	✕	8
S 4.2	N	10	0.1	-	✕	9
S 4.2	N	10	0.1	-	✕	10
S 3.4	N	10	0.2	-	✕	11
S 3.5	Sk	9	0.0	-	☉	12
S 6.3	N	10	0.0	0.70	✕	13
S 6.7	N	10	0.1	-	✕	14
S 3.4	N	10	0.6	-	✕	15
SSE 2.6	S Sk	10	0.0	-	☉	16
WNW 1.8	Sc S Sk	10	-	0.20	☉	17
WNW 1.2	Sc S	10	-	-	☉	18
NE 1.9	Sk S	6	-	-	⊙	19
NE 1.9	Sk	3	-	-	⊙	20
S 2.1	Sk	6	-		⊙	21
SE 1.3	Sk S	8	-		☉	22
N 2.4	Sk S	10	-		☉	23
WNW 3.6	N S	10	0.0		✕	24

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
NE 4.8	Sk	8	-	-1.8	2
ENE 1.4	Sk	2	-	-3.0	6
WNW 3.5	Sk	2	-	-0.2	10
WNW 9.6	Sk	2	-	0.3	14
NW 9.9	Sk	1	-	-0.7	18
N 5.3	Sk	9	-	-2.2	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

雪はひどいし」は、生活感覚をよく反映した表現であろう。

*『暮れちかい 吹雪の底の店さきに』と『奏鳴的説明』はいずれも吹雪きを扱っているが、「吹雪はひどいし」は、生活感覚をよく反映した表現であろう。

出ていることが注目される。

略)／しろく濼んだ雪ぞらと」は、層雲のある空を考えさせる。『未来圏からの影』に「吹雪はひどいし」は、生活感覚をよく反映した表現であろう。

【記事と考察】盛岡 降雪15・07―15・49。
この日は、日照もあるのにほとんど気温が上がっていない。

この日、早朝、盛岡で層雲が観測されている。風も、南の水沢の方が強かったらしい。午後六時には9・9メートルを記録して、水沢での二月中の最大風速。一月中もこれ以上の風は三日しかない。気温も上がっていないから、雪が風に吹き上げられることも多かったであろう。層雲が出ていることが注目される。

『車中』の「風が水より稠(誤字を校訂)密で 水ど氷は互に遷る／稻沼原の二月ころ／(中略)／しろく濼んだ雪ぞらと」は、層雲のある空を考えさせる。『未来圏からの影』に「吹雪はひどいし」は、生活感覚をよく反映した表現であろう。

どいし／けふもすさまじい落盤だ」とあるのは、積雪と吹き上げられる吹雪をいうのであろう。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
WSW 2.3	S	9	0.0		☉	1
W 3.2	S Sk	7	-		①	2
NW 2.1	Sk S	8	-		☉	3
NNW 1.4	Sk S	4	-		①	4
SE 1.8	Sk S	2	-	-	○	5
SW 1.8	Sk	2	-	-	○	6
W 1.9	Sk	1	-	-	○	7
NE 1.2	Sk	4	-	0.80	①	8
E 1.3	Sk	6	-	0.75	①	9
NW 6.0	Sk Sc	4	-	0.65	①	10
N 6.4	Sk Sc	5	-	1.00	①	11
WNW 6.5	Sk Sc	7	-	1.00	①	12
WNW 8.2	Sk S Sc	4	-	0.90	①	13
NW 6.9	Sk Sc S	4	-	1.00	①	14
NW 5.5	Sk S	9	-	1.00	☉	15
SSE 1.7	S Sk	8	0.1	0.50	☉	16
W 2.5	Sk Sc	8	-	0.75	☉	17
NW 6.0	Sk S	8	-	-	☉	18
SSE 2.4	Sk	6	-	-	①	19
NW 1.3	Sk	7	-	-	①	20
E 2.4	Sk	7	-	-	①	21
W 2.6	Sk	6	-	-	①	22
NW 7.4	Sk	3	-	-	①	23
WNW 7.5	Sk	6	-	-	①	24

一九二五年二月一五日 『車中』 『未来圏からの影』 『暮れちかい吹雪の底の店さきに』 『奏鳴的説明』 創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻	
-	0.1	Sc	10	-	2.5	2
-	0.2	Sc	10	-	3.5	6
-	0.2	S	10	0.0	5.8	10
S	4.3	Sk	9	-	14.5	14
S	4.4	Sk	10	-	12.5	18
S	3.5	S	10	-	9.2	22

この日盛岡は曇天で、午後二時三時頃には日がさす。夜は小雨が降っている。水沢では雨が午前中に上がり、午後は雲の多い天気であった。

「硫黄いろした天球を」の舞台である花巻駅付近の日没頃は、下書稿(二)の通り、「黄いろに澱む春の天球を／幾琉アヲの黒雲乱れてながれ／(中略)／陽は山脈の上のつめたい巻層雲に陥ち」ていた。データでは巻層雲より低い高層雲だが、「そのとき嫁いだ妹に云ふ」の舞台である達磨部川の鉄橋に列車がさしかかったころは、「青ぐらい峽の月光」も、ごく微かだったろう。月齢は八・五。「種山あたり雲の蛍光／雪か雲かの変質が その高原のしづかな頂部で行はれる」とあるように、詩人も淡い月光を受けた雲に雨を予感しているからである。

『発電所』「はつれて軋る手袋と」については次頁に述べる。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻	
S	2.0	Cs	5	-	①	1	
S	1.0	Cs	7	-	①	2	
S	0.5	Cs Sc	10	-	◎	3	
-	0.3	Sc	10	-	◎	4	
-	0.2	Sc S	10	-	◎	5	
-	0.4	Sc S	10	-	◎	6	
-	0.1	S	10	-	◎	7	
-	0.1	S	10	-	◎	8	
S	1.6	S	10	-	◎	9	
SE	2.2	N S	10	0.0	●	10	
SSE	0.9	S	10	0.0	◎	11	
S	1.0	S	10	-	◎	12	
S	1.3	Kc S	8	-	◎	13	
SSW	1.1	Sk Sc S	10	-	0.70	◎	14
NNE	0.6	Sk S	10	-	0.10	◎	15
N	0.6	Sk S	10	-	-	◎	16
E	1.1	Sk Sc S	10	-	-	◎	17
SW	1.5	Sk S	10	-	-	◎	18
SSE	1.5	S Sk	10	-	-	◎	19
S	5.4	N	10	0.0	-	●	20
S	7.5	N	10	0.2	-	●	21
S	6.2	N	10	0.1	-	●	22
S	2.7	N	10	0.1	-	●	23
S	4.2	S	10	0.1	-	◎	24

57

一九二五年四月二日 「硫黄いろした天球を」 「そのとき嫁いだ妹に云ふ」 『発電所』 「はつれて軋る手袋と」 創作日付の日

『春と修羅』 第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
SSW 6.8	S	10	-	8.3	2
- 0.4	S	10	-	7.2	6
- 0.4	Sk Sc	10	0.0	10.1	10
W 4.0	Sc Sk	10	0.0	14.8	14
NW 7.3	Sk	10	-	8.4	18
N 2.7	Sk Kc	10	-	5.0	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

「記事と考察」盛岡 雨と霧 3・42―霧 9・10。月の暈 19・55―21・35、23・50。
 『発電所』は岩根橋のカーバイド工場と、川を挟んでほぼ向かい合う位置にあった。作品に天候が反映している表現は「二十日の月の錫のあかり」というものである。層雲につつまれて光を失った月の色であろう。この日の月は旧暦三月一〇日、月齢は八・五で、月の入りは一時五六分。月齢の判断を間違っている。
 「はつれて軋る手袋と」は、岩根橋から花巻方向へ約二〇キロの夜道を徒歩で帰っている途中の作品。下書稿(三)の手入形に「三郎沼の岸からかけて」とあるのは、花巻市の東の郊外幸田にある三郎堤の通称。
 深夜を過ぎた時刻であるとすれば、六・七メートルの風でも、下書稿(一)にいう「松山いちめん／風がごうごう吹いてある」状況はあったであろう。雪道が「雲につづいて氷河になり」、「ある松むらの／こずゑがくもにまぶされ」たり、「月が怒って巨きな喪服をつけ」るのも、層雲や雨雲のためである。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
S 5.4	N S	10	0.1		●	1
SSE 5.5	N S	10	0.0		●	2
S 5.1	N S	10	0.0		●	3
SW 3.3	S	10	0.0		◎	4
S 4.3	S	10	-	-	◎	5
SSE 4.0	S Sk	10	-	-	◎	6
SW 2.6	S	10	-	-	◎	7
WSW 0.9	S	10	-	-	◎	8
S 1.3	S Sk	10	-	-	◎	9
S 3.2	Sk S	10	-	-	◎	10
SSE 4.6	Sk S	10	-	-	◎	11
SSE 5.8	Sk S	10	-	0.25	◎	12
S 7.8	Sk S	10	-	0.05	◎	13
WSW 4.6	N S	10	0.0	-	●	14
NNW 1.0	N S	10	0.2	-	●	15
SE 3.4	N S	10	0.1	-	●	16
SE 3.0	Sk Sc	10	0.0	-	◎	17
S 4.4	Sk Sc	9	-	-	◎	18
S 4.1	Sk C	4	-	-	①	19
S 2.6	Cs Sc	7	-	-	①	20
SSE 2.5	Cs Sc	7	-	-	①	21
S 3.9	Cs S	6	-	-	①	22
WNW 2.4	-	0	-	-	○	23
WSW 2.1	Cs	10	-	-	◎	24

一九二五年四月三日 「はつれて軋る手袋と」創作日付の日翌日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
SW 0.6	Sc	10	-	0.5	2
N 4.6	Sk	10	-	0.1	6
NNW 8.5	Sk	4	0.0	2.8	10
NW 10.0	Sk S	8	-	2.9	14
N 4.2	N Sk	10	0.0	0.0	18
W 2.5	N	10	0.0	-0.9	22

7・48、14・10……。

〔記事と考察〕盛岡 雪 8・58 | 9・23、11・42 | 14・52、22・27 | 22・35。水沢 雪 6・35 | 四月とは言え、盛岡で結氷も記録されている寒い朝である。終雪は九日。

この日は、盛岡でも水沢でも、朝、わずかに雪がふっているが、日照もある。早朝は層雲が出ている。晨光が蜜のいろに見えたのは、薄い朝焼けの状態であろうか。盛岡も水沢も地上は北の風が記録されているが、午前六時の雲の動きは、水沢で北西の風が記録されている。

生前発表形および下書稿(一)に「林は西のつめたい風の朝(中略)……雲はまばゆく奔騰し/野原の遠くで雷が鳴る……/林のバルサム匂ひを加へ/あたらしい晨光の蜜を塗って/わたくしはまたこの白い小麦の菓子を食べる」と描かれた状況では、層積雲はでているのだが、雷鳴の記録だけがない。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
N 1.1	S Sc	10	-		☉	1
N 4.7	Sk S	10	-		☉	2
N 7.5	Sk S	10	-		☉	3
N 8.2	Sk S	10	-		☉	4
N 6.8	Sk S	10	-	-	☉	5
N 8.1	Sk S	8	-	-	☉	6
N 7.1	Sk	9	-	0.34	☉	7
NNW 6.9	Sk	8	-	1.00	☉	8
N 5.3	N S	10	0.0	1.00	✕	9
NNE 4.1	Sk	10	0.0	0.61	☉	10
NNE 6.7	Sk	10	-	-	☉	11
NNE 5.7	N S	10	0.0	0.15	✕	12
NNW 5.3	N S	10	0.0	-	✕	13
NW 5.6	N	10	0.0	-	✕	14
NE 3.4	Sk S	10	0.0	0.16	☉	15
WNW 6.5	Sk S	9	-	0.39	☉	16
NW 3.0	Sk	9	-	0.70	☉	17
NW 4.8	Sk S	4	-	0.19	⊙	18
WNW 3.2	Sk	9	-	-	☉	19
NW 2.6	Sk	9	-	-	☉	20
W 1.4	Sk	9	-		☉	21
W 3.2	Sk	10	-		☉	22
W 1.8	Sk	10	0.0		☉	23
WNW 3.3	Sk	10	-		☉	24

一九二五年四月五日 『朝餐』創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
N 0.6	Cs	10	-	5.0	2
NNW 1.9	Kc Ck	10	-	3.4	6
N 1.6	Sc Sk	10	-	10.6	10
NNW 2.8	N Sk	10	0.0	11.7	14
N 1.2	N	10	0.4	9.5	18
NW 0.7	S	10	0.1	8.3	22

『春と修羅』第一集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 日の暈 9・45—10・40。
 この日、午後には盛岡でも水沢でも雨が降ったが、午前中は風も穏やかであったし巻層雲や高層雲が出て曇っているから、煙は低くただよったであろう。曇り日に、「烈しいかげらふ」が立つかどうかが疑問のあるところだが、巻層雲や高層雲が薄い雲だった場合は無いわけではない。だが、「……ああお燃える山の雪……」とまであるのを見ると、短時間の現象を捉えのかもしれないが、疑問なしとしない。これは「日脚がぼろとひろがれば」の下書稿(三)の手入形(おそらく一九二四・一〇・二六・の実景に基づいたメモを用いて改作されたもの)にも使われている。この下書稿(三)の手入形は時期的に後のものかもしれないが、そのものメモを想定すれば、この日の短時間の現象に触発されて、詩人の脳裏にあった既成の表現がこの作品に出てきたような雰囲気も感じられる。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SE 0.9	Sc S	10	-		☉	1
SE 1.3	Sc S	10	-		☉	2
SE 1.0	Sc S	10	-		☉	3
NNE 1.7	Sc	10	-		☉	4
NW 3.4	Sc	10	-	-	☉	5
NNE 1.3	Sc	10	-	-	☉	6
WNW 0.6	Sk Sc	10	-	0.70	☉	7
NW 1.1	Sk	10	-	-	☉	8
S 1.1	Sc Sk	10	-	0.50	☉	9
NNE 1.5	Cs Sc S	10	-	0.16	☉	10
NNW 1.3	Sc	10	-	0.80	☉	11
W 1.8	Sc	10	-	0.49	☉	12
NW 0.5	N	10	0.0	-	●	13
W 1.1	N	10	0.0	-	●	14
W 1.5	N	10	0.0	-	●	15
NW 1.0	Sk S	10	0.0	-	☉	16
WNW 2.6	Sk	10	0.0	-	☉	17
NW 2.2	Sk S	10	-	-	☉	18
NW 1.7	N	10	0.0	-	●	19
N 1.1	N	10	0.0	-	●	20
N 1.4	N	10	0.0		●	21
NNE 1.6	Sk S	10	0.1		☉	22
NNW 1.7	S Sk	10	-		☉	23
NNW 1.3	N	10	0.0		●	24

一九二五年四月二日 五二九『春』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水量	気 温	時 刻
SW 0.9	-	0	-	-1.3	2
- 0.0	-	0	-	0.0	6
NW 1.1	Kc	2	-	11.7	10
N 3.9	Cs	6	-	18.5	14
NNW 1.2	Kc	3	-	15.0	18
W 0.6	Sk	1	-	5.9	22

〔記事と考察〕盛岡 霧 1・40―7・50。結氷終日。水沢 霜 煙霧 10―18。
この日は良く晴れて、気温も上がった。午後は風が出ている。
作品の場所は、花巻市街の西約二キロ堂前の地藏堂延命寺。杉の巨木がある。現在は二本切ら
れているが、かつては四本あったという。五本としたのは、このうちの一本が二本に分かれてい
たためか、あるいは語感のためであろう。
下書稿(二) 手入形に、その巨木のものか「堂前の広場に」「梢の影がいつぱい」落ちていると
あるから、日が高い時刻である。この時刻には、巻雲も観測されている。
下書稿(一)で「青くひかった天椀に／白金黒を盛りあげる」「地藏堂のもくもく暗い杉」と描
かれ、下書稿(二) 手入形で「……木は中天の巻雲を／二本ならんで航行する……」と描かれる
のも、実景に基づくものであろう。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SE 0.9	Sc	2	-		○	1
S 1.2	-	0	-		○	2
SE 1.2	-	0	-		○	3
- 0.4	-	0	-		○	4
ENE 1.5	-	0	-	-	○	5
NNE 1.7	-	0	-	-	○	6
NNW 1.6	S	0	-	0.65	○	7
NW 1.4	-	0	-	1.00	○	8
SSE 1.9	Sc S	1	-	1.00	○	9
WNW 0.9	Sc	1	-	1.00	○	10
WNW 1.9	Sc C	2	-	1.00	○	11
SSW 1.8	Ck Sc	6	-	1.00	⊙	12
WNW 2.3	Ck Sc	5	-	1.00	⊙	13
W 6.5	Ck Sc	6	-	1.00	⊙	14
W 7.6	Ck Sc	4	-	1.00	⊙	15
WNW 7.2	Ck	7	-	1.00	⊙	16
WNW 4.1	Ck Sc	5	-	0.95	⊙	17
WNW 2.3	Ck Sc	3	-	0.50	⊙	18
SSE 1.2	Sc	1	-	-	○	19
SE 5.1	Sc	1	-	-	○	20
SE 5.1	Sc	2	-		○	21
SSE 3.8	Sc	2	-		○	22
SSE 2.6	Sc	3	-		○	23
- 0.4	Sc S	4	-		⊙	24

一九二五年四月一八日 「地藏堂の五本の巨杉が」創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
W 0.8	-	0	-	1.5	2
WNW 0.8	Cs	1	-	1.2	6
NE 1.3	-	0	-	17.7	10
N 3.2	-	0	-	23.1	14
W 1.5	-	0	-	18.5	18
W 0.6	-	0	-	9.1	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

【記事と考察】盛岡 霧5・22―9・30。水沢 煙霧 6―18。
 一年前『春と修羅』を出版した記念日にあたる。終日快晴はめずらしい。
 この日、比較的強い北西の風が吹いたのは、午後一時頃である。この時刻に出ている雲は巻積
 雲だが、量が少ないから「巻雲は天の焦点を過ぎ」と描かれた雲は実景に近いだろう。「東は青い
 シガーのけむり」とあるのは、煙霧だろう。
 「つづけてのぼるのろしの雲や」は、巻積雲か焚き火の煙かわからない。
 「西風が吹き西風が吹き」と歌われた風も、長時間に渡って吹き荒れたものではない。
 下書稿（一）の手入形には「かへりみられず棄てられた／詩の憤懣にも風が吹き」とある。詩
 人の心情の波立ちが外界の風を捉えた作品かもしれない。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SE 4.1	-	0	-		○	1
S 2.3	-	0	-		○	2
SSE 1.5	-	0	-		○	3
SSE 1.8	-	0	-		○	4
NE 2.2	-	0	-	-	○	5
NW 1.9	-	0	-	-	○	6
NE 3.3	-	0	-	-	○	7
W 4.4	-	0	-	0.68	○	8
S 1.9	-	0	-	1.00	○	9
SW 4.6	Ck	0	-	1.00	○	10
W 6.5	Ck	0	-	1.00	○	11
WSW 8.1	Ck Cs	1	-	1.00	○	12
NW 9.3	Ck	1	-	1.00	○	13
NW 6.8	Ck	0	-	1.00	○	14
W 5.8	Ck	0	-	1.00	○	15
WNW 4.7	-	0	-	1.00	○	16
WNW 5.3	Ck	0	-	1.00	○	17
NW 4.6	Ck	1	-	0.80	○	18
SE 2.3	Ck	0	-	-	○	19
ESE 1.5	-	0	-	-	○	20
ESE 2.3	-	0	-		○	21
- 0.1	-	0	-		○	22
SSE 1.8	Sk	1	-		○	23
SE 1.8	Sk	0	-		○	24

一九二五年四月二〇日 「風が吹き風が吹き」創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
NW 0.6	-	0	-	4.6	2
- 0.1	Cs	10	-	4.3	6
NW 0.5	Cs C	10	-	14.6	10
S 7.4	Ck Cs	10	-	21.9	14
S 4.9	Sc Sk	10	-	14.8	18
SSW 0.9	Sc	10	-	11.9	22

〔記事と考察〕盛岡 霧4・44―7・15。水沢 煙霧6―14。
 作品では、「ランプ小屋」のことがいわれているから、花巻駅付近のことか。「ひばだの／盛りあがった松ばやしだの／いちどにさあつと青くかはる」というのは、「清明どき」の急速な季節の変化を意味しているであろうから、天候を反映した表現は下書稿(二) 手入形で「いちぢけて矮(誤字を校訂)い防雪林の杉並あたり／ぎらぎらひかるかげらふが／せはしくせはしくはたらいて(『校本全集』を原稿によって校訂)すつかりきれいにするのです／また紺青の地平線から／青くわななく金属線が渡されて」とある部分である。
 気象データを見ると、煙霧が記録されているから「紺青の地平線」も見えたであろう。」ぎらぎらひかるかげらふ」は午前中のことであろうか。日照があつて風がないからである。
 「防雪林の杉並」は鉄道線路ぞいのものが考えられる。

a 盛岡气象台データ

63

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
S 2.3	Sk	2	-		○	1
- 0.2	Sk	4	-		⊙	2
- 0.1	Sk	4	-		⊙	3
WNW 1.2	Sk Sc	6	-		⊙	4
ESE 0.8	Ck Sk	7	-	-	⊙	5
SE 1.1	Sc Ck Sk	10	-	-	◎	6
S 2.1	Ck Sc Sk	9	-	-	◎	7
SW 2.2	Ck Sk	8	-	0.60	◎	8
W 0.6	Ck	2	-	1.00	○	9
SW 1.7	Ck	4	-	1.00	⊙	10
S 5.2	Ck	6	-	1.00	⊙	11
S 7.2	Ck Sc	8	-	1.00	◎	12
S 5.0	Ck Sc	9	-	1.00	◎	13
S 6.8	Ck Sc	9	-	1.00	◎	14
S 9.4	Ck Sc	10	-	1.00	◎	15
SW 9.7	Ck Sc	8	-	0.70	◎	16
S 8.2	Kc Sc	10	-	0.80	◎	17
S 6.8	Kc Sc	10	-	-	◎	18
S 6.0	Kc Sc	10	-	-	◎	19
S 3.9	Kc Sc	10	-	-	◎	20
SSE 2.3	Kc Sc	10	-		◎	21
SE 2.3	Sc Sk	10	-		◎	22
NE 0.8	Sc Sk	10	-		◎	23
NE 0.8	Sc Sk	10	-		◎	24

一九二五年四月二日 『清明どきの駅長』 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
N 0.9	Sc	10	-	12.7	2
N 1.5	Sc	10	-	10.7	6
S 5.4	Cs	10	-	15.6	10
SSE 6.6	Sk Kc	10	-	17.3	14
SSE 4.3	Sc	10	-	13.7	18
SSW 2.0	Sc	10	-	11.7	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

この日、夜になると雷鳴などが記録されているが、午後二時頃までは曇天でも充分に日照がある。半透明で薄い高層雲が多かったのであろうか。下書稿(一)に「風はやはらかなチモシイを吹くし/(中略)/そこに一本古ぼけたレントゲンの木が/枝にぶつぶつ硫黄の粒を噴いてゐる/幾層暗むその梢で/日はかゝやかに分割する」とあるのも、そのように見れば、データと一致する。

ただ、下書稿(二)手入形に「北北東の風が吹いて」と書き込まれているのだが、北北東の風や北東の風が吹いた時刻は早い。風の方向については、やはり、データをそのまま当てはめるわけにはいかないようである。

〔記事と考察〕盛岡 雷鳴21・40。水沢 煙霧 10-18。
作品の舞台は小岩井農場。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NNE 1.1	Sc	10	-		☉	1
N 2.3	S Sc	7	-		①	2
N 2.2	S Sc	8	-		☉	3
N 2.6	S Sc	8	-		☉	4
NNE 3.0	Ck Sc	9	-	-	☉	5
NNE 2.7	Sc S	10	-	-	☉	6
NNE 3.8	Sc	10	-	-	☉	7
NNE 4.5	Sc Cs	10	-	0.40	☉	8
NW 1.5	Sc Cs	10	-	0.83	☉	9
S 2.5	Sc Kc	10	-	0.97	☉	10
S 5.5	Sc S	10	-	0.89	☉	11
S 6.2	S Sc	10	-	0.92	☉	12
SSW 7.3	Sc S	10	-	1.00	☉	13
SW 7.6	Sc Sk	10	-	1.00	☉	14
SSW 8.4	S Sk Sc	10	-	0.40	☉	15
S 7.5	S Sc Sk	10	-	-	☉	16
S 8.3	S Sk Sc	10	-	-	☉	17
S 7.9	S Sk Sc	10	-	-	☉	18
S 4.7	Sc Sk	10	-	-	☉	19
SW 4.7	Sc Sk	10	-	-	☉	20
S 4.3	Sc S Sk	10	-		☉	21
SSW 3.3	N S	10	0.0		●	22
S 1.2	N	10	0.1		●	23
S 1.9	N	10	0.3		●	24

一九二五年五月七日

『遠足統率』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.1	Cs	10	-	-0.2	2
- 0.0	C Cs	10	-	-0.1	6
SSE 4.3	Cs	10	-	11.1	10
SW 6.8	C	0	-	16.9	14
S 4.6	Cs	10	-	12.7	18
S 1.2	Sc	10	-	8.9	22

「記事と考察」盛岡 月暈 2・37―3・43。日暈 6・11―13・35。雷鳴 20・25―20・40。水沢月の暈 2、6。

この日については、同伴した森荘巳池の追憶記があり、⁽¹³⁾月に月かさがかかって、星がひとつも見えない地平」と記す。データでは曇天だが、巻層雲、高層雲が薄い雲だったのであろう。作品に「つめたい風はそらで吹き／月のかけらの銀斜子」とあるのは、これを裏付ける。月は、旧曆四月十八日で、月齢一八・〇の月だが、雲を通して光を失っているから「月のかけら」と見えたのではないか。「しかもこの風の底の／しづかな月夜のかれくさは」と地上に風がないことを描いているのも、データと一致する。月の出は二一時三七分。

「氷雨が降ってゐるのではない／かしがかれはを鳴らすのだ」とあるのは枯れ葉の音にも雨を連想させるほど曇っていたことを暗に示していよう。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SE 0.6	Cs	3	-		①	1
SE 1.3	Cs	6	-		①	2
ESE 2.0	Cs Sc	10	-		◎	3
ESE 1.5	Cs Sc	10	-		◎	4
- 0.1	Sc Cs	10	-	-	◎	5
- 0.0	Cs Sc	10	-	-	◎	6
- 0.1	Cs	10	-	0.85	◎	7
S 1.9	Cs	10	-	1.00	◎	8
S 3.5	Cs Ck	10	-	1.00	◎	9
S 4.6	Cs Sc	10	-	1.00	◎	10
S 4.1	Cs Sc	10	-	1.00	◎	11
S 4.9	Cs Sc	10	-	1.00	◎	12
S 5.7	Cs Sc	9	-	1.00	◎	13
S 5.3	Sc Ck	2	-	1.00	○	14
S 7.8	Ck Sc	3	-	1.00	①	15
S 6.3	Ck Sc	6	-	1.00	①	16
S 6.7	Ck Sc	8	-	1.00	◎	17
SSE 5.9	Ck Sc	10	-	1.00	◎	18
SSE 5.7	Ck Sc	10	-	0.13	◎	19
SSE 5.5	Cs Sc	10	-	-	◎	20
SSE 3.0	Cs Sc	8	-		◎	21
SSE 1.2	Sc	10	-		◎	22
SSE 2.2	Sc	10	-		◎	23
SSE 1.7	Sc	10	-		◎	24

一九二五年五月二〇日 「つめたい風はそらで吹き」創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向	風力	雲形	雲量	降水量	気温	時刻
S	0.5	Sc	10	-	7.2	2
-	0.4	Sk	10	-	5.7	6
S	4.7	Sk	3	-	16.4	10
S	6.1	Kc	0	-	19.4	14
S	6.9	C Cs	2	-	17.0	18
S	4.1	Cs Kc	5	-	10.8	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

午前中の晴天の山にふさわしい。
 う日が照ると空気の渦がぎらぎらたつて／いたゞきの雪もあを煮えるやう」という表現も、
 じることができたであろう。
 『国立公園候補地に関する意見』に於いていえば、「どうですか、この溶岩流は／(中略)／か」

下書稿(一) 手入形に「あかるく巨る禁欲の天／あをあを燃える山の岩塩／睡酸のほひが帽子いっばいで／(中略)／水のやうに谷をわたる風の流れと／まつしろにゆれる朝の裂しい日光とから／(三、四字不明)の睡酸を保護してゐる」と描いた朝日の光はデータとも一致する。
 すっかり風のないだこの朝なら、山の冷氣降りてきて「つめたい風がながれる」のも、肌で感じる

〔記事と考察〕盛岡 日の暈7・50―8・37。
 前記の森荘巳池の追憶記にもこの日の天気については記していない。
 晴天で風がない朝であった。

a 盛岡气象台データ

風向	風力	雲形	雲量	降水量	日照時数	天候	時刻
SSE	1.3	Sc	10	-		☉	1
SSE	0.9	Sc Sk	10	-		☉	2
ESE	2.3	Sc Sk	10	-		☉	3
-	0.2	Sk	10	-		☉	4
-	0.4	Sc Sk	10	-	-	☉	5
-	0.4	Sc Sk	10	-	-	☉	6
ESE	0.5	Kc Sk	10	-	0.15	☉	7
SSW	0.9	Kc Cs Sk	5	-	1.00	⊕	8
S	4.1	Kc Cs Sk	4	-	1.00	⊕	9
S	6.3	Kc Cs	3	-	1.00	⊕	10
S	5.1	Cs	1	-	1.00	○	11
SSE	5.3	Cs	0	-	1.00	○	12
SSE	6.5	Cs	0	-	1.00	○	13
SSE	7.1	Cs	0	-	1.00	○	14
SSE	5.6	Cs	0	-	1.00	○	15
SSE	6.1	Cs	0	-	1.00	○	16
SSE	6.2	C Cs	1	-	1.00	○	17
S	4.9	Kc Cs	7	-	1.00	⊕	18
SSE	4.6	Cs Sc	10	-	0.34	☉	19
S	8.1	Sc	8	-	-	☉	20
SSE	6.4	Sc	10	-		☉	21
SSE	5.9	Sc	9	-		☉	22
SSE	3.1	Sc S	10	-		☉	23
SE	1.1	Sc Sk	10	-		☉	24

一九二五年五月二一日 『春谷暁臥』 『国立公園候補地に関する意見』 創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.1	Cs	3	-	6.9	2
- 0.4	Cs	4	-	9.6	6
NNE 0.8	K Cs	0	-	18.9	10
NW 5.1	Sk K	9	-	20.4	14
SSW 4.9	Kc Cs Ck	10	-	16.0	18
S 2.3	Sk	10	-	11.1	22

「記事と考察」盛岡 霧3・50―5・35。日の量6・53―8・10、15・45―16・15。波状雲6・48―7・05。水沢 煙霧10。

作品中で気象と関連する表現は、「そらでは春の爆鳴銀が／甘ったるいアルカリイオンを放散し」とあるだけだが、「爆鳴銀」が雷雲を意味するのであれば、積雲・層積雲が発生しているので、これが関連するであろう。

下書稿(二)で「草を焼かうとして／馬か山羊かの蹄も焼けば」とあることから、焚き火をしていると考えれば、比較的風が穏やかだったこの日の午前中がふさわしい。

a 盛岡気象台データ

67

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
ESE 1.2	Sk	3	-		①	1
SE 2.0	Sk	1	-		○	2
SE 1.5	-	0	-		○	3
E 0.5	-	0	-		○	4
NNE 1.8	Sk	0	-	-	○	5
- 0.3	-	0	-	0.40	○	6
NNW 0.6	Cs Ck	7	-	1.00	①	7
SW 0.8	Cs K	7	-	1.00	①	8
NE 1.1	K Ck	4	-	1.00	①	9
N 1.8	Sk K	3	-	1.00	①	10
NE 1.8	Sk K	4	-	1.00	①	11
WNW 3.7	Sk K	9	-	0.90	◎	12
WNW 7.7	Sk K	10	0.0	0.40	◎	13
WNW 4.4	Sk	10	-	0.20	◎	14
WNW 6.1	Sk Ck	10	-	0.10	◎	15
W 7.2	Sk Cs Ck	10	-	0.20	◎	16
WNW 2.5	Sk Ck	10	-	0.45	◎	17
N 2.2	Sk	9	-	0.15	◎	18
N 2.0	Sk	8	-	0.70	◎	19
N 2.7	Sk	7	-	-	①	20
S 2.7	Sk	7	-		①	21
S 1.6	Sk	8	-		◎	22
S 2.2	Sc Sk	9	-		◎	23
S 2.1	Sk	10	-		◎	24

一九二五年五月二五日

「あちこちあをじろく接骨木が咲いて」創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.4	三	10	-	14.1	2
- 0.3	Sk	10	-	12.6	6
N 0.8	Sk Kc	10	-	19.9	10
SE 0.8	Sk K	10	-	22.7	14
S 3.3	Sk Kc	4	-	17.9	18
S 1.7	C Sk	1	-	14.4	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 雷鳴13・24―14・46。雷光20・35―20・40。虹17・23―17・40。水沢霧
1・30―6・00。雷鳴14・58。
下書稿(一)に「たてがみと、残りの夕陽にみだす馬」とあるから、時間は夕陽のころ。この
日は、積雲、積乱雲、あるいは層積雲がでている。
「Largoや青い雲滄やながれ／玉髓焦げて盛りあがり」とあり、「雲の羊毛たちまち縮れて日輪
をかくし／また行きすぎでは青々くらむ松並木」と描かれた雲はデータの示す通りである。
「暗む山脈のいちいちの曇と縞とに／純白な霧の火むらが燃えあがる」と捉えられた情景は、
谷の夕立の後なのであろうか。この日、水沢と盛岡では雷鳴を記録し、盛岡では虹を記録してい
る。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SE 2.0	Sk Sc	5	-		⊙	1
SE 3.7	Sk Sc	5	-		⊙	2
ESE 1.8	Sk Kc	10	-		⊙	3
E 0.9	Sk Kc	10	-		⊙	4
N 0.9	Sk Kc	9	-	-	⊙	5
NE 1.3	Sk Kc	6	-	-	⊙	6
S 1.3	Kc Sk	3	-	0.45	⊙	7
WSW 1.0	Sk Kc	2	-	1.00	○	8
ESE 1.5	Kc Sk	3	-	1.00	⊙	9
S 2.6	Kc Sk	4	-	1.00	⊙	10
S 1.9	Sk Kc	3	-	1.00	⊙	11
S 2.5	Sk K	4	-	1.00	⊙	12
WSW 2.0	Sk K	5	-	1.00	⊙	13
WNW 5.4	K Sk	5	-	0.90	⊙	14
NNW 5.3	Kc K Kn	6	-	0.85	⊙	15
NNE 4.1	K	3	-	1.00	⊙	16
W 6.5	K	3	-	1.00	⊙	17
NW 5.6	K Kn	6	-	1.00	⊙	18
WNW 4.7	Sk K	7	-	0.50	⊙	19
NNW 2.9	Sk	2	-	-	○	20
NNW 1.8	Sk Kc	6	-		⊙	21
ESE 1.8	Sk	10	-		⊙	22
NE 1.0	Sk	8	-		⊙	23
NNE 0.9	Sk	8	-		⊙	24

一九二五年五月三十一日 「Largoや青い雲滄やながれ」創作日付の日

a 盛岡気象台データ

風向風力	雲形	雲量	降水量	日照時数	天候	時刻
NNE 1.3	Sc Kc	4	-		⊙	1
NNE 2.1	Sc	1	-		○	2
NNE 1.6	Sc	2	-		○	3
N 1.8	Sc	2	-		○	4
SE 1.0	Sc S	2	-	-	○	5
S 1.5	Sc S	3	-	0.60	⊙	6
SSW 1.9	Sc S	2	-	1.00	○	7
SSW 1.9	Sc S	4	-	1.00	⊙	8
S 1.1	K	0	-	1.00	○	9
SW 1.9	K	0	-	1.00	○	10
NNW 2.0	K	0	-	1.00	○	11
N 6.7	K	0	-	1.00	○	12
N 6.7	K	1	-	1.00	○	13
N 8.2	K Sk	1	-	1.00	○	14
NNE 7.9	Sk K	1	-	1.00	○	15
N 7.8	Sk Sc K	3	-	1.00	⊙	16
N 6.9	K Sc Ck	3	-	1.00	⊙	17
NNE 5.3	Sc K	2	-	1.00	○	18
NNE 4.4	Sc	3	-	0.50	⊙	19
NE 3.9	Sc	2	-	-	○	20
ESE 2.1	Sc	1	-		○	21
SE 0.6	Sc Sk	1	-		○	22
ENE 2.3	Sk	2	-		○	23
NE 0.9	Sk	1	-		○	24

b 水沢天文台データ

風向風力	雲形	雲量	降水量	気温	時刻
- 0.2	-	0	-	11.4	2
SE 1.3	-	0	-	11.1	6
- 0.2	Sk	0	-	18.2	10
- 0.2	Sk	0	-	24.1	14
S 3.9	Sk	7	-	18.7	18
S 3.4	Cs	3	-	13.4	22

〔記事と考察〕盛岡 煙霧7—24。水沢 煙霧14—22。

盛岡の記録で煙霧を記すことが少ないだけに、この記録は注目される。

この日は一日良く晴れた、煙霧に霞む、おそらく風の爽やかな日であった。

下書稿(一)に「つやつやひかるアネモネの旋は／青ぞらに白くながれやうし／すゞらんにほひをはこぶつめたい風もあるにはあらう」とあるのも、下書稿(二)に「そらは一つの巨きな孔雀石の椀で」と比喩的に表現されているのも、実景に基づく表現であろう。

ただ、この作品の場合、改稿されて『オズの魔法使い』の陶器の国にも似た童話風の「凶案」が描かれていくのだが、下書稿(三)で「ひとすじつめたい東の風が」という表現が加わり、これが下書稿(四)では、「ひとすじつめたい南の風が」に改められている。この改稿には意図的虚構の雰囲気がある。

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
S 1.2	Sk	10	-	13.2	2
SW 0.6	Sk	10	-	13.8	6
S 1.8	Sk	10	-	18.1	10
S 2.6	C Ck K	10	-	22.5	14
SSW 5.0	C Sk	10	-	19.4	18
S 1.3	Sk	0	-	15.3	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 日の暈10・45―12・12・18。雷鳴16・02―16・39、17・02―17・15。みると、この日は曇天で、層雲が出てはいるが、日がのぼってから一時広がった様子があるから、これは霧雲だったのだろうか。層積雲にはレンズ状層積雲の他、波層積雲のような変種も含まれるとあるから、縞状の雲もあつたのかもしれない。午後は夕立が近くであつたのであろう。そうであれば下書稿(二)に「眼をあげれば わづかにひかる／雲の縞の冴えと／岩鐘の青いたたずみと」とあるのは、事実に近いであろう。

作品の場面は、下書稿(一)の題名が「樋番」であること、下書稿(三)に「いたづめ樋をまもる」とあることなどから、花巻農学校の実習田の取水口付近と推定される。かつては樋のそばに「出羽三山の碑」も在ったという。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSE 3.9	Sk	10	-		☉	1
S 3.7	Sk	10	-		☉	2
SSE 3.1	Sk	10	-		☉	3
S 1.6	Sk	10	-		☉	4
SE 2.5	Sk S	10	-	-	☉	5
S 2.4	Sk S	10	-	-	☉	6
S 2.7	Sk	10	-	-	☉	7
SW 3.6	Sk S	10	-	-	☉	8
SSE 3.1	S Sk	10	-	-	☉	9
SSE 3.9	S Sk	10	-	-	☉	10
SSE 2.7	Cs Sc	10	-	0.40	☉	11
SSW 2.6	Cs Ck	10	-	1.00	☉	12
SSW 2.4	C Ck	10	-	1.00	☉	13
SSW 2.3	C Kn	10	-	1.00	☉	14
S 2.6	C Sk	10	-	1.00	☉	15
SSW 3.2	Kn Sk	10	-	0.92	☉	16
S 2.3	Sk Kn	10	0.0	-	☉	17
S 4.1	Sc C	10	-	-	☉	18
SSE 6.4	C Sk	8	-	-	☉	19
S 5.5	Sk Kc	8	-	-	☉	20
S 4.8	Sc Sk	5	-		①	21
SSE 3.9	Sk	2	-		○	22
SSE 3.2	Sk	2	-		○	23
SE 3.1	Sk Sc	4	-		①	24

一九二五年六月二日 『湧水と座禪』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.2	S	10	-	20.5	2
SSW 0.8	S	10	-	19.9	6
SSW 2.9	Cs Sk	7	-	24.7	10
S 5.6	Kc Sk	2	-	30.1	14
S 3.4	Sk	2	-	28.4	18
S 2.4	-	0	-	23.3	22

〔記事と考察〕盛岡 霧2・18―9・30。煙霧10―18・19。水沢 煙霧14―18。
この日の三作品を時間の順序に並べると、『鉾染とネクタイ』は早朝。『種山ヶ原』が朝、『岩手軽便鉄道 七月(ジャズ)』が夕方の作品である。『鉾染とネクタイ』の場面が種山ヶ原の高地で、層雲の上が晴れていたため、データと少し印象が合わない事になるであろう。月齢は二七・九。月の出は二時四九分。『鉾染とネクタイ』の「空いちめんがイリドスミンの鉾染だ」は一面の星空を描いたもの。この日は、朝層雲が発生して山も多分霧が深く、夕方は積雲・高層雲が出ている。夜は良く晴れていた。『種山ヶ原』は複雑な成立過程を持つ作品だが、下書稿(一)に即して見て、天象と関連がある表現は、「(まっ青)に朝日が融けて」、「谷の底にはまだ融けのこるパラフキンの霧」「土耳古玉の天椀」など、『岩手軽便鉄道 七月(ジャズ)』では、「積雲が灼やうが崩れやうが」と積雲を捉えた。いずれもデータと一致する。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSE 2.7	S	10	-		☉	1
SSE 3.0	S	10	-		☉	2
SSE 2.9	S	10	-		☉	3
SSE 2.7	S	10	-		☉	4
SSE 2.4	S	10	-	-	☉	5
SE 2.0	S	10	-	-	☉	6
S 2.9	S	10	-	-	☉	7
SSE 2.5	S	10	-	-	☉	8
SSE 3.8	S	10	-	-	☉	9
S 4.0	Ck S	7	-	0.05	⊙	10
SSE 4.1	Ck K	4	-	1.00	⊙	11
SE 4.7	Ck C K	5	-	1.00	⊙	12
SSE 4.1	C Ck K	7	-	1.00	⊙	13
S 4.0	K C Kn	7	-	1.00	⊙	14
S 3.1	Kn K Cs	8	-	0.90	☉	15
S 2.2	Kn K Sc	5	-	0.40	⊙	16
S 1.8	K Kn Sc	3	-	1.00	⊙	17
SSW 2.0	K Sc	3	-	1.00	⊙	18
SSW 1.5	Cs Sc	6	-	0.15	⊙	19
NE 0.6	Sc Cs	4	-	-	⊙	20
NNE 0.9	Sc	3	-		⊙	21
- 0.1	Sc	2	-		○	22
ESE 2.3	-	0	-		○	23
ESE 1.1	Sc	1	-		○	24

71

一九二五年七月一九日 『鉾染とネクタイ』 『種山ヶ原』 『岩手軽便鉄道 七月(ジャズ)』 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
- 0.4	Sk Kn	10	-	23.5	2
E 2.2	N Kn	10	18.7	21.1	6
S 2.0	S	10	13.6	21.0	10
S 2.3	Sc Sk	10	-	23.6	14
S 0.6	Sc Sk	10	-	23.5	18
- 0.2	Sk	10	-	22.2	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕水沢・盛岡で雷雨が深夜から朝まで。水沢で夜も雷鳴。早朝は、相当の土砂降り。雷雨は前日の午後三時から引き続きである。〔朝のうちから〕は花巻駅付近、『溪にて』は、早池峰山の縦走路の中腹にある七折れの滝が作品の場面と推定される。⁽¹⁵⁾

早朝の豪雨と雷雨がおさまるのを待ち兼ねて、詩人は早池峰山へ出掛けている。気象データでは、一時天気が回復した後、午後三時ころには、また降っている。〔朝のうちから〕の下書稿(一)には「稲田いちめん雨の脚」とか、「山の上はつめたい雲のラムネ」とか、「恍惚として雨にあらはれ／しょんぼりとして稲びかりから漂白される」と雨の朝を描いている。

『溪にて』では、下書稿(二)〜(四)で時間の経過が見られる。小康状態であった天候が再び崩れ、滝が増水し、雷もひどくなって危険を感じたため、麓まで引き返しているのだが、この日の天候をよく反映している。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NNE 2.0	N S	10	15.4		●	1
SSE 1.7	N S	10	5.1		●	2
N 1.7	N S	10	1.7		●	3
NNE 1.4	N S	10	3.7		●	4
NE 4.0	N S	10	19.9	-	●	5
ENE 0.6	N	10	3.8	-	●	6
S 1.1	N S	10	0.4	-	●	7
S 2.9	N S	10	1.5	-	●	8
S 2.2	S N	10	0.0	-	◎	9
S 3.8	N S	10	0.0	-	●	10
S 3.9	S Ck	10	0.0	0.02	◎	11
SSE 4.7	S N	10	0.0	0.40	◎	12
SSE 4.2	N S	10	0.3	-	●	13
SSE 3.3	S	10	0.0	-	◎	14
S 4.1	S	10	-	-	◎	15
S 3.4	N	10	1.3	-	●	16
SSE 3.0	S	10	3.0	-	◎	17
- 0.4	S	10	-	-	◎	18
SSE 0.6	N	10	0.5	-	●	19
SE 1.2	N	10	1.3	-	●	20
- 0.2	S N	10	0.1		◎	21
NNE 2.9	S	10	0.8		◎	22
NNE 2.8	N S	10	0.0		●	23
NNE 2.2	N S	10	0.1		●	24

一九二五年八月二〇日
〔朝のうちから〕『溪にて』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
SW 1.0	S	10	-	21.5	2
- 0.1	S	10	-	20.7	6
- 0.0	Sk	10	-	24.4	10
SSW 5.0	Sk Kc	2	-	26.4	14
S 3.9	Sk Kc	8	-	23.2	18
SSW 0.7	Sc	10	-	21.9	22

〔記事と考察〕盛岡 霧 or 霧雨 4・15―6・50。
 この日の早朝、盛岡では雨が残り、霧や層雲が出ている。
 前日の予定だったと思われる早池峰山の縦走コースを諦めた詩人は、正面登山口である河原坊に回ったわけだが、山の中はなお霧が深かったのである。『河原坊』に「檐やいたやの梢の上に／匂やかな黄金の円蓋を被り／しづかに白い下弦の月がかかっている」とあるのは、旧暦六月二二日、月齢二一・二の月。
 これが「月のまはりの黄の円光がうすれて行く／雲がそいつを耗らすのだ／いま鉛いろに錆びて／月さへ遂に消えて行く／……真珠が曇り蛋白石が死ぬやうに……」とは、データからも納得できる情景である。
 『山の晨明に関する童話風の構想』下書稿（二）の「水よりも濃いなだれの風や／（中略）／つめたい霧のジェリイもあれば／桃いろに飛ぶ雲もある／（中略）／花にきらめく一億の露」は、まさしく雨上がりの朝の情景である。

a 盛岡气象台データ

73

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NNE 1.8	S	10	0.0		☉	1
N 1.5	S	10	-		☉	2
N 1.2	N S	10	0.0		●	3
NNW 1.2	S	10	0.0		☉	4
N 1.4	S	10	-	-	☉	5
NNE 1.9	N S	10	0.1	-	●	6
NNE 2.3	S	10	0.0	0.10	☉	7
NE 2.4	S N	10	-	0.20	☉	8
NE 1.0	K S	10	-	0.50	☉	9
SE 0.8	K	4	-	0.67	⊕	10
S 1.7	K	4	-	1.00	⊕	11
SW 2.9	K	3	-	1.00	⊕	12
S 2.9	K	3	-	1.00	⊕	13
S 3.8	K Ck	4	-	1.00	⊕	14
S 4.8	K Ck	4	-	1.00	⊕	15
S 5.0	Ck K	6	-	1.00	⊕	16
S 6.0	K Ck Kn	6	-	1.00	⊕	17
S 5.4	K Ck	7	-	1.00	⊕	18
SSE 6.5	Kn Kc Ck	8	-	-	☉	19
SSE 3.0	Kc Sk	9	-	-	☉	20
S 1.1	Sk Sc	7	-		⊕	21
SE 2.3	Sc	6	-		⊕	22
ESE 1.9	S Sc	10	-		☉	23
ESE 1.9	S Sc	10	-		☉	24

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

一九二五年八月二一日 『河原坊（山脚の黎明）』『山の晨明に関する童話風の構想』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
S 3.0	S	10	-	22.0	2
S 2.9	Sk N	10	0.2	22.3	6
S 7.2	Sk	10	-	25.9	10
S 10.2	Sk C	10	-	27.7	14
SSE 4.7	C Sk	10	-	24.6	18
S 6.6	Sk	10	-	24.4	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 夕焼け18・04—18・21。
この日は朝、雨が降り、午後は日もさすが雲の多い、風がある日であった。
下書稿(二)に「アカシヤの青い火」とあるのは、風に採まれる木の姿をいったものか。「風に帽子をとられさうになり(『校本全集』を原稿により校訂)／(中略)／山では雨も降れば／ぼうと濁った陽もそそぐ」とあり、書き入れに「白金製の潦(誤字を校訂)／そいつをひとつすぽんと跳べば／もう生徒がでかけてくる」とあるのも、この日の情景に相應しい。
作者の推敲過程を見ても「終業」を「実習」としたりした後、「二点鐘」ともしているのので、授業がある時間なのであろう。いずれも気象データと一致するようである。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
WSW 2.6	S	10	-		☉	1
S 1.8	S	10	-		☉	2
S 2.7	S	10	0.0		☉	3
SSW 1.8	S	10	-		☉	4
S 1.1	S	10	-	-	☉	5
SSE 1.8	S	10	-	-	☉	6
S 3.1	S	10	0.1	-	☉	7
S 3.4	S	10	-	0.05	☉	8
S 5.0	S	10	0.0	0.07	☉	9
S 4.9	S Sc	10	-	0.34	☉	10
S 6.5	S Ck C	8	-	0.39	☉	11
S 8.9	Ck Sc C	8	-	0.90	☉	12
SSW 6.6	K Ck C	7	-	0.80	⊕	13
SSE 9.0	K Ck	7	-	0.78	⊕	14
SSE 8.9	K Ck	6	-	1.00	⊕	15
S 7.9	K Ck Cs	5	-	1.00	⊕	16
SSE 8.9	Ck K Cs	7	-	1.00	⊕	17
SSW 4.9	Ck K Cs	8	-	0.35	☉	18
SSW 5.3	Sk Ck	8	-	-	☉	19
SSW 3.0	Sk S	9	-	-	☉	20
SSW 6.2	Sk S	9	-		☉	21
S 7.1	Sk	8	-		☉	22
S 5.1	Sk	9	-		☉	23
SW 2.6	Sk	10	-		☉	24

一九二五年九月七日 『九月』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
S 0.5	Sk	0	-	13.5	2
SW 0.8	C	3	-	13.3	6
S 3.2	C Sk	8	-	22.6	10
S 3.0	Kc Sk	10	-	25.7	14
S 2.0	Sc	10	-	22.1	18
- 0.4	N	10	0.0	20.0	22

〔記事と考察〕盛岡 日暈10・27―11・45。水沢 雨21・45―22・55。
 盛岡では露の多い、風のない朝であったが、夜に入って水沢では、小雨が降っている。
 作品の場所も特定できないので、下書稿(一)に「銀のモナドと草の実の雨」とあるのが、唯
 一天候と関わるかと思われる表現だが、「まばゆさよ／わたくしは走らう」ともあるので、これを
 夜の表現と見てよいかどうか疑問もあり、この日の天候との関連を考察する資料としては不十分
 である。

a 盛岡气象台データ

75

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
SSE 1.1	Sk Kc	10	-		☉	1
SSE 0.5	Sc	4	-		①	2
SE 1.8	Sc	1	-		○	3
SE 1.5	Sc	0	-		○	4
SSE 1.0	Sc S	0	-	-	○	5
E 0.8	Sc S	0	-	-	○	6
- 0.4	Sc S	0	-	0.65	○	7
- 0.2	C Sc S	1	-	1.00	○	8
S 2.6	Sc S	2	-	1.00	○	9
S 3.7	Sc S	3	-	1.00	①	10
S 4.5	Cs Sc	4	-	1.00	①	11
SE 3.9	Sc K	6	-	1.00	①	12
S 3.0	Sc K	8	-	1.00	☉	13
S 3.0	Sc K	9	-	1.00	☉	14
S 3.4	Sc S	10	-	1.00	☉	15
S 2.6	Sc S	10	-	0.50	☉	16
S 2.4	S	10	-	-	☉	17
SSE 2.4	S	10	-	-	☉	18
S 1.5	S	10	-	-	☉	19
S 2.6	S	10	-	-	☉	20
S 2.9	S	10	-	-	☉	21
SE 2.3	S	10	-	-	☉	22
SE 1.4	S	10	-	-	☉	23
S 1.4	S	10	-	-	☉	24

一九二五年九月一〇日 『住居』 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
S 0.5	N	10	0.1	11.9	2
NW 1.5	S	10	1.2	11.5	6
WNW 0.9	N	10	0.3	13.0	10
NNW 2.9	S Sc	10	2.2	15.4	14
NNW 2.0	N	10	0.3	14.4	18
NNW 1.2	S	10	1.0	13.8	22

『春と修羅』第一集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 霧 6・32―8・30、22・18―23・40。霧雨 or 雨 18・20―22・05。
霧が深い日であった。特に夜は視程1以下の濃いものであった。
『比叡(幻聴)』とともに、雨の日の幻想的作品であることが興味深い。が、作品に気象状況を直
接表現する言葉はない。

a 盛岡气象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
ESE 1.1	S Sc	10	-		☉	1
E 0.6	S	10	-		☉	2
SE 2.3	S	10	-		☉	3
- 0.4	S	10	-		☉	4
N 1.1	S	10	-	-	☉	5
NE 1.3	S	10	-	-	☉	6
WNW 0.8	S	10	-	-	☉	7
- 0.2	S Sc	10	-	-	☉	8
N 0.8	N S	10	0.0	-	●	9
- 0.2	S	10	0.0	-	☉	10
W 0.5	N S	10	0.0	-	●	11
- 0.2	N S	10	0.0	-	●	12
N 1.2	S	10	0.0	-	☉	13
NW 2.4	S	10	-	-	☉	14
NW 3.1	N S	10	0.0	-	●	15
NNW 1.3	N S	10	0.1	-	●	16
E 0.5	N	10	0.3	-	●	17
N 1.2	N	10	0.7	-	●	18
NE 1.2	N	10	0.2	-	●	19
NNW 0.9	N	10	0.1	-	●	20
N 1.0	N	10	0.2		●	21
N 1.1	N	9	0.4		●	22
- 0.2	≡	2	0.0		○	23
NNE 1.4	S	3	-		①	24

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
N 1.9	Sk	0	-	4.9	2
N 0.7	Sk	0	-	2.5	6
ENE 0.9	Kc Sk	2	-	10.1	10
N 5.8	Sk Kc	3	-	18.0	14
NNW 0.6	Sk	6	-	13.4	18
N 1.8	Sk	0	-	7.6	22

〔記事と考察〕盛岡 霜。霧5・30―7・25。水沢 霜。霧6・50―7・40。
 晴れて穏やかな秋日の日であった。午後、雲が多い。
 秋になれば、雲間を漏れる太陽光線が放射状の模様を作ることしばしばある。作品で「そら
 っぽいの／光りでできたパイプオルガンを弾くがい」とあるのが、それを意味すると考え
 られる。
 作品には、「光りのパイプオルガン」が目の前に見えているようにには書かれていない。その意味
 で言えば、作品とこの日の天候との関連を見ることはできない。ただ、比較的雲の広がった午後
 に、「光のパイプオルガン」が見えても不自然ではない。

a 盛岡气象台データ

77

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
NNE 1.2	-	0	-		○	1
- 0.2	-	0	-		○	2
NW 0.8	-	0	-		○	3
NNE 1.0	-	0	-		○	4
NNE 1.2	-	0	-	-	○	5
W 0.8	Sk S	0	-	-	○	6
- 0.3	Sk S	0	-	0.78	○	7
S 0.5	Sk	7	-	1.00	⊕	8
WNW 1.9	Sk S	2	-	1.00	○	9
S 1.3	Sk S Sc	1	-	1.00	○	10
S 1.3	Kc Sk S	2	-	1.00	○	11
SSW 2.0	Kc Sk	3	-	1.00	⊕	12
WSW 1.3	Sk Kc	3	-	1.00	⊕	13
W 4.6	Sk Sc	4	-	1.00	⊕	14
W 5.1	Sk K	3	-	1.00	⊕	15
NW 3.4	C Ck Sk	5	-	1.00	⊕	16
NNW 1.9	Ck Sk Sc	4	-	0.80	⊕	17
NNE 1.6	Kc	3	-	-	⊕	18
NE 1.5	S	0	-	-	○	19
N 2.5	S	0	-	-	○	20
NE 2.2	S	0	-		○	21
NE 4.4	S	0	-		○	22
NNE 3.0	-	0	-		○	23
NE 3.9	-	0	-		○	24

一九二五年一月二十五日 『告別』 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

b 水沢天文台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	気 温	時 刻
NE 4.0	Sk	8	-	3.7	2
N 7.6	Sk	8	-	2.2	6
NNE 4.2	Sk	7	-	3.9	10
NW 3.0	Sk S	10	0.0	2.7	14
E 4.1	S Sk	10	0.0	1.0	18
N 1.0	Sk	4	-	-1.8	22

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 雪18・43―23・40。水沢 雪11・3―15・00。積雪22。
この日盛岡では、午前中、日も照っているが、低い層積雲がでていて、低い層積雲がでていて、午後には雲の多い天気であつた。朝は風も穏やかで冷え込みも強くない。
作品では、下書稿の入手形に「松が大きな格子を投げて／みちはまばゆい雪でいっぱい／早池^{ちや}峯^まの上では／吹雪がぼたぼた沈んでる」とあり、削除されたことばの中には「また葱^{あしな}緑のそら」といった表現が考えられている。この点からすれば、午前中の空模様には、作品の場面のような状況もあつたのではないかと考えられる。

a 盛岡気象台データ

風向 風力	雲 形	雲 量	降 水 量	日 照 時 数	天 候	時 刻
W 7.5	S Sk	2	-		○	1
WNW 10.8	S Sk	4	-		①	2
NNW 5.2	S Sk	3	-		①	3
SSE 2.2	S Sk	3	-		①	4
SE 3.6	Sk	4	-	-	①	5
S 2.6	Sk	6	-	-	①	6
NE 5.1	Sk	5	-	-	①	7
NW 1.9	Sk	3	-	0.13	①	8
WNW 4.1	Sk	7	-	0.91	①	9
WSW 2.1	Sk	7	-	0.95	①	10
WSW 3.6	Sk	8	-	0.58	◎	11
W 2.5	Sk	9	-	0.10	◎	12
W 0.9	Sk	9	-	-	◎	13
SW 4.3	Sk	10	-	0.05	◎	14
W 5.4	Sk Kc	10	-	0.95	◎	15
W 4.5	Sk Ck Cs	10	-	0.40	◎	16
W 3.4	Sk Cs	8	-	-	◎	17
W 4.1	Sk	10	-	-	◎	18
W 5.3	N S	10	0.0	-	×	19
W 6.2	N S	10	0.0	-	×	20
WNW 3.0	N	10	0.0		×	21
WSW 3.4	N	10	0.0		×	22
WNW 5.0	N	10	0.0		×	23
W 4.3	S	10	0.0		◎	24

一九二六年一月一四日 『国道』創作日付の日

b 水沢天文台データ

風向	風力	雲形	雲量	降水量	気温	時刻
W	0.8	-	0	-	-9.3	2
N	1.3	-	0	-	-11.8	6
-	0.2	-	0	-	-5.9	10
SSE	1.6	Kc	0	-	0.1	14
S	3.4	Kc	0	-	0.2	18
S	6.4	Sk	9	-	1.0	22

a 盛岡気象台データ

風向	風力	雲形	雲量	降水量	日照時数	天候	時刻
SE	2.1	Sk	3	-		⊙	1
SE	3.2	Sk	3	-		⊙	2
SW	0.5	Sk	2	-		⊙	3
ESE	0.9	Sk	1	-		○	4
-	0.1	Sk	1	-	-	○	5
N	0.5	S	0	-	-	○	6
-	0.2	S	0	-	-	○	7
-	0.0	S	0	-	0.42	○	8
SSE	1.1	-	0	-	1.00	○	9
S	0.8	-	0	-	1.00	○	10
S	1.8	-	0	-	1.00	○	11
S	3.3	-	0	-	1.00	○	12
SSE	2.7	Sk	0	-	1.00	○	13
S	4.0	Ck Sk	2	-	1.00	○	14
S	3.5	Kc Sk Ck	6	-	1.00	⊙	15
S	4.7	Sk	0	-	1.00	○	16
SSE	3.2	Sk	0	-	0.35	○	17
S	3.9	Sk	0	-	-	○	18
S	4.8	Sk	0	-	-	○	19
S	3.5	Sc S	10	-	-	⊙	20
S	2.5	N	10	0.0		※	21
WSW	0.8	N	10	1.2		※	22
-	0.2	N	10	2.8		※	23
-	0.3	N	10	0.6		※	24

79

一九二六年一月一七日 『岩手軽便鉄道の一ヶ月』 創作日付の日

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

〔記事と考察〕盛岡 強い霜1—8。強い結氷am・pm。

この日は、朝の強い冷え込みと、雲一つない晴天が注目される。

記録をたどって来て見ると、この朝が、この冬一番の冷え込みと感ぜられたはずである。この後には、水沢で氷点下一五度、一三度といった記録もあるのだが、朝の冷え込みと、このような雲一つ無い快晴が重なる日はない。作品に描かれた情景は、朝日の下での樹水の輝きとして十分想像できる。

生前発表形に「びかびかびかびか田圃の雪がひかってくる／河岸の樹がみなまつ白に凍つてある／うしろは河がうららかな火や氷を載せて／ぼんやり南へすべつてある」とあるのも、この日の天気にあふわしい。

「ははは 汽車がたうたう斜めに列をよこぎつたので／桑の水華は ふさふさ風にひかつて落ちる」とあるのも、この日が好天に恵まれていたからこそその情景である。

注1 拙稿『春と修羅』第二集における創作日付と作品番号についての「一考察」(『宮沢賢治研究Annual』3号 投稿中)参照。

2 草野心平『春と修羅』に於ける雪(草野心平編『宮沢賢治研究』十字屋書店 1939.9)

3 東和町在住の平野圭二氏の教示による。

4 宮沢賢治とも面識があつた花巻市在住の伊藤ツナ氏、および島二郎氏の教示による。

5 池上雄三『宮沢賢治心象スケッチを読む』(雄山閣1992.7)に一部気象情報も含めて指摘がある。

6 小原忠『ラジウムの雁』と関連作品(『賢治研究』24号 1980.4 宮沢賢治研究会編)参照。

7 拙稿『宮沢賢治「曠原淑女」考』(『島根大学教育学部紀要25巻・人文社会科学編』1991.12)では、風の方角を考慮していなかったが、以後はここに記した点を含めて考えたい。

8 梅木万里子『北海道修学旅行』についての新資料とその意義(『弘前宮沢賢治研究会誌』七号 1980.12 弘前大学教養部地質学研究室)参照。

9 この作品がある詩稿用紙の裏に書かれている文語詩「あな雪か屠者のひとり」は」との関連をどう捉えるかにもよる。関連があるとすれば、佐藤勝治氏が指摘する(『宮沢賢治青春の秘唱 冬のスケッチ研究』十字屋書店 1984.4)ように、豊沢橋の下手二〇〇メートルの川岸に屠殺場があつたから、豊沢川の付近の可能性が強くなる。

10 拙稿『春と修羅』第二集『命令』とその背景(『近代文学試論』30号 1992.12)参照。

11 拙稿『春と修羅』第二集『孤独と風童』とその背景(『島大国文』21号 印『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況(木村)

刷中)参照。

12 この点については、『校本全集』14巻の年譜で堀尾青史氏がすでに推定しておられる。これに多少の蛇足を加えるならば、次ぎのようなことが考えられる。

「文語詩篇ノート」の一九二五年一月の欄に「九戸郡行／安家^{あか}」「寒キノノ娘、云々」とメモがある。これを手掛かりとすれば、安家での唯一の釣り宿だったという小野芳夫氏宅に立ち寄った可能性が高い。一月六日早朝三陸海岸に出た詩人は、あるいは八戸久慈間にあつた定期便の馬車を一部利用するなどして安家で休み、大田名部港か羅賀港で便船を得て七日の夜に宮古港に着き(『春と修羅 詩稿補遺』の『発動機船 三』には測候所の信号燈が描かれているから宮古港である)、夜の船旅(午前零時宮古港発の三陸汽船がある。『発動機船 断片』には「アンデルセンの月夜」が描かれているから、多分八日早朝)の後、大槌港付近で上陸し、八日に釜石に着き、釜石の叔父の家に一泊して九日に仙人峠を越えて花巻に帰っていると推定される。なお、『旅程幻想』で「海蝕された山地の縁に沿ひ／いくつもの白い珩岩の峠を越えて」という峠はこの日に越えたものだけをいうのではなく、この旅の間に越えたものをいうのであろう。安山岩を意味する珩岩は、三陸地方の北側に分布し、詩人の足取りからいえば、久慈の小袖海岸から陸中野田へ越える部分、大田名部港から羅賀へ越える部分に珩岩の峠がある(『岩手県の地質図』博物館版、1990.3参照)。

13 森荘巳池『春谷暁臥』の書かれた日(『宮沢賢治の肖像』1974.1津軽書房)

14 花巻市南万丁目在住の菅原善衛門氏の教示による。

15 亀井茂『賢治と早池峯山 V 一詩・二題を中心にして』(『早池峯』第5号 1976.10)に「鶏頭山(一四四五米)および毛無森(一四二七米)間の溪谷、高八百数十米の地点にかゝる八七折の滝」と見る」と指摘がある。

『春と修羅』第二集創作日付の日の気象状況（木村）

付記 本稿がほぼ完成した段階で、一九九二年八月七・八日の両日花巻市定住・交流会館において開かれた宮沢賢治学会イーハトーブセンター主催の△夏期特設セミナーの席上、入沢康夫代表理事より佐藤泰平氏も気象データについて研究を進められている旨の紹介があり、佐藤氏自身からも研究の一部について発言があった。また、佐藤氏からは個人的にも「記事」に注目すべきことの教示を得た。この点を記してお礼申し上げる。

また、この稿がなるにあたっては、盛岡気象台の工藤萬氏および気象協会の方々、水沢天文台の菊池直吉氏、宮古気象台の方々から多大のご協力を得た。ここに合わせてお礼申し上げます。

なお、本稿に続くものとしての「資料と考察 『春と修羅』第三集および『詩ノート』における創作日付の日の気象状況」は、山根巴・横山邦治編『継承と展開』和泉書院刊に掲載の予定である。